

太井遺跡発掘調査概要・Ⅲ

大阪府教育委員会
河内長野市教育委員会

太井遺跡発掘調査概要・Ⅲ

大阪府教育委員会
河内長野市教育委員会

序 文

太井遺跡は河内長野市南東部の山間部に位置し、和泉山脈を水源とする石見川によって形成された川上谷の中程に立地します。現在の川上谷には棚田が広がっています。

また、石見川に沿って国道310号が通っていますが、かつてこの谷間の道は大沢峠道と呼ばれ、古くから河内と大和とを結ぶ幹線道路としても知られていました。太井からこの道を3km程北西に山を下ると、南北朝時代に南朝方の一大拠点となる観心寺があります。この地域一帯は太井郷と呼ばれる観心寺の寺領となっていたことが「観心寺文書」で確認されています。

大阪府教育委員会と河内長野市教育委員会は、府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」の実施に伴い、平成14年度より共同して発掘調査を実施しています。太井遺跡の発掘調査は、その一環として平成19年度に試掘・確認調査を実施し、平成22年度からは発掘調査を実施しているものです。

調査の結果、中世の集落跡や墓が発見され、太井郷を考古学的分野からも確認することができました。また、遺構は発見されていませんが、縄文時代の遺物が出土しており、この地における人々の生活の営みが縄文時代まで遡ることが確認できました。この成果は、現地説明会を開催し、広く一般の皆様にも公開することができました。

発掘調査の実施にあたっては、地元の皆様をはじめ、大阪府環境農林水産部、河内長野市産業振興部農林課等関係機関のご協力をいただき深く感謝いたします。

最後に、今後とも文化財保護行政にいらっしゃる皆様のご協力とご理解賜りますようお願いいたします。

平成26年3月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長 荒井大作

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、緑豊かな山々や清らかな河川に恵まれ、旧石器時代から人々の活動の痕跡が認められています。古代では中央政権で活躍する高向玄理がこの地から出ており、今に続く文化の香り高いまちと言えます。中世には、真言宗の一山寺院である観心寺、金剛寺が隆盛を極め、海外にも紹介された烏帽子形城が築城されます。また、近世には、高野山と京都・大阪・堺を結ぶ東・中・西高野街道が市内で合流することに代表されるように交通の要衝として発展してきました。これらのことから、市内には数多くの文化財が遺され、国の指定を受けた建造物や美術工芸品等が84件、史跡が3件にのぼります。これら先人達のメッセージである文化財を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であると重く受け止めていることから、本市においては、教育立市宣言の一つの柱として「文化財のまち」を位置づけ文化財保護に取り組んでおります。

本書は、大阪府農村整備事業に先立ち実施した太井遺跡の発掘調査の成果を収録しています。今回の調査では、平成23年度調査に引き続き、中世の集落と墓地が確認されました。皆様の文化財への理解を深めていただくと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用していただければ幸いです。

調査にご協力いただきました方々に、末尾ながら謝意を表すものです。

平成26年3月

河内長野市教育委員会
教育長 和田 栄

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会事務局文化財保護課が大阪府環境農林水産部の依頼を受けて実施した、府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」に伴う太井遺跡（河内長野市太井所在）の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会と河内長野市教育委員会が締結した「府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」にかかる埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」に基づいて共同して実施した。
3. 平成24年度の発掘調査は二次にわたって実施した。一次調査は大阪府教育委員会事務局文化財保護課調査第二グループ主査 竹原伸次が担当し、平成24年6月4日から平成24年7月17日まで実施した。
二次調査は河内長野市教育委員会事務局ふるさと文化課副主査 島津知子と竹原が担当し、平成24年8月2日から平成25年1月23日まで実施した。
遺物整理は、大阪府教育委員会文化財調査事務所および河内長野市立ふるさと歴史学習館において、調査管理グループ主査 三宅正浩、同副主査 藤田道子と竹原、島津が担当し、平成24年度から平成25年度に実施した。
4. 一次調査の調査番号は、12013（大阪府教育委員会）、OOH2-1（河内長野市教育委員会）、二次調査の調査番号は、12028（大阪府教育委員会）、OOH2-1（河内長野市教育委員会）である。
5. 一時調査の基準点測量は、株式会社ケイズに委託して実施した。
二次調査の写真測量は、写測エンジニアリング株式会社大阪支店に委託して実施した。撮影フィルムは同社が保管している。
6. 本書に掲載した遺物の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
7. 本調査で出土した鉄製品の保存処理は、株式会社吉田生物研究所に委託した。
8. 本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
9. 本書の執筆・編集は島津、竹原が担当した。
10. 発掘調査、遺物整理及び本書の作成に要した経費は、事業者である大阪府環境農林水産部と発掘調査にかかる地元負担分相当額を文部科学省の補助を得て大阪府教育委員会が負担した。
11. 本書は300部作成し、一部あたりの印刷単価は693円である。

目 次

序文（大阪府教育委員会）

序文（河内長野市教育委員会）

例言

第1章	調査に至る経過と環境（竹原）	1
第2章	一次調査の成果（竹原）	4
第3章	二次調査の成果（烏津・竹原）	13
第4章	まとめ（烏津・竹原）	42

図版

抄録

挿図目次

第1図	太井遺跡調査区位置図	2
第2図	周辺遺跡分布図	3
第3図	1トレンチ遺構図及び断面模式図	5
第4図	1トレンチ遺構出土遺物	6
第5図	1トレンチ包含層出土遺物	7
第6図	常滑焼大甕線刻（1/2）	8
第7図	2トレンチ遺構図及び断面模式図	9
第8図	2トレンチ土坑19出土遺物	10
第9図	2トレンチ土坑20出土遺物	11
第10図	3トレンチ平面図	12
第11図	3トレンチ断面模式図	12
第12図	1区・2区調査区位置図	13
第13図	1区・2区遺構図	14
第14図	1区・2区土層断面図	15・16
第15図	1区土坑1平面図・立面図及び土坑9・溝1平面図	18
第16図	1区土坑23平面図・立面図	21
第17図	1区遺構断面図	22
第18図	1区遺構出土遺物実測図1	24
第19図	1区遺構出土遺物実測図2	25
第20図	1区土坑23出土遺物実測図	26
第21図	1区包含層出土遺物実測図1	27
第22図	1区包含層出土遺物実測図2	28
第23図	1区出土石器実測図	29
第24図	5区遺構図及び断面模式図	31
第25図	5区遺構出土遺物	32
第26図	5区出土石斧	32
第27図	6区断面模式図	33
第28図	7区断面模式図	33
第29図	8区断面模式図	33

第30図	11区断面模式図	33
第31図	6・7・8区平面図	34
第32図	9区遺構図・土層断面図	36
第33図	9区遺物実測図	37
第34図	10区第一面遺構図	39
第35図	10区掘立柱建物跡	40
第36図	10区第二面平面図	40
第37図	10区第二面盛土断面図	40
第38図	10区土坑22出土遺物	41
第39図	10区土坑24出土遺物	41
第40図	10区土坑26出土遺物	41
第41図	10区土坑22出土貨幣（原寸）	41
第42図	10区盛土出土遺物	41

図版目次

図版一	1 トレンチ
図版二	2 トレンチ
図版三	3 トレンチ
図版四	1区・2区
図版五	1区・2区
図版六	1区遺構
図版七	1区遺構
図版八	1区遺構
図版九	1区遺構
図版十	1区遺構
図版十一	5区
図版十二	6区・7区
図版十三	8区
図版十四	9区・10区
図版十五	10区・11区
図版十六	1 トレンチ出土遺物
図版十七	2 トレンチ出土遺物
図版十八	2 トレンチ・10区出土遺物
図版十九	1 トレンチ・2 トレンチ出土遺物
図版二十	1区出土遺物
図版二十一	1区出土遺物
図版二十二	1区出土遺物
図版二十三	1区出土遺物
図版二十四	1区出土遺物
図版二十五	5区出土遺物
図版二十六	9区出土遺物
図版二十七	10区出土遺物

第1章 調査に至る経緯と周辺環境

第1節 調査に至る経緯・経過

大阪府教育委員会では、大阪府環境農林水産部が実施する府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」に伴い、平成15年度より埋蔵文化財についての調査を実施している。

事業が河内長野市太井地区で実施されることに伴い、大阪府教育委員会では当初から確認されていた太井遺跡の確認調査を実施するとともに周辺区域の埋蔵文化財の有無を確認するため、平成19年度に試掘調査を実施した。この結果、太井遺跡の範囲内及び事業地内から遺構・遺物を確認した。このため、太井遺跡の範囲を拡大するとともに、平成22年度より本発掘調査を実施している。

平成24年度の発掘調査は、一次調査、二次調査の2回実施した。一次調査は、平成19年度の試掘調査で柱穴を検出していた耕作地及びその周辺の耕作地のより詳しいデータを取得するため、平成24年6月4日から7月17日まで、6カ所のトレンチを設定し調査を実施した。この結果、各トレンチから柱穴・土坑・溝などの遺構を検出し、この区域が集落域であったことを確認した。遺物は瓦器・土師質土器などが出土した。4から6トレンチについては、二次調査の際10区として範囲を拡大して調査を実施した（第1図）。

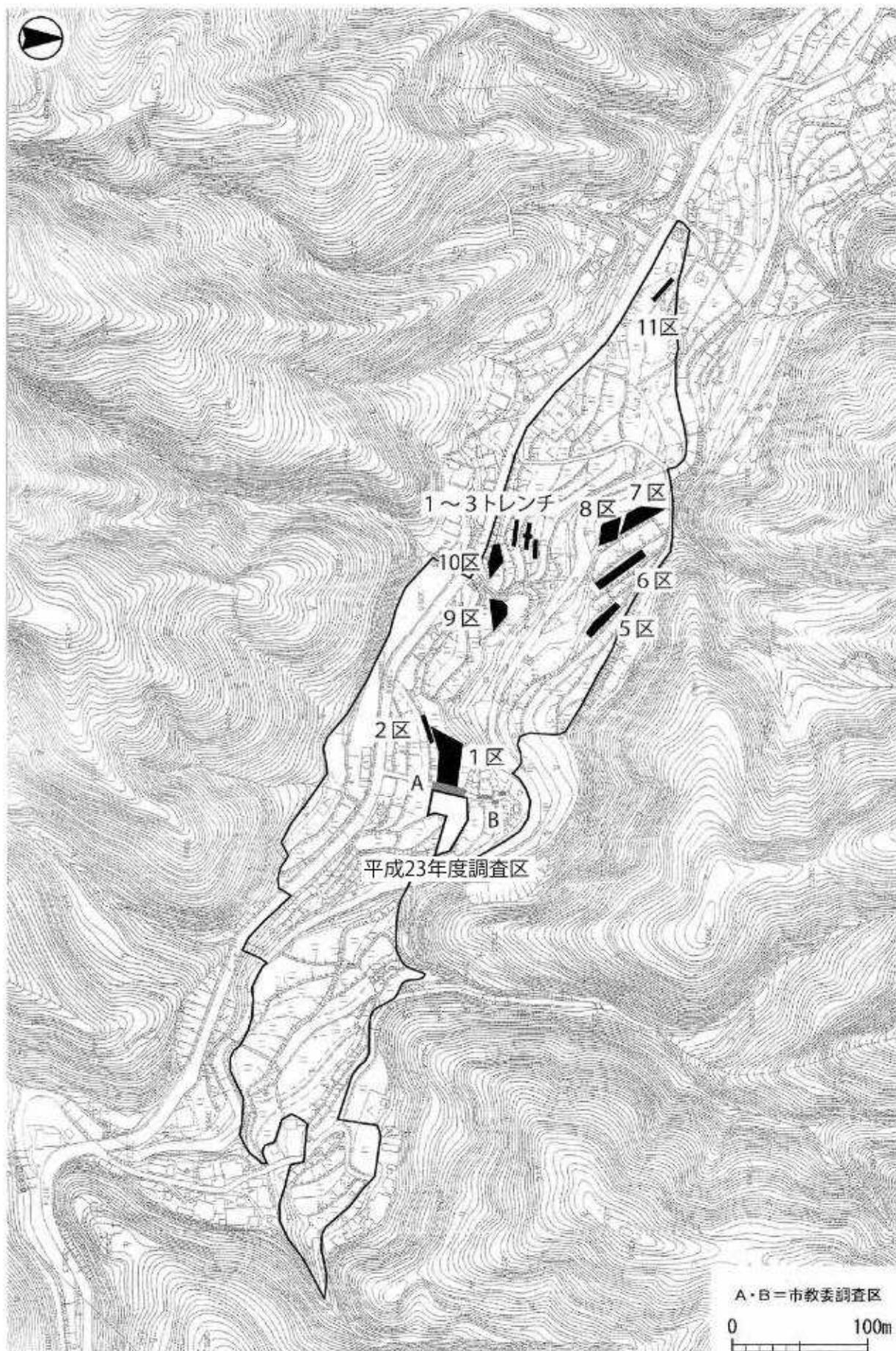
二次調査は、整備事業により破壊される耕作地に当初8カ所の調査区を設定し、平成24年8月2日から平成25年1月23日まで調査を実施した。このうち3区と4区については、調査開始後に整備が遺構面に達しないことが判明したため、調査を中止した。また、反対に調査開始後、整備により遺構面が破壊されることが判明したため、9から11区の調査区を追加した。（第1図）。

1区は、平成23年度の調査で中世の墓域が確認されていた西側の耕作地に設定した調査区であり、墓域が続いていることを確認し、5区、10区、11区では集落域を確認することができた。遺物は瓦器・土師質土器などが出土した。

第2節 周辺環境

太井遺跡は、河内長野市南東部の標高約300mの山間部に位置し、和泉山脈を水源とする石見川によって形成された川上谷と呼ばれる谷の中程に立地する。この谷沿いに沿って国道310号が通っている。この道はかつて大沢峠道と呼ばれ、古くから河内国と大和国とを結ぶ幹線道路でもあった。

太井遺跡が所在する太井地区で今のところ、人々の生活の跡を確認できるのは縄文時代である。これまでの調査で遺構は検出していないが、中期末から後期の土器が出土している。今回の調査でも後期の土器や磨製石斧が出土したが遺構は検出できなかった。太井遺跡ではこれまでのところ、弥生時代から古代の明確な人々の生活のあとは確認できていない。縄文時代以降人々の生活



第1図 太井遺跡調査区位置図

の跡が確認できるのは中世からである。

河内長野市域では、中世になると遺跡が増加する。これは、高野詣などによる高野街道の交通が活発化したことや、南北朝時代に南朝方の一大拠点となった観心寺や金剛寺の興隆が大きく影響されていると思われる。

太井遺跡から国道310号を3キロメートルほど北西に山を下ると観心寺がある。太井遺跡が所在する河内長野市太井地区は、「観心寺文書」により中世より観心寺の寺領となっていたことが知られている。また、太井遺跡は前述したように国道310号は大沢峠道と呼ばれる河内国と大和国とを結ぶ道沿いに立地していることなどから、中世には人々の活発な活動の跡が見受けられる(第2図)。



第2図 周辺遺跡分布図

第2章 一次調査の成果

第1節 調査に至る経過

平成19年度の試掘調査で今回2トレンチを設定した耕作地より柱穴を検出していた。このため、この耕作地周辺に集落域があることが予想された。このため2トレンチを中心として集落域が検出されると予想される耕作地に6カ所のトレンチを設定した。

第2節 調査の成果

1 トレンチ

2トレンチの一段上の耕作地に設定したトレンチである。東西方向に幅2m、長さ20mの調査区を設定した。現地表面の標高は、約T.P.300mを測る(第1・3図 図版一)。

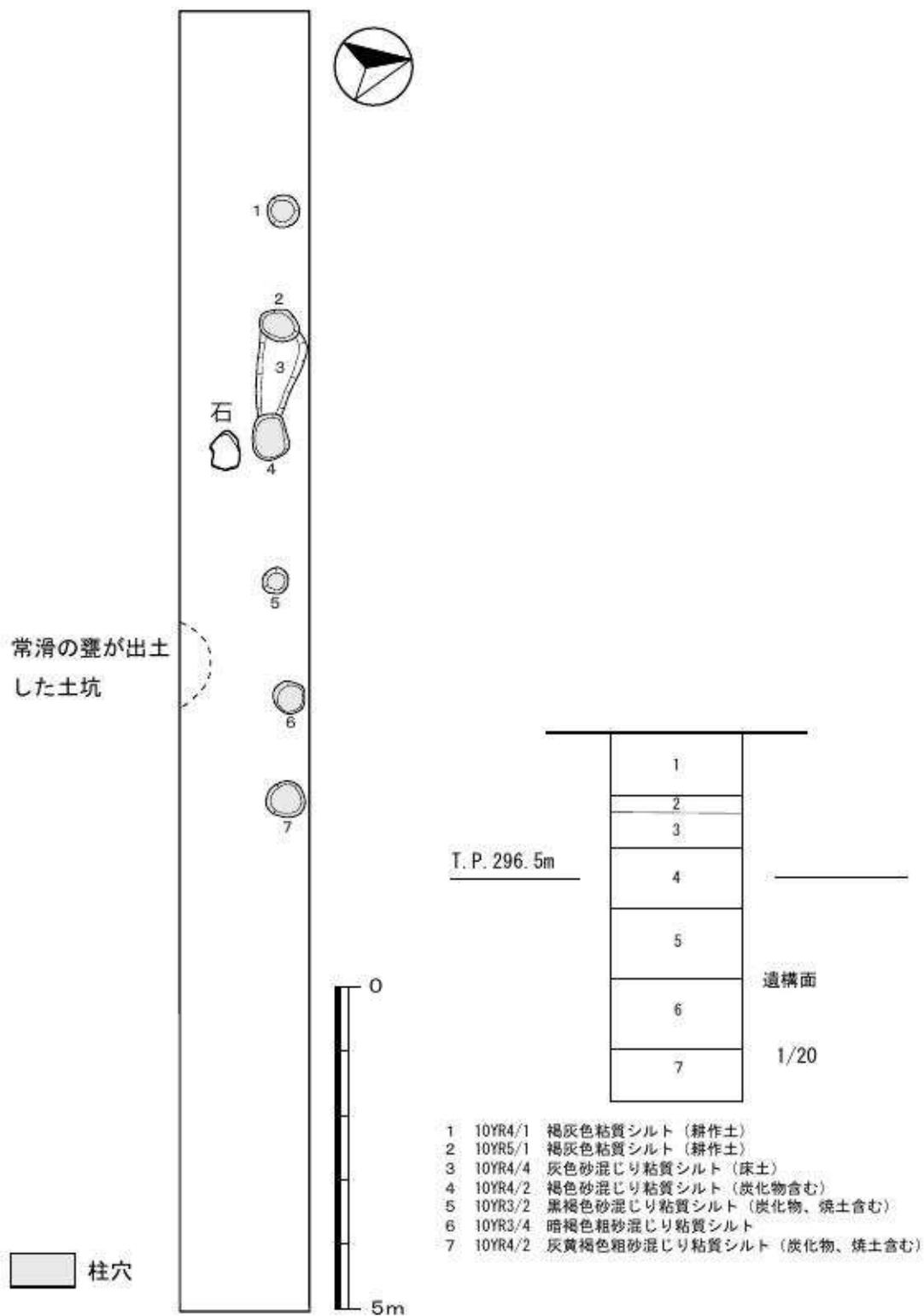
基本層序は、1層10YR4/1褐灰色粘質シルト(耕作土)、2層10YR5/1褐灰色粘質シルト(耕作土)、3層10YR4/4褐色砂混じり粘質シルト(床土)、4層10YR4/2灰黄褐色砂混じり粘質シルト(炭化物含む)5層10YR3/2黒褐色砂混じり粘質シルト(炭化物、焼土含む)、6層10YR3/4暗褐色粗砂混じり粘質シルト、7層10YR4/2灰黄褐色砂混じり粘質シルト(炭化物、焼土含む)である。第6層上面より遺構を検出した。

遺構は、柱穴6基、土坑1基を検出した。柱穴はいずれも直径約50cm、深さ約40cmを測る。埋土は、10YR3/2黒褐色粘質シルト、10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト等である。柱穴の中には、柱跡が確認できるものもある。

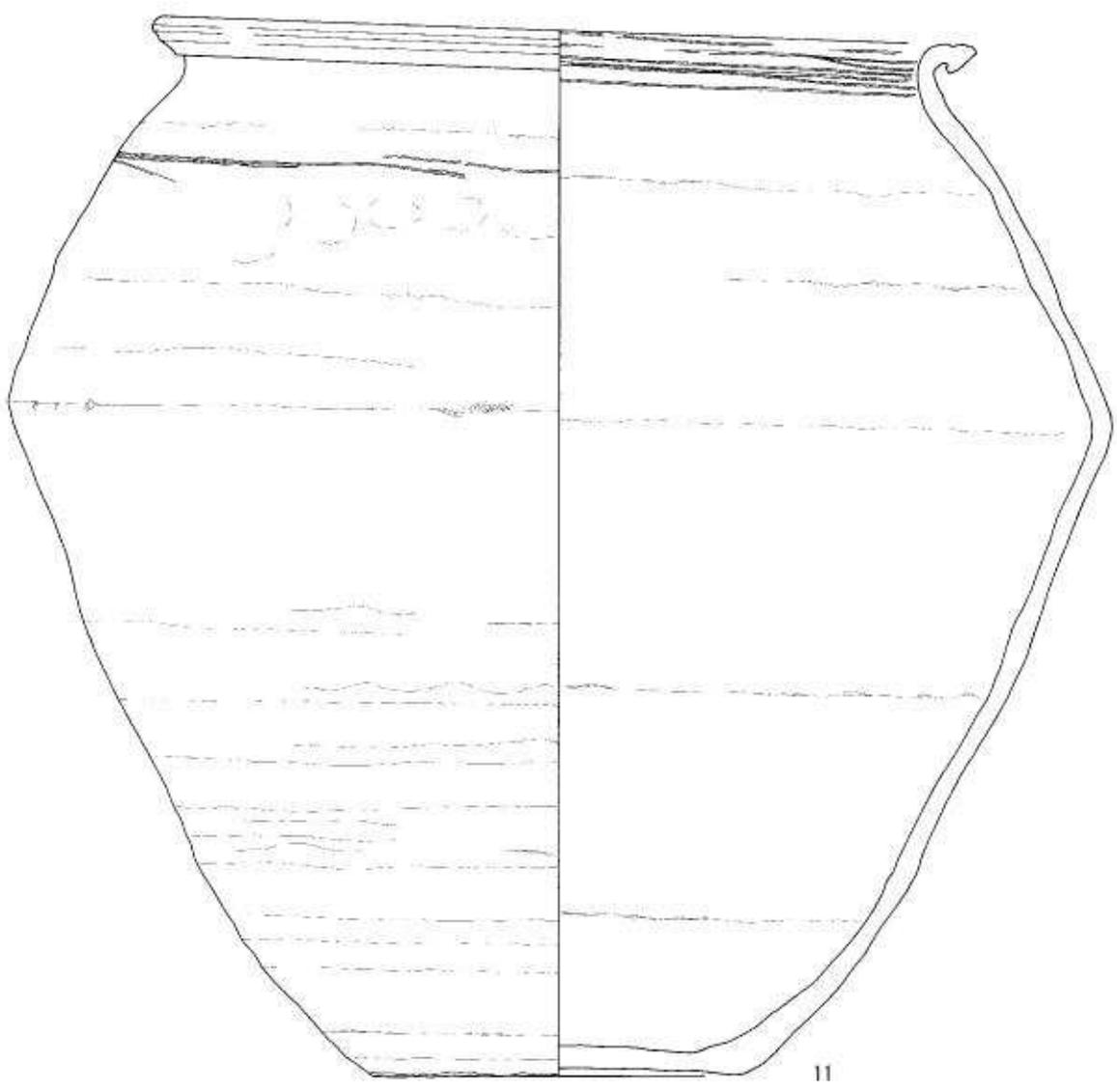
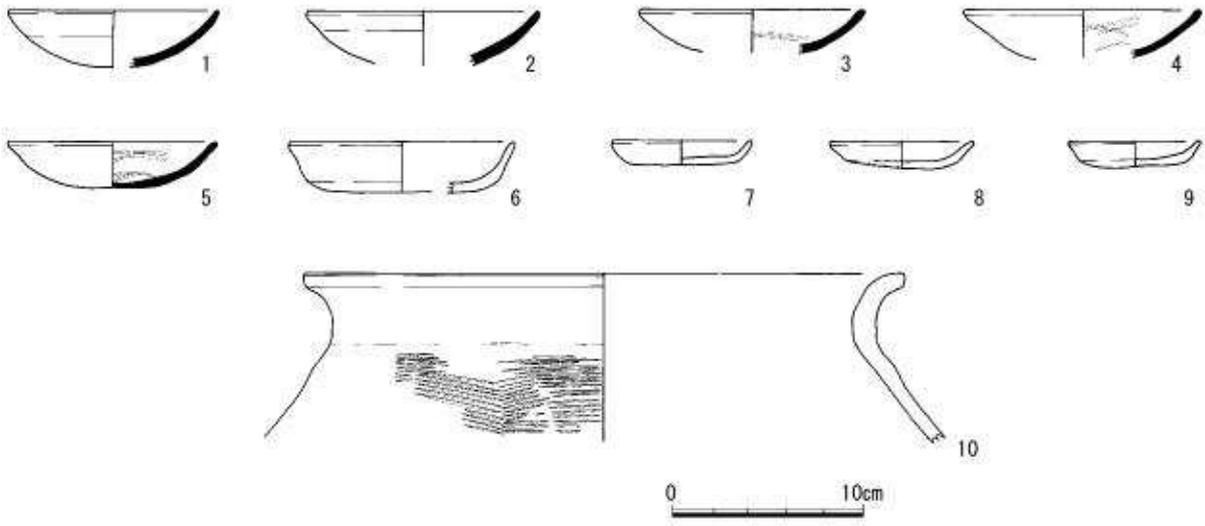
柱穴は、柱間約1.8mから2mを測り、ほぼ東西方向に直線に並ぶことから掘立柱建物跡と考えられるが、調査幅が狭くどちらの方向に柱穴が伸びるか及びその規模は不明である。また、柱穴3のすぐ南側に幅約50cm、長さ約70cmで上が平端な石を検出した。この建物と何らかの関係があるとは思われる。

柱穴から出土した遺物は、瓦器(第4図1から5)、土師質皿(第4図6)、土師質小皿(第4図7から9)、土師質甕(第4図10)などである。瓦器碗は、直径約12から13cmで、高台がない。その形態より時期的には室町初期と考えられる。

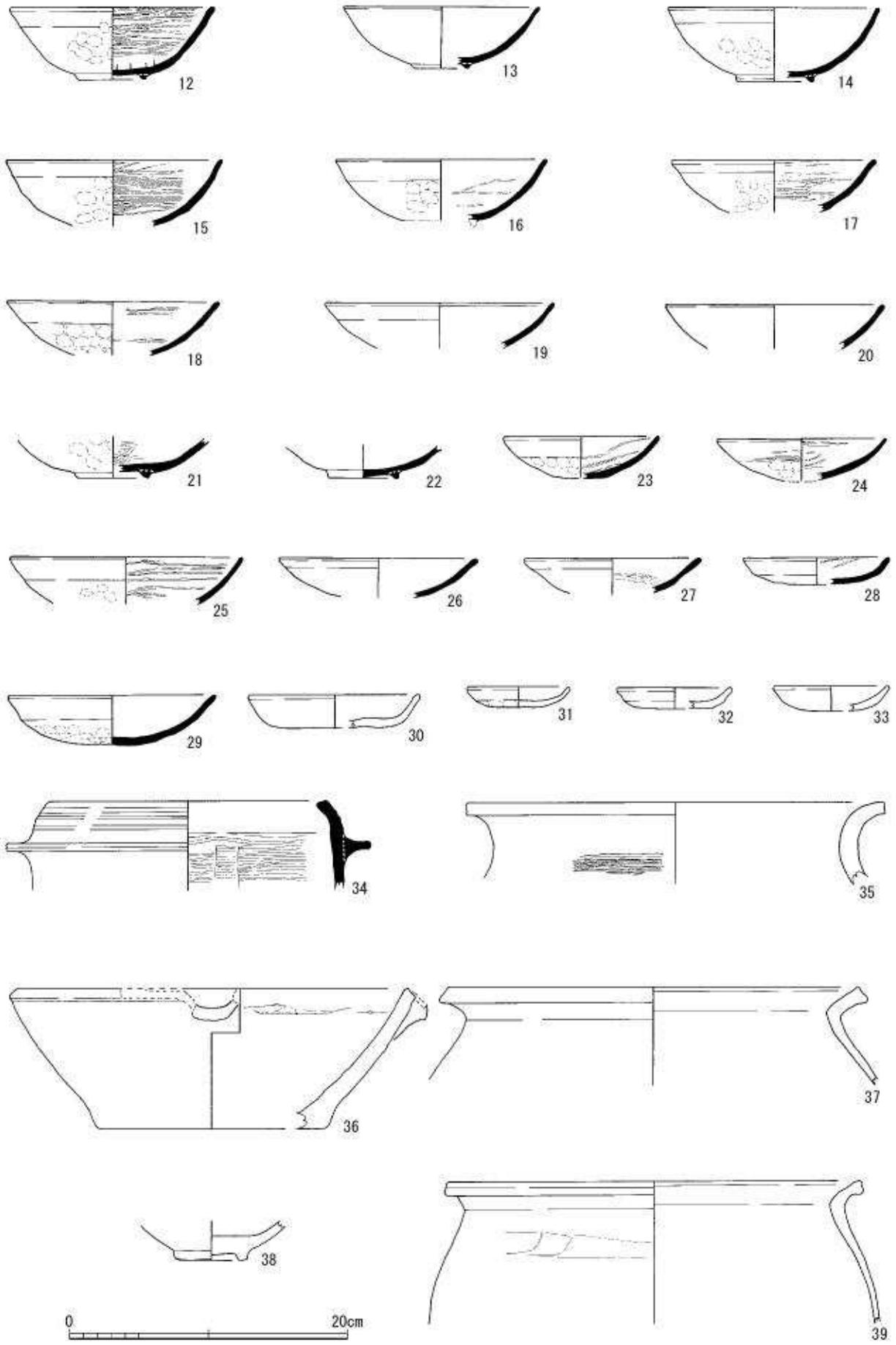
調査区南側から直径約1.2m、深さ約40cm以上の土坑を検出した。南側は調査区外に当たるためその規模は不明である。埋土は7.5YR3/2黒褐色砂混じり粘質シルトであり、炭化物・焼土を多く含んでいる。この土坑からは、常滑焼の大甕が一点出土した(第4図11)。甕は破壊された状況で出土したが、ほぼ完形に復元できた。幅約60cm、高さ約60cmを測る。使用された痕跡がなく、ほぼ新品のものを破壊して埋納したものと思われる。甕の肩部に○に十字などの線刻が認められるが意味は不明である(第6図)。



第3図 1 トレンチ遺構図及び断面模式図

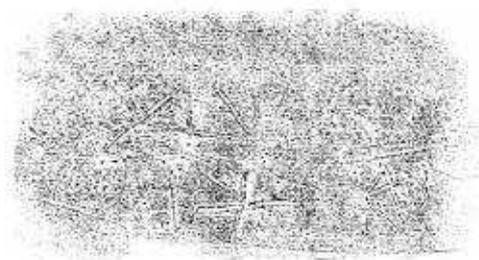


0 20cm
第4図 1トレンチ遺構出土遺物



第5図 1トレンチ包含層出土遺物

1 トレンチ包含層からは、瓦器碗（第5図12から27、29）瓦器小皿（第5図28）、土師質皿（第5図30）、土師質小皿（第5図31から33）、瓦質羽釜（第5図34）、須恵質片口（第5図36）、土師質甕（第5図35、37、39）、青磁（第5図38）等が出土している。



第6図 常滑焼大甕線刻（1/2）

瓦器碗は、直径約15cmの高台がつくものと直径約12から13cmの高台がつかないものがある。高台がある瓦器碗は遺構より時期的に古く、周辺からもたらされたものであると思われる。

2 トレンチ

平成19年度の試掘トレンチを中心に東西方向20m、南北方向5m、幅2mの調査区を設定した。現地表面の標高は、約T.P.295.7mを測る（第1・7図 図版二）。

基本層序は、1層10YR3/1黒褐色粘質シルト（耕作土）、2層10YR3/3暗褐色粗砂混じり粘質シルト（床土）、3層2.5Y3/1黒褐色粗砂混じり粘質シルト（炭化物、焼土含む）、4層5Y3/1オリーブ黒色粗砂混じり粘質シルト（炭化物、焼土含む）、5層7.5YR4/1褐灰色砂混じり粘質シルト（炭化物、焼土含む）である。地山上面より遺構を検出した。

遺構は、柱穴21基、土坑7基、溝4条、を検出した。柱穴は直径約20から50cm、深さ約10から40cmを測る。埋土は、10YR3/3暗褐色粗砂混じり粘質シルト、10YR4/4褐色粗砂混じり粘質シルト等である。柱穴の中には、柱跡が確認できるものもある。調査区が狭く建物は復元できなかった。柱穴から出土した遺物は、瓦器碗、土師質皿などが出土したが小片で図化できなかった。

溝5は幅約40から80cm、深さ約10cmを測り、埋土は10YR3/2黒褐色粗砂混じり粘質シルトである。遺物は瓦器、土師質土器などが出土したがいずれも小片で図化できなかった。

溝12は幅約20cm、深さ約10cmを測り、埋土は10YR4/2灰黄褐色粗砂混じり粘質シルトである。遺物は瓦器が出土したがいずれも小片で図化できなかった。

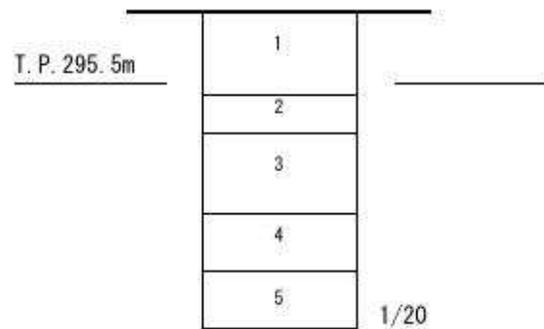
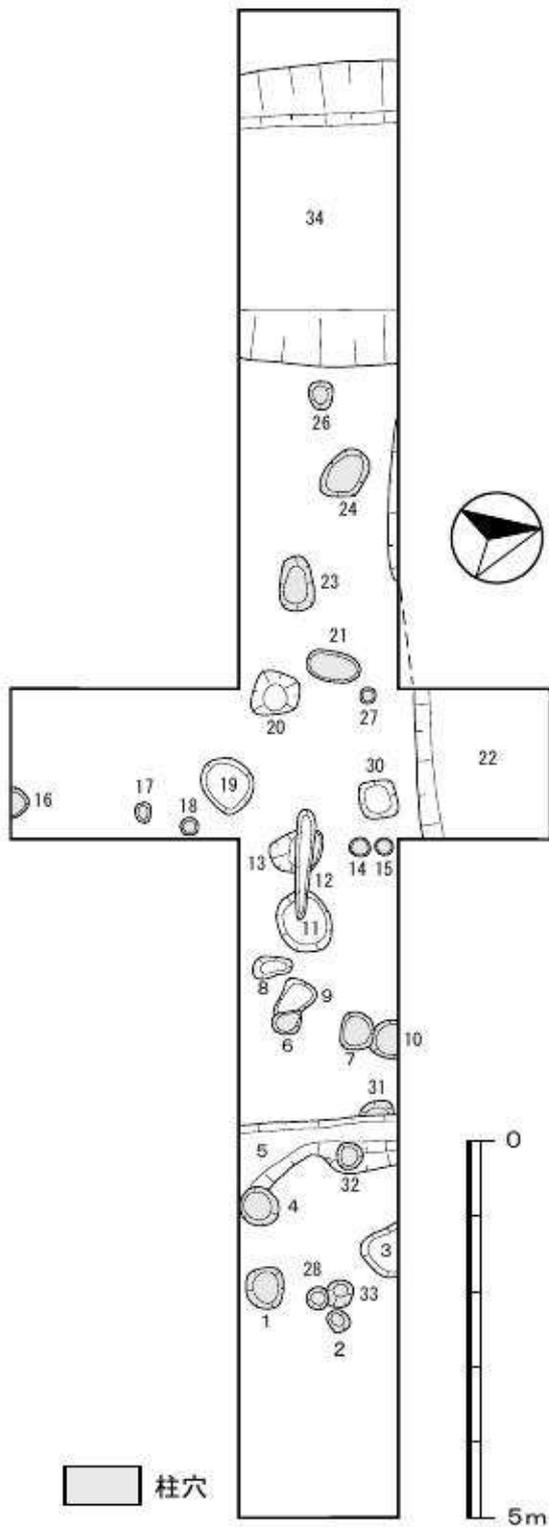
溝22は、幅2m以上、深さ約20cmを測り、埋土は10YR4/2灰黄褐色粗砂混じり粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

溝34は、幅約4m、深さ約30cmを測り、埋土は10YR4/1褐灰色粘質シルトである。直径10から30cmの礫を多量に含んでおり、土石流の跡と思われる。遺物は出土しなかった。

土坑3は、幅約60cm、長さ約50cm以上の隅丸方形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は10YR3/3暗褐色粗砂混じり粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

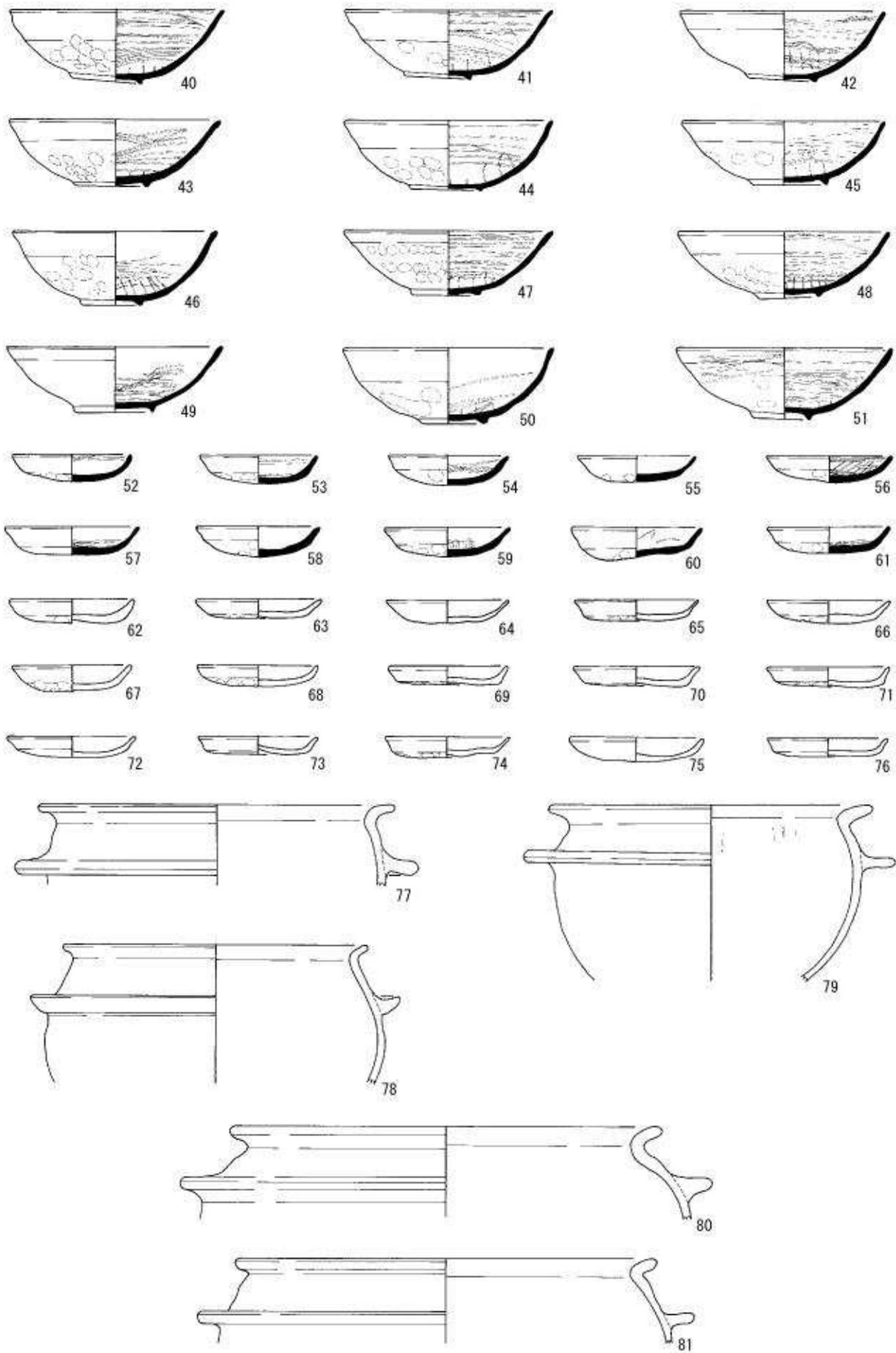
土坑7は、幅約50cm、長さ約70cm以上の三角形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は10YR3/3暗褐色粗砂混じり粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

土坑8は、幅約30cm、長さ約60cmの楕円形を呈し、深さ約6cmを測る。埋土は10YR3/3暗褐色粗砂混じり粘質シルトである。遺物は出土しなかった。



- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (耕作土)
- 2 10YR3/3 灰色粗砂混じり粘質シルト (床土)
- 3 2.5Y3/1 黒褐色粗砂混じり粘質シルト
- 4 5Y3/1 オリーブ黒色粗砂混じり粘質シルト
- 5 10YR5/1 褐灰色砂混じり粘質シルト (旧耕作土)

第7図 2トレンチ遺構図及び断面模式図



第8図 2トレンチ土坑19出土遺物

土坑11は、幅約70cm、長さ約80cm以上の楕円形を呈し、深さ約10cmを測る。溝12に切られている。埋土は10YR3/3暗褐色粗砂混じり粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

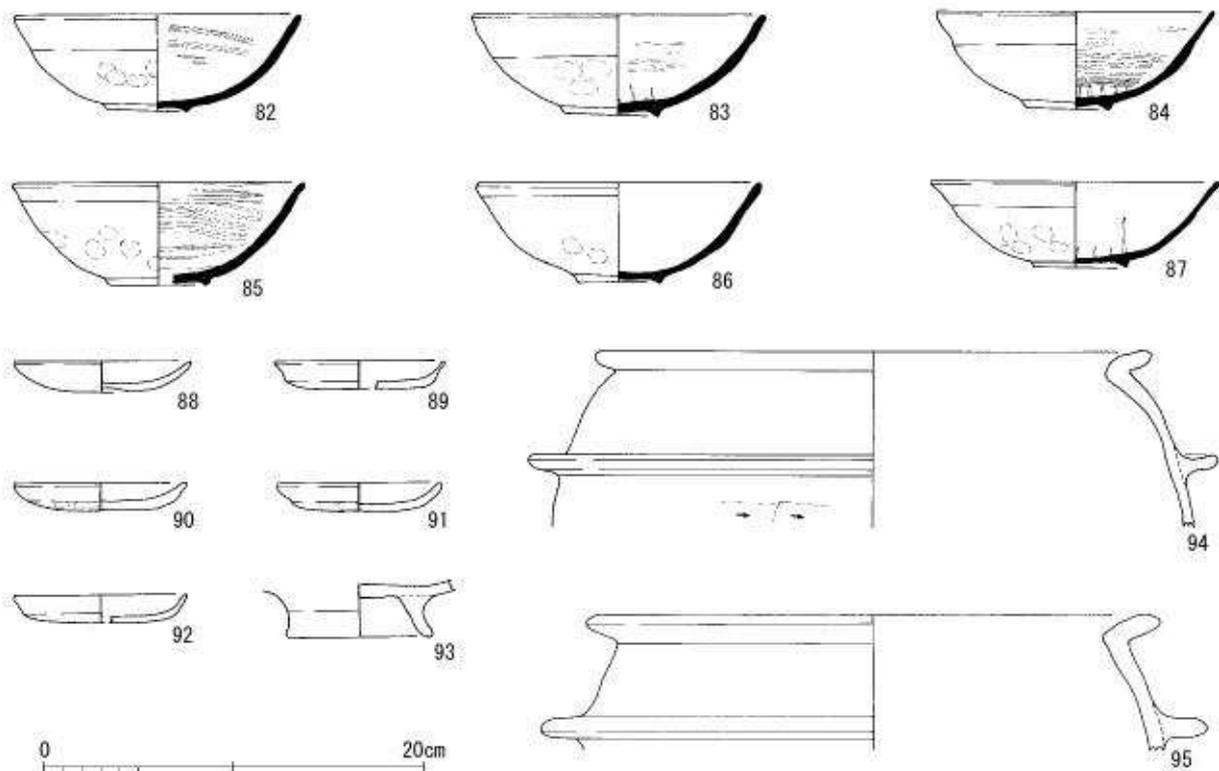
土坑13は、幅約60cm、長さ約80cmの楕円形を呈し、深さ約20cmを測る。溝12に切られている。埋土は10YR3/1黒褐色粗砂混じり粘質シルトである。須恵質土器が出土したが小片で図化できなかった。

土坑19は、幅約70cm、長さ約80cmの楕円形を呈し、深さ約40cmを測る。埋土は10YR3/2黒褐色粗砂混じり粘質シルトである。直径10から20cmほどの礫を多量に含んでいる。この礫とともに多量の瓦器、土師質土器が廃棄された状況で出土した。

今回図化した遺物は、瓦器碗（第8図40から51）、瓦器小皿（第8図52から61）、土師質小皿（第8図62から76）、土師質羽釜（第8図77から81）であるが、これ以外にも、図化できなかった遺物が多い。瓦器碗は直径約15cmを測り、全て高台がつくものである。時期的には鎌倉時代後期が考えられる。

土坑20は、幅60cm、長さ60cmの隅丸方形を呈し、深さ約40cmを測る。埋土は10YR4/4褐色粗砂混じり粘質シルトである。直径10から20cmほどの礫を含んでいる。土坑19と同じく、この礫とともに瓦器、土師質土器が廃棄された状況で出土した。

今回図化した遺物は、瓦器碗（第9図82から87）、土師質小皿（第9図88から92）、土師質碗底部（第9図93）、土師質羽釜（第9図94、95）であるが、これ以外にも、図化できなかった遺物が多い。瓦器碗は直径約15cmを測り、全て高台がつくものである。その形態より時期的には鎌倉時代後期が考えられる。



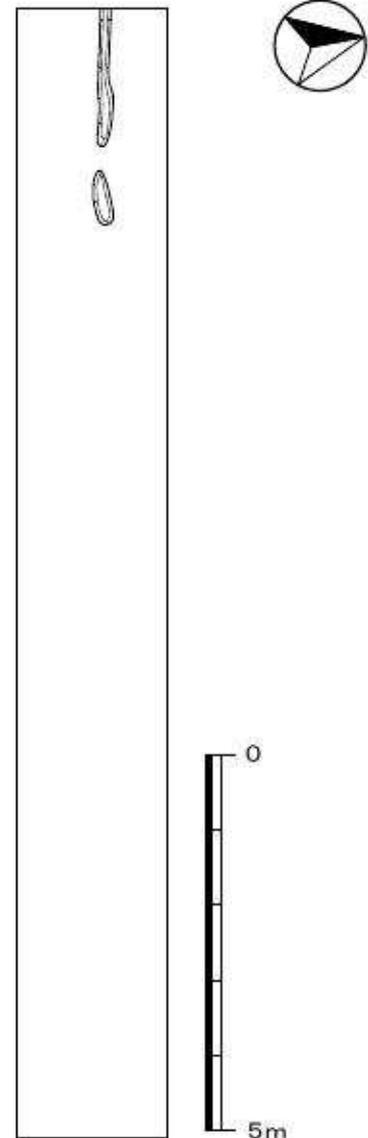
第9図 2トレンチ土坑20出土遺物

3トレンチ

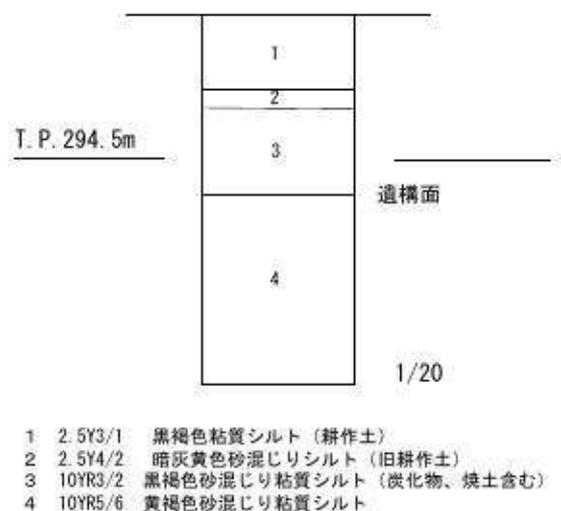
2トレンチの一段下の耕作地に設定したトレンチである。東西方向に幅2m、長さ15mの調査区を設定した。現地表面の標高は、約T.P.294.9mを測る（第1・10・11図 図版三）。

基本層序は、1層2.5Y3/1黒褐色粘質シルト（耕作土）、2層2.5Y4/2暗灰黄色粗砂混じりシルト（旧耕作土）、3層10YR3/2黒褐色砂混じり粘質シルト（炭化物、焼土含む）、4層10YR4/6黄褐色砂混じり粘質シルトである。4層上面より遺構を検出した。

遺構は、溝2条を検出した。2条とも幅約20cm、深さ約5cmを測る。埋土は、10YR3/2黒褐色砂混じり粘質シルト（炭化物含む）である。瓦器、土師質土器が出土したが、小片のため図化できなかった。



第10図 3トレンチ平面図



第11図 3トレンチ断面模式図

第3章 二次調査の成果

第1節 調査に至る経緯

一次調査に引き続き、平成24年8月2日から平成25年1月23日にかけて、ほ場整備に伴い切土を行うなど、遺構を損壊する恐れのある部分を対象として、1区から10区に分けて発掘調査を実施した。

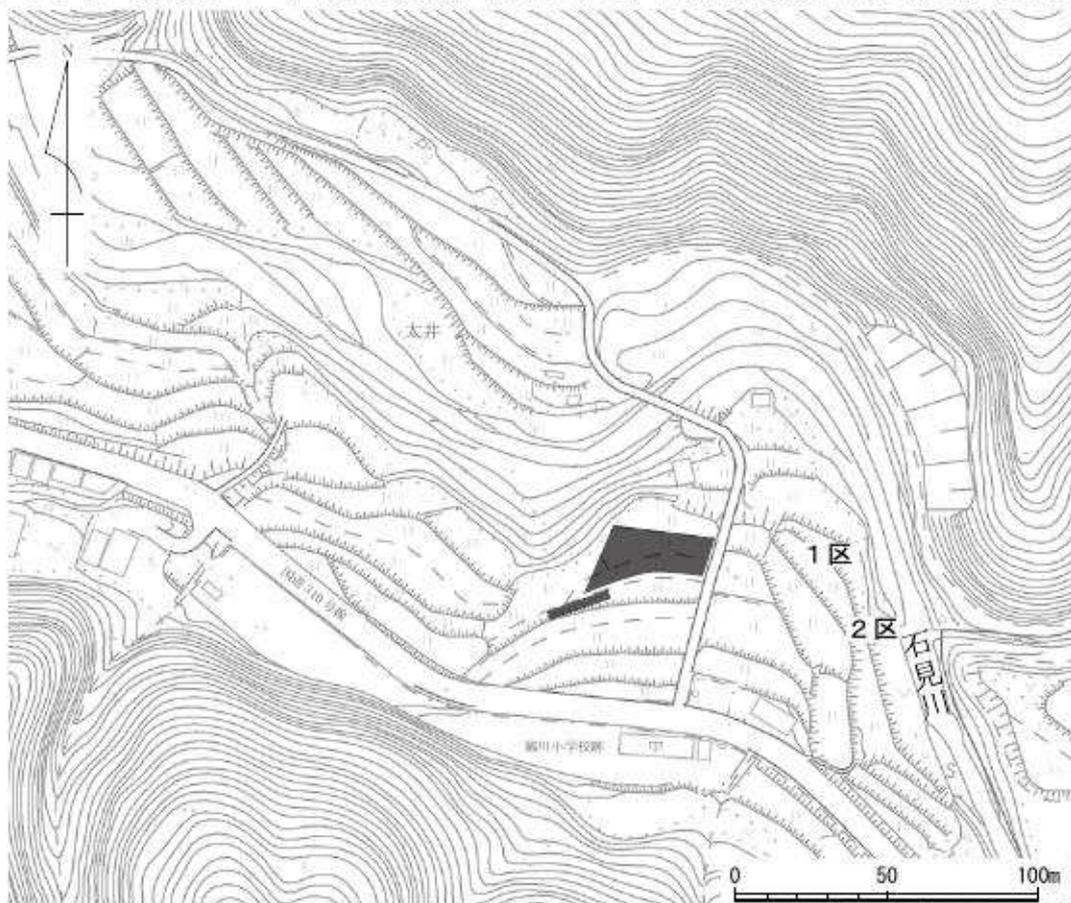
第2節 調査の成果

1区

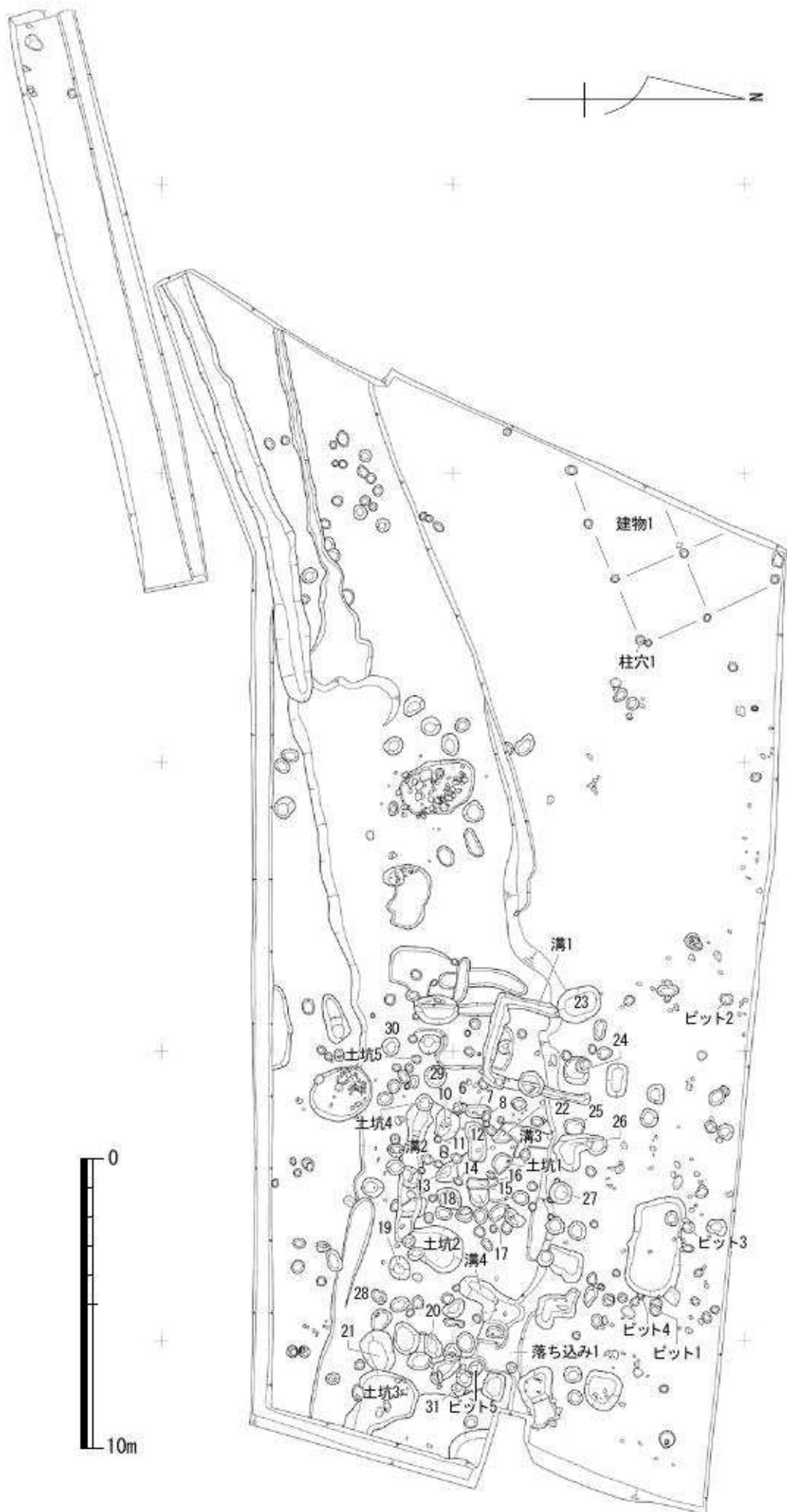
1. 調査区と基本層序

1区は、平成23年度に発掘調査を実施した調査区の隣接地646㎡を対象に、平成24年10月22日から平成25年1月22日にかけて現地調査を実施した。なお、1区は中央に東西方向の水田区画の畦畔が作られており、これを境に北側が一段低くなっている。

重機による表土掘削を行った後、人力による包含層掘り下げ、遺構検出を行った。調査区南側は、耕土(層厚約0.25m)、床土(層厚約0.05m)、褐色シルト(層厚約0.2m)、黄褐色シルトの順に堆積しており、黄褐色シルト上面で遺構が検出された。調査区北側は、耕土(層厚約0.3m)、床



第12図 1区・2区調査区位置図 (1/2500)



第13図 1区・2区遺構図 (1/200)

土(層厚約0.05m)、暗褐色砂(層厚約0.2m)、にぶい黄褐色砂(層厚約0.2m)、黄褐色シルトの順に堆積しており、黄褐色シルト上面で遺構が検出された。なお、暗褐色砂は遺物包含層であり、調査区の北東側に広く堆積が認められた。この遺物包含層を掘削したところ、下記の遺構が検出された。

2. 遺構と遺物

1区の主な遺構として、溝、掘立柱建物、土坑、用途不明のピットが検出された。明確に土壌墓と判断できるものは1基にとどまるが、出土遺物の構成から、土坑の大部分は、墓墳であると推測される。

溝1は、コの字状のプランを呈しており、北側は溝が検出されなかった。N-18°-Eに主軸を持ち、全長9.4m、最大幅0.6m、深さ0.5mを計る。埋土は暗褐色シルトであり、縄文時代の所産と推測される石鏃(196)、瓦器碗(130)、土師器皿、瓦器碗などが出土している。土坑23によって、北西側の溝が壊されており、土坑23より先に作られた溝であると考えられる。何等かの区画溝であることが想起されるが、その内側に特別な遺構は認められなかった。

溝2は、全長4.9m、幅0.8m、深さ0.46m、N-83°-W方向に伸びる。上層に暗褐色砂、下層に暗褐色粘土(焼土層・炭化物を多く含む)が堆積している。堆積土の状況から、暗褐色粘土を埋土とする遺構を壊す形で溝が形成されたと推測される。土師器皿(102)、瓦器碗などが出土している。

溝3は、全長2.5m、幅0.6m、深さ0.76m、N-18°-E方向に伸びる。埋土は暗褐色砂であり、土師器皿(103・105・107)、瓦器皿(111)、瓦器碗(120)などが出土している。

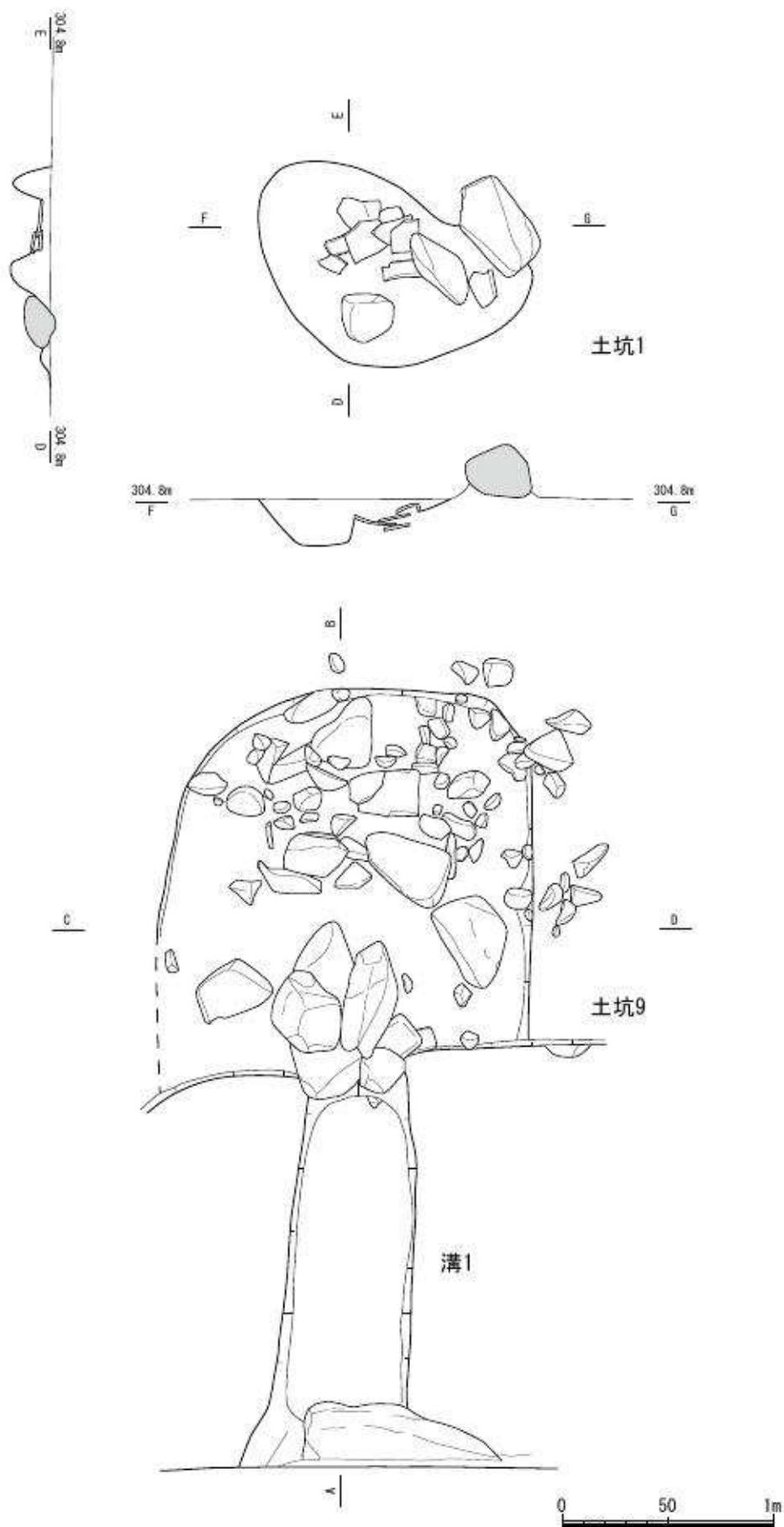
溝4は、全長2.5m、幅0.8m、深さ0.45m、N-31°-E方向に伸びる。埋土は暗褐色シルトであり、土師器皿(96)、瓦器碗片が出土している。

掘立柱建物1は、調査区外にまで広がる掘立柱建物であり、建物の主軸方向は、N-22°-Wを示し、調査区内で東西3間(5.2m)、南北2間(6.4m)、柱穴が7基検出された。柱間は平均2.2mを測り、柱穴は直径平均0.25m、深さ平均約0.2mを測る。なお、柱穴1から瓦器皿(112)が出土したが、混入であると考えられ、建物の時期は判明しなかった。

土坑1は、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ約0.1mの楕円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色砂であり、土師器皿(101)、土師質土器甕(138)、土師質土器羽釜(140)、図化できなかったが、瓦器碗、瓦器皿、鉄製品などがまとまって出土している。

土坑2は、長軸2.0m、短軸1.4m、深さ約0.3mの楕円形を呈する土坑である。埋土は上層が暗褐色砂、下層が褐色砂である。土師器皿(99・100)、瓦器皿(109)、瓦器碗(122・125・126)、銅銭「嘉祐通宝」(142)などが出土している。なお、嘉祐通宝の初鑄は1056年であり、当該遺構の時期はこれを遡ることはない。

土坑3は、長軸2.3m、短軸2.1m、深さ約0.3mの楕円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色砂～シルトであり、須恵質土器片口(139)、瓦器碗片などが出土している。



第15図 1区土坑1平面図・立面図及び土坑9・溝1平面図 (1/30)

土坑4は、直径0.6m、深さ約0.7mの円形を呈する土坑である。埋土は黒褐色シルトであり、瓦器碗（127）が出土している。

土坑5は、長軸0.5m、短軸0.3m、深さ約0.3mの楕円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色砂であり、図化できなかつたが、瓦器碗片が出土している。

土坑6は、長軸0.4m、短軸0.3m、深さ約0.19mの楕円形を呈する土坑である。埋土は黒褐色シルトであり、図化できなかつたが、瓦器碗片が出土している。

土坑7は、長軸0.9m、短軸0.5m、深さ約0.14mの楕円形を呈する土坑である。灰黄褐色シルトであり、瓦器碗（117）が出土している。

土坑8は、長軸0.4m、短軸0.3m、深さ約0.14mの楕円形を呈する土坑である。灰黄褐色シルトであり、瓦器碗（123）が出土している。

土坑9は、長軸1.8m残存、短軸1.7m、深さ約0.1mの隅丸方形を呈する土坑である。埋土は暗褐色砂であるが、削平を受け残りが非常に悪かつた。しかし、石を意図的に配している様子が読み取れ、配石墓とみなすこともできる。なお、遺物は出土していない。

土坑10は、長軸1.0m、短軸0.9m、深さ約0.5mの楕円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色砂であり、土師質土器鉢（137）、図化できなかつたが、土師器皿片、瓦器碗片が出土している。また、S K10の下層遺構から瓦器碗（132）が出土した。

土坑11は、直径0.25m、深さ約0.1mの円形を呈する土坑である。埋土は褐色シルトであり、遺物は出土していない。

土坑12は、長軸0.9m、短軸0.7m、深さ約0.15mの楕円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色砂であり、遺物は出土していない。

土坑13は、長軸0.9m残存、短軸0.6m、深さ約0.19mの楕円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色砂であり、瓦器碗（128）が出土している。

土坑14は、長軸0.4m、短軸0.3m、深さ約0.32mの楕円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色砂であり、遺物は出土していない。

土坑15は、長軸1.1m、短軸0.4m、深さ約0.17mの楕円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色砂であり、遺物は出土していない。

土坑16は、長軸0.3m、短軸0.2m、深さ約0.3mの楕円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色砂であり、土師器皿（104）が出土している。

土坑17は、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ約0.24mの楕円形を呈する土坑である。埋土は暗褐色シルトであり、土師器皿（106）が出土している。

土坑18は、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ約0.18mの楕円形を呈する土坑である。暗褐色シルトであり、土師器皿（108）が出土している。

土坑19は、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ約0.48mの楕円形を呈する土坑である。埋土は褐色シルトであり、瓦器碗（114・124）が出土している。

土坑20は、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ約0.19mの楕円形を呈する土坑である。暗褐色シルトであり、瓦器碗（121）、土師器皿片が出土している。

土坑21は、長軸1.5m、短軸1.1m、深さ約0.47の楕円形を呈する土坑である。遺構が重複しており、上層遺構は暗褐色砂、下層遺構は褐色シルトが堆積している。下層遺構から、瓦器碗（133）、土師質土器片が出土している。

土坑22は、長軸0.55m、短軸0.5m、深さ約0.3の楕円形を呈する土坑である。埋土は褐色シルトであり、瓦器碗（116）が出土している。

土坑23は、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ約0.3m、主軸方向がW-17°-Nの楕円形を呈する土坑である。埋土は黄褐色シルトであり、床面から副葬品と考えられる鉄製刀子（143）、退化した高台のつく瓦器碗（144）、瓦器皿（145～148）が出土している。時期は、13世紀初めに比定される。

土坑24は、長軸1.0m、短軸0.9m、深さ約0.15mの隅丸方形を呈する土坑である。埋土はにぶい黄褐色砂である。炭化物を含む黒褐色砂が堆積するピットと切りあっている。瓦器碗（129）が出土している。

土坑25は、長軸0.7m、短軸0.6m残存、深さ約0.27mの楕円形を呈する土坑である。埋土は褐色砂であり、炭化物を含む黒褐色砂が堆積するピットと切りあっている。図化できなかったが、瓦器碗片が出土している。

土坑26は、長軸0.9m、短軸0.8m、深さ約0.35mの楕円形を呈する土坑である。埋土は褐色シルトであり、瓦器碗（134）が出土している。

土坑27は、直径0.8m、深さ約0.5mの円形を呈する土坑である。埋土はにぶい黄褐色シルト砂であり、炭化物を含む黒褐色砂が堆積するピットと切りあっている。図化できなかったが、瓦器碗片が出土している。

土坑28は、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ約0.47mの楕円形を呈する土坑である。埋土は褐色シルトであり、宋銭「嘉祐元宝」（141）、瓦器碗片などが出土した。なお、嘉祐元宝の初鑄は1056年であり、当該遺構の時期はこれを遡ることはない。

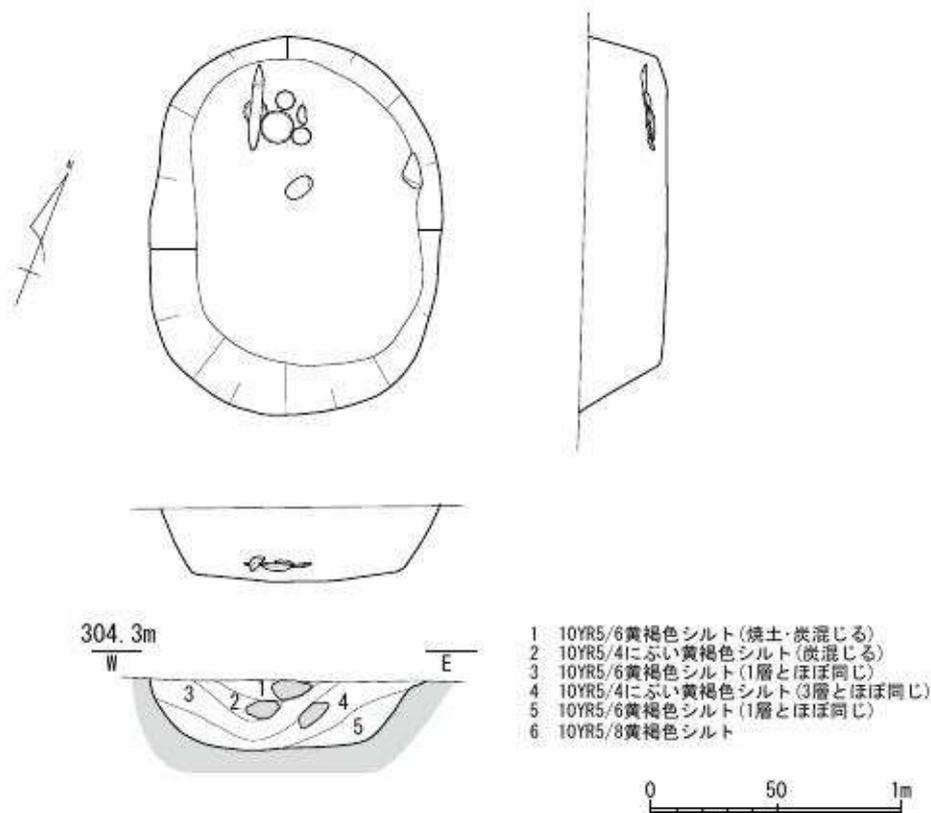
土坑29は、直径0.8m、深さ約0.1mの楕円形を呈する土坑である。埋土は褐色砂であり、図化できなかったが、鉄製刀子、土師器皿片などが出土している。

土坑30は、直径0.6m、深さ約0.42mの円形を呈する土坑である。埋土は灰黄褐色シルトであり、瓦器皿（131）が出土している。

土坑31は、直径0.5m、深さ約0.42mの円形を呈する土坑である。埋土は灰黄褐色シルトであり、瓦器碗（135）が出土している。

ピット1は、直径0.4m、深さ約0.23mのピットで、埋土はにぶい黄褐色砂である。土師器皿（98）が出土している。

ピット2は、長軸0.5m、短軸0.4m、深さ約0.14mの楕円形を呈するピットである。埋土は



第16図 1区土坑23平面図・立面図 (1/30)

にぶい黄褐色砂であり、瓦器皿(113)が出土している。

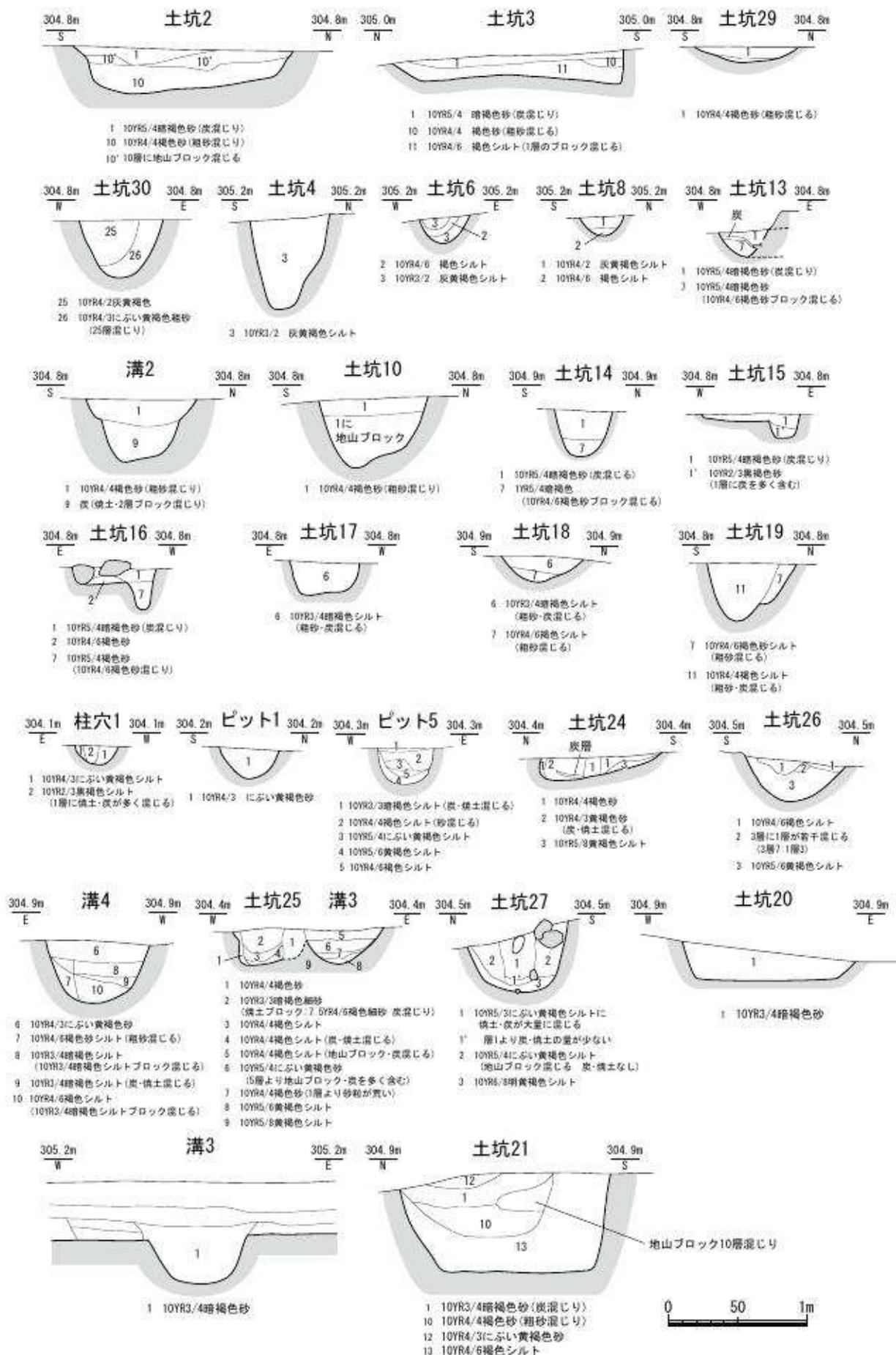
ビット3は、直径0.4m、深さ約0.19mの円形を呈するビットである。埋土はにぶい黄褐色砂あり、瓦器碗(118)が出土している。

ビット4は、長軸0.4m残存、短軸0.3m、深さ約0.1mの楕円形を呈するビットである。埋土は褐色シルトであり、瓦器皿(110)が出土している。

ビット5は、長軸0.5m残存、短軸0.4m、深さ約0.28mの楕円形を呈するビットである。埋土は暗褐色シルトであり、瓦器碗高台(119)が出土している。

落ち込み1は、調査前に使われていた水田の東西方向畦とほぼ重なる位置に、調査区北側に向かって赤褐色砂の堆積が認められた。ここから平瓦(136)、図化できなかったが瓦器碗片などが出土している。

遺物包含層は、調査区東側を中心に、暗褐色砂(層厚約0.2mから0.5m)の堆積が認められた。また、赤褐色の焼けた土や炭化物の堆積が一部で確認できた。墓域に全体的に堆積しており、遺物包含層直上において遺構検出を行ったが、明確な遺構の輪郭は確認できなかった。この暗褐色砂・赤褐色焼土から多数の土師器皿、瓦器碗、瓦器皿、土師質・瓦質羽釜、貨幣、青磁、鉄製品などが出土した。今回の調査では骨や歯は出土しなかったが、羽釜や甕などは、骨壺として用いられた可能性が指摘できる。また、碗や皿については、被葬者の弔いのため供献土器であると推測できる。鉄製品は、土坑23の副葬品として埋納されたような刀子、もしくは、木棺の釘である



第17図 1区遺構断面図 (1/40)

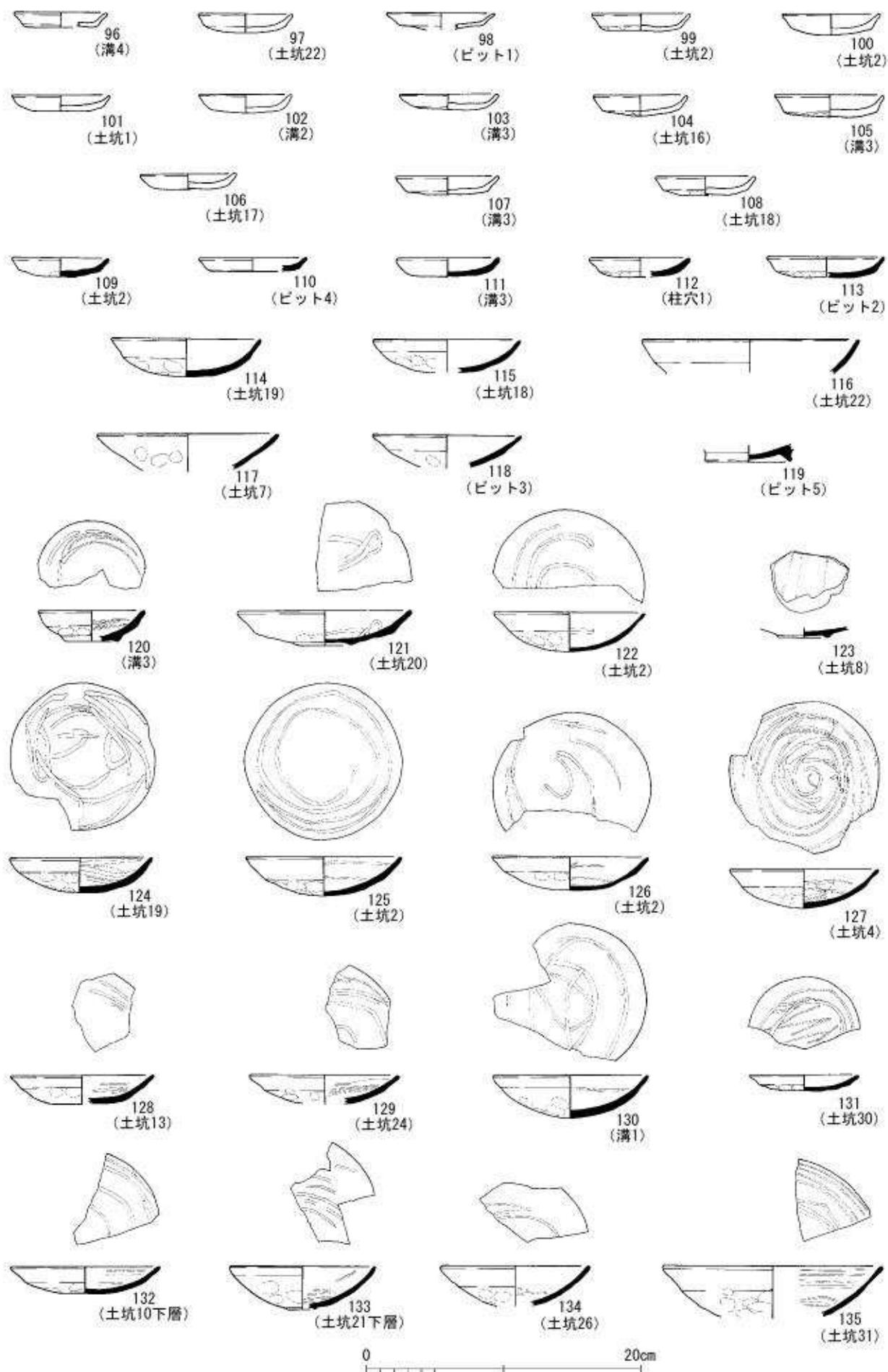
可能性が考えられる。中世以外の遺物として、点数は少ないものの石匙（197）、縄文土器片が出土している。

3 小結

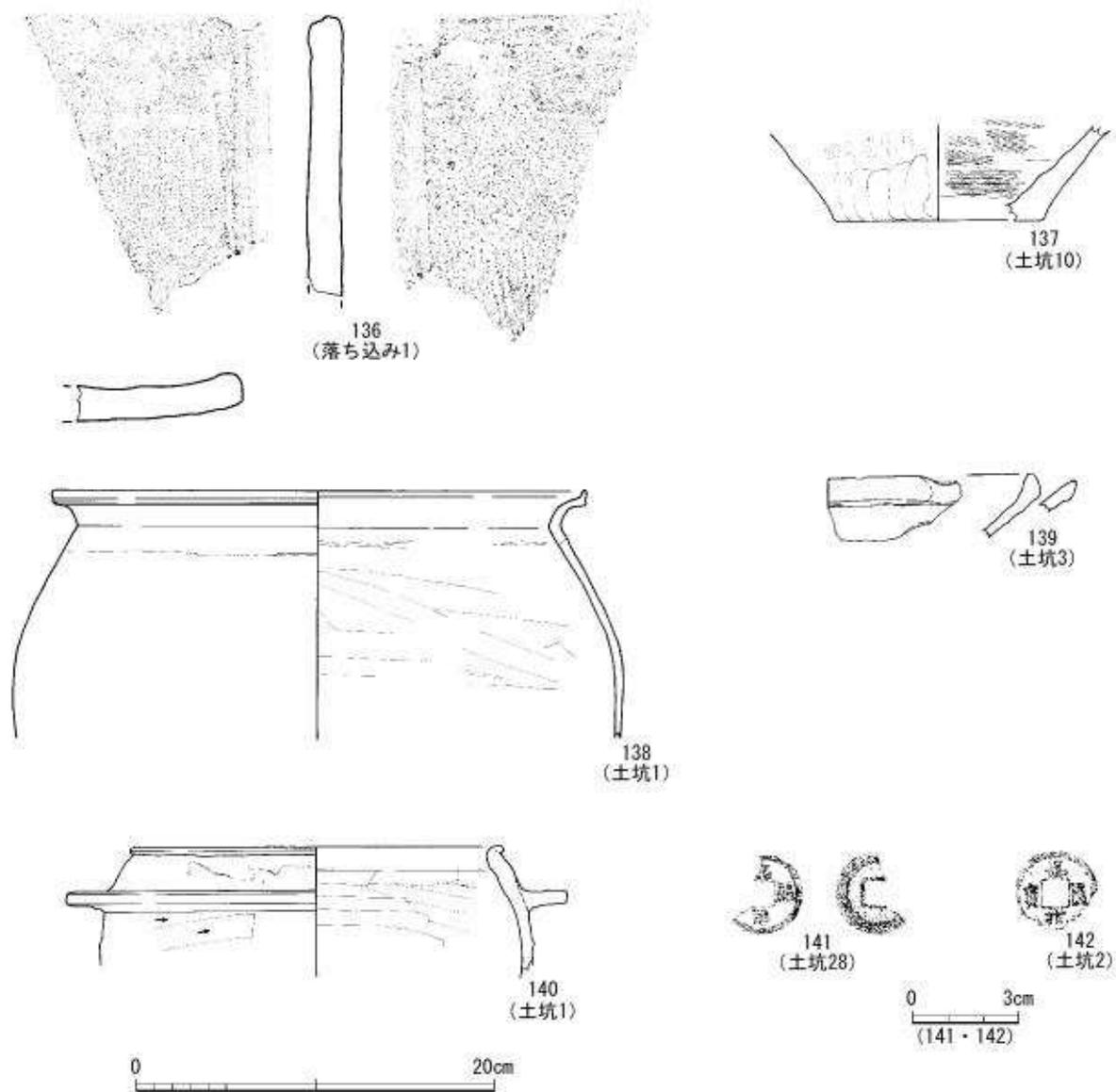
今回の調査において検出された土坑・ピットの多くは、遺物の出土状況から墓塚とみられ、平成23年度の隣接地の調査に引き続き、墓地がさらに西側まで広がっていたことが判明した。今回の調査で、初めて明確な副葬品が添えられた土塚墓が1基見つかった。刀子と瓦器がセットになっており、土器の特徴から13世紀中ごろ以降の墓塚であると推測される。鎌倉時代の後半にあたり、観心寺の荘園開発に伴いこの地に移り住んだ人々の墓であると推測される。また、瓦が2点出土しており、寺院や小堂のようなものが、周辺に建っていた可能性も指摘できる。

また、調査区の北西端に掘立柱建物跡が1棟確認できた。これまでの1区周辺の調査で、明確に建物跡であると判断できた初めての遺構である。墓塚の集中する区画から外れた位置にあるが、遺構の時期は明確ではない。

縄文土器や石鏃・石匙が出土しており、縄文時代の明確な遺構は見つからなかったものの、隣接地の調査同様の状況が確認できた。（島津）



第18図 1区遺構出土遺物実測図1 (1/4)



第19図 1区遺構出土遺物実測図2 (1/4・1/2)

2区

1. 調査区と基本層序

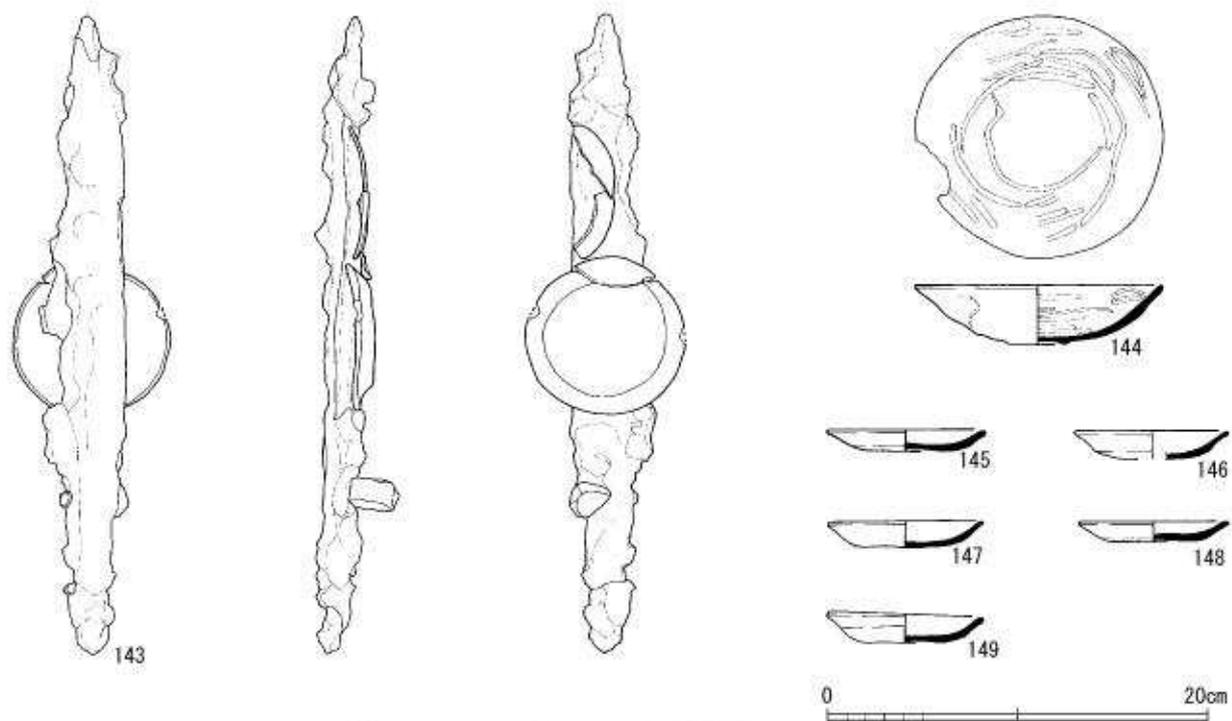
2区は、1区の南側で1区より一段高い位置にあたる。48㎡を対象に、平成24年9月22日から平成25年1月22日にかけて現地調査を実施した。

重機による表土掘削を行った後、人力による包含層掘り下げ、遺構検出を行った。耕土(層厚約0.25m)、床土(層厚約0.05m)、にぶい黄褐色砂(層厚約0.2m)、黄褐色シルトが堆積しており、黄褐色シルト上面で遺構が検出された。

2. 遺構と遺物

直径0.3m、深さ0.12m、円形を呈するピットが1基検出された。埋土はにぶい黄褐色シルトで、遺物は出土しなかった。その他、調査区北壁でピットと思われる遺構の痕跡を確認した。

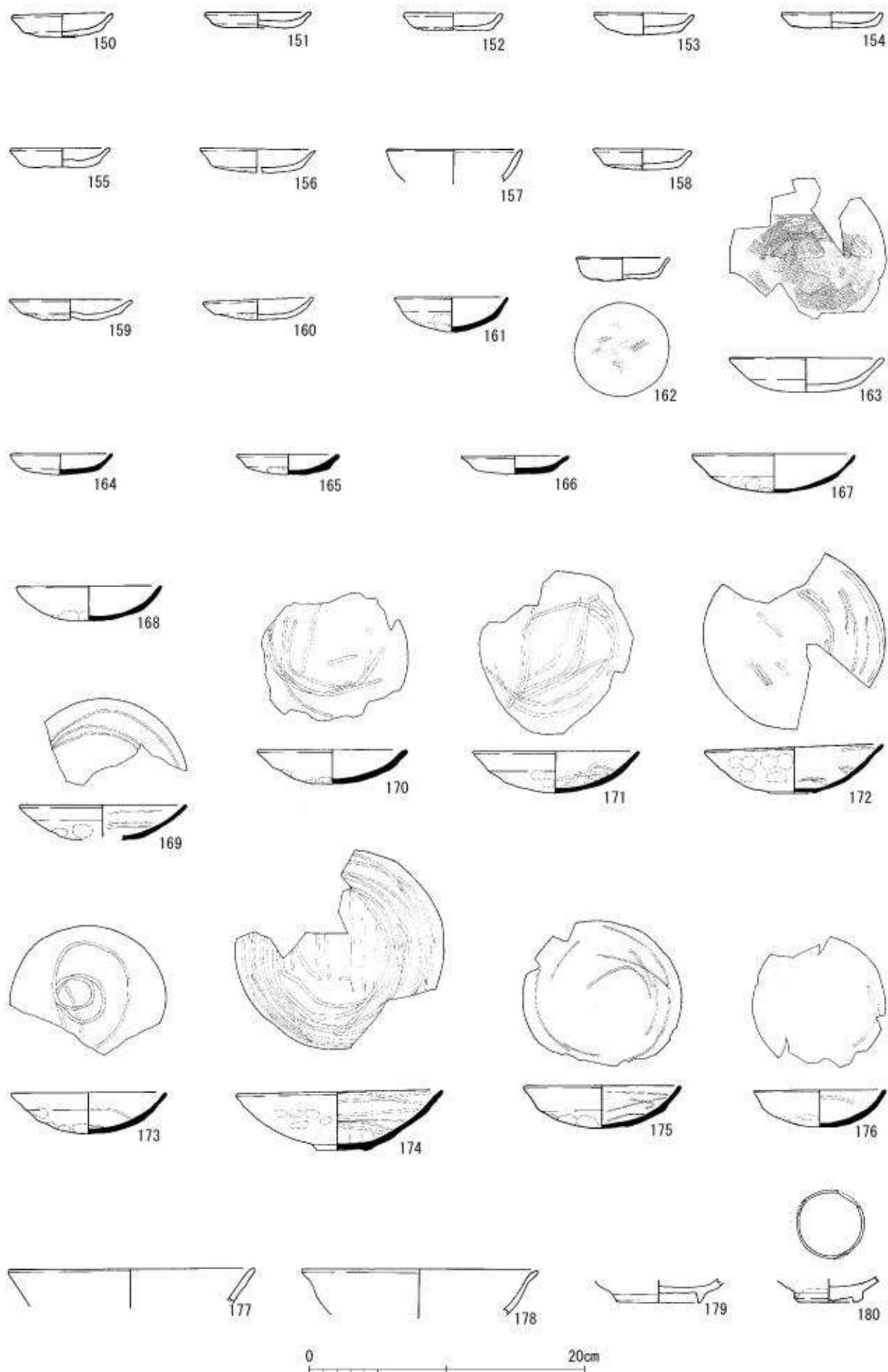
遺物包含層であるにぶい黄褐色シルトから、土師質土器、瓦器片が若干出土したが、図化できるものは認められなかった。



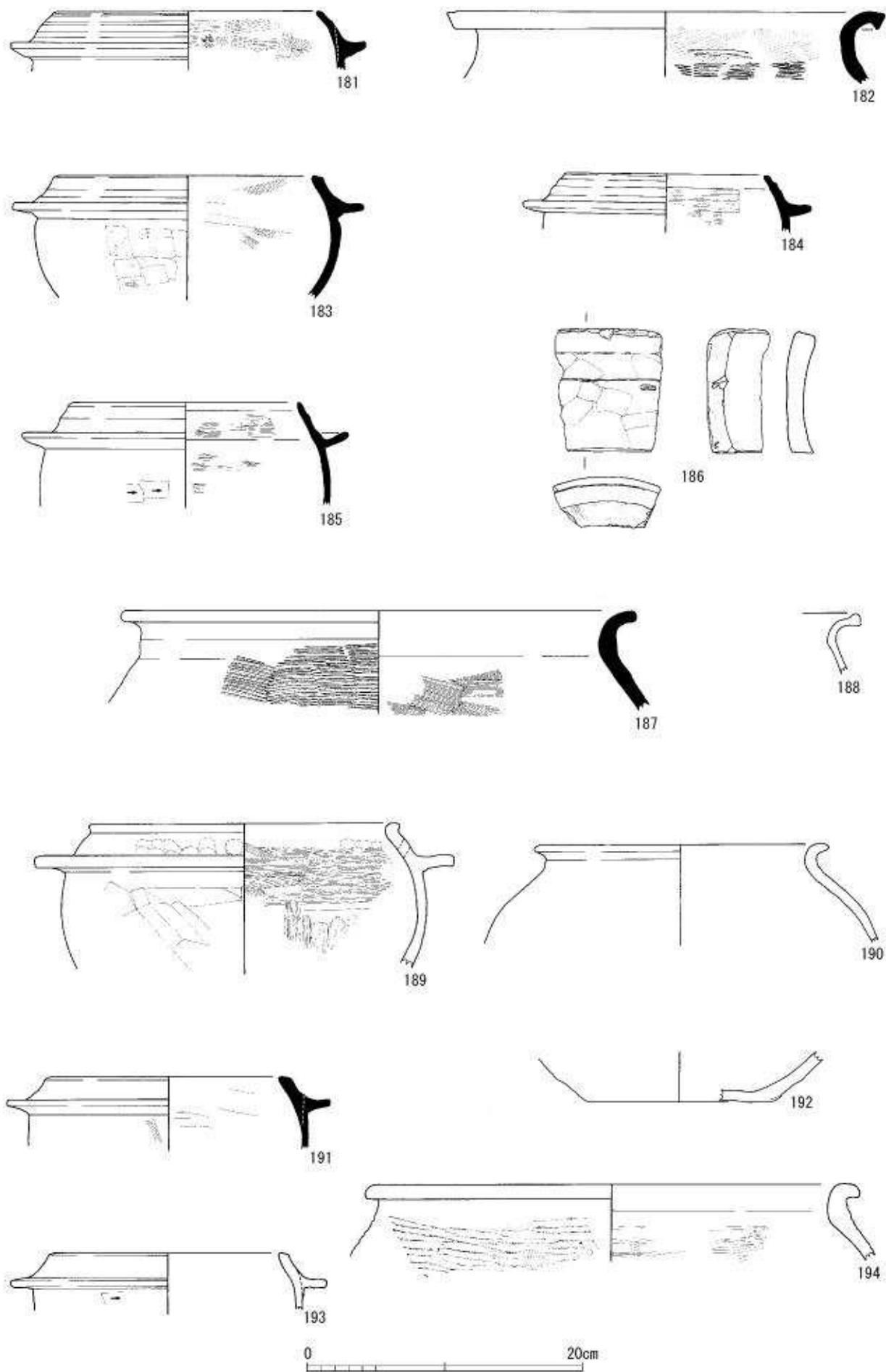
第20図 1区土坑23出土遺物実測図 (1/4)

3. 小結

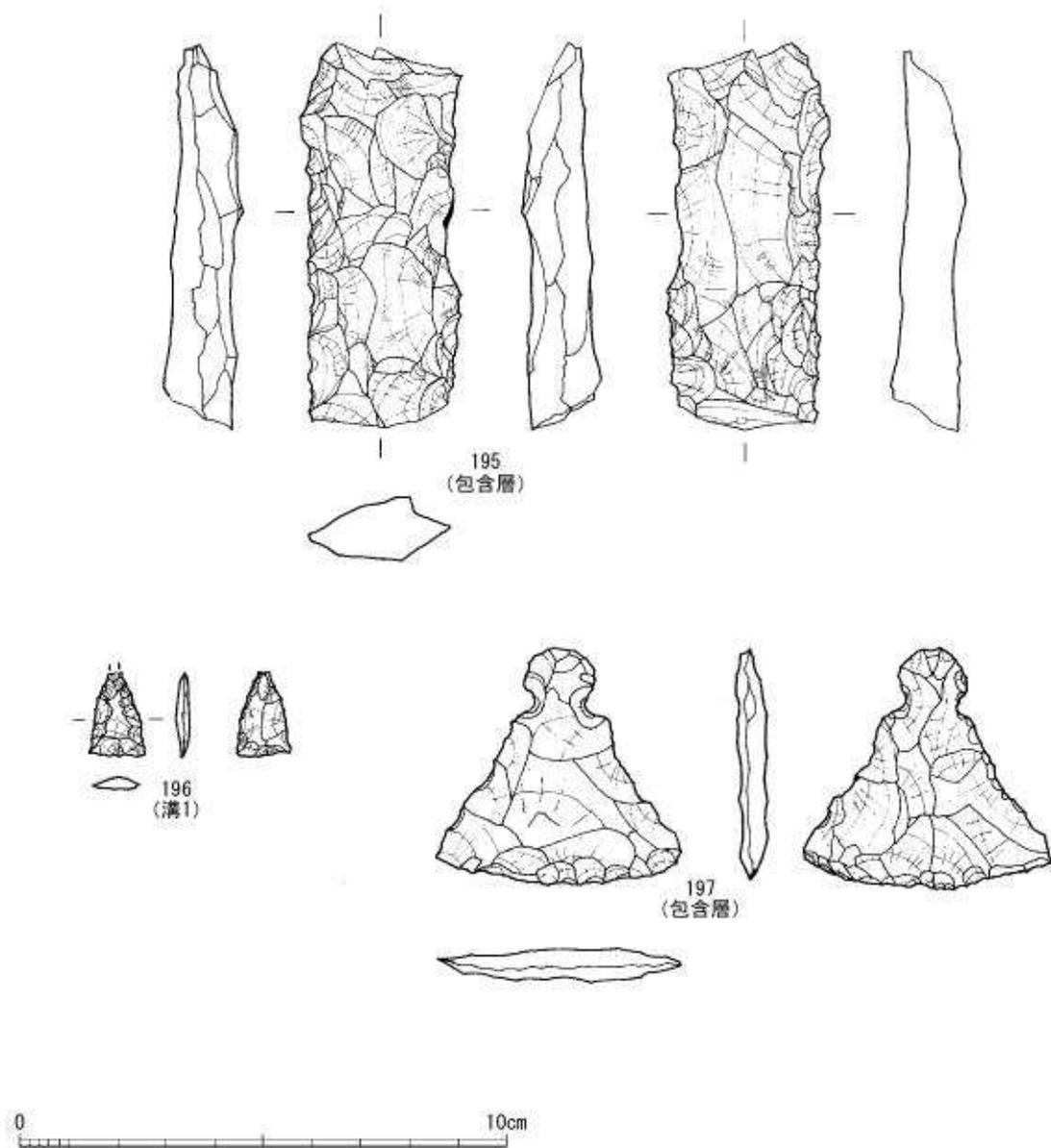
1区と隣接しており、何らかの関連性があると考えられるが、狭小な土地であり、建物跡になるような遺構は検出されなかった。しかし、遺物包含層から中世の遺物が出土していることから、周辺での人々の生活が営まれていたことは確実である。この場所は建物以外の土地利用がなされていたと考えられる。(烏津)



第21图 1区包含层出土遗物实测图1 (1/4)



第22图 1区包含层出土遗物实测图2 (1/4)



第23图 1区出土石器 (2/3)

5区・6区・7区・8区・9区・10区・11区

5区から8区は石見川北側に設定した調査区である。この区域は平成25年度に発掘調査する予定であった。しかしながら、事業者の計画変更により前倒しして調査することとなった。また、この区域は平成24年度に調査する予定地より面積が広く、遺構面が破壊される耕作地全面を調査することは困難であった。

このため、この区域の試掘調査では、遺物は出土していたが遺構は検出していなかったため、まず、遺構面が破壊される耕作地に大きめの調査区を設定し、遺構・遺物が発見されれば、調査区を拡張して発掘調査することとなった。また当初この区域には、3、4調査区を設定していたが、事業者の計画変更により遺構面が破壊されないことになったため、調査より除外した。

9区、10区は、事業者より設計図面と現況地盤を精査した結果、遺構面を破壊することが判明した調査区である。このため、10区の部分に一次調査の際に4から6トレンチを設定し発掘調査を実施した。この結果、遺構・遺物が発見されたため二次調査で発掘調査を実施した。

11区は、平成25年度に発掘調査する予定であったが、二次調査開始後、事業者よりの依頼により前倒しして発掘調査することとなった。この区域についても試掘調査では、遺物は出土していたが、遺構は検出していなかったため、まずトレンチによる発掘調査を実施し、遺構・遺物が発見されれば拡張して発掘調査を実施することとなった。

5区

5区は、石見川北岸に設定した調査区の中で一番標高の高い耕作地に設定した調査区である。現地表面の標高はT.P.約296.8mを測る。当初は幅5m、長さ25mの調査区を設定した。調査の結果、遺構・遺物が発見されたため最大幅7m、長さ30mまで調査区を拡張した。

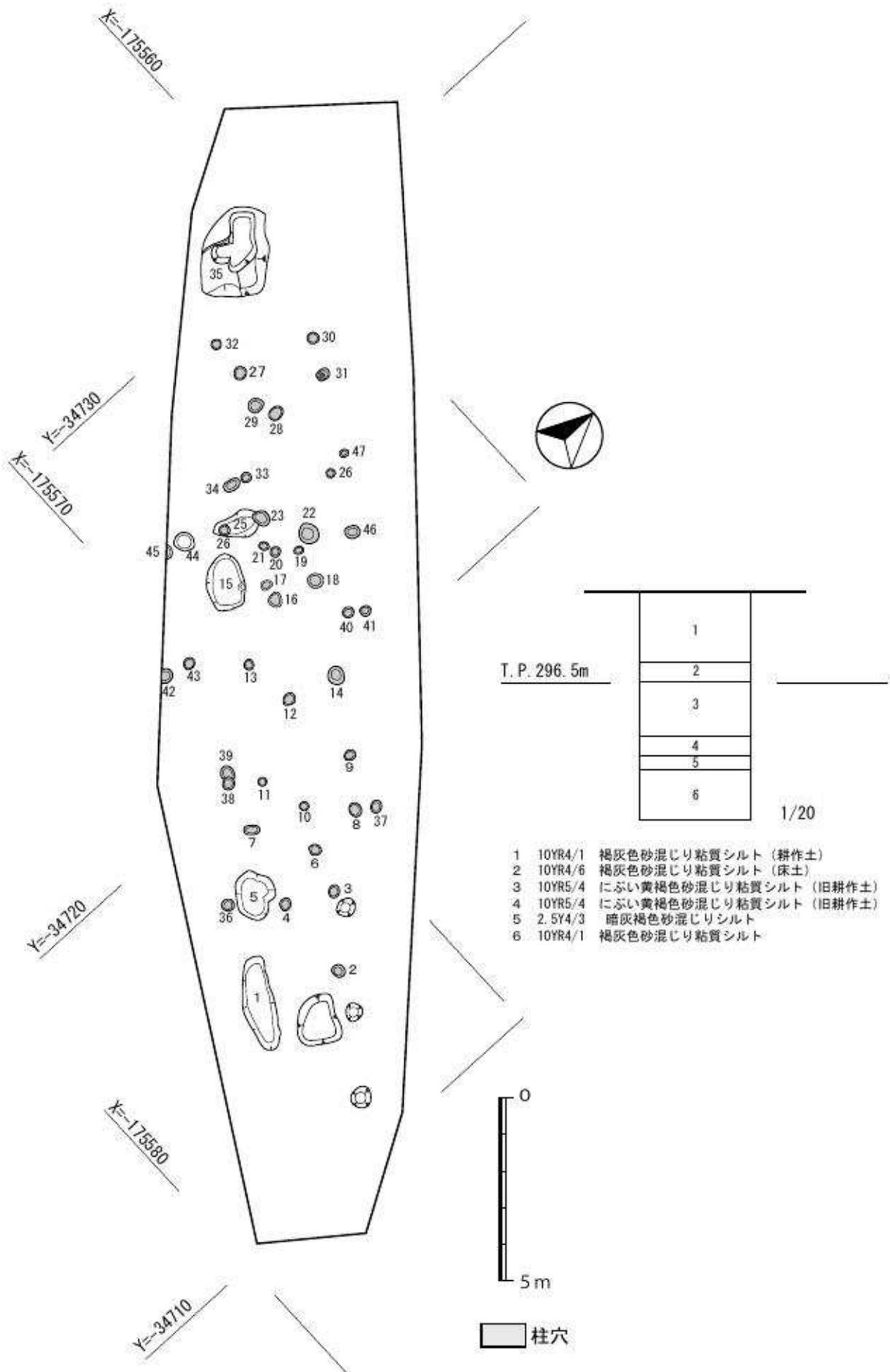
基本層序は、1層10YR4/1褐灰色粘質シルト（耕作土）、2層10YR4/6褐灰色粘質シルト（床土）、3層10YR5/4にぶい黄褐色砂混じり粘質シルト（旧耕作土）、4層10YR5/4にぶい黄褐色砂混じり粘質シルト（旧耕作土）5層2.5Y4/3暗灰褐色砂混じりシルト、6層10YR4/1褐灰色砂混じり粘質シルトである。地山上面より遺構を検出した。

遺構は、柱穴41基、土坑6基を検出した。柱穴はいずれも直径約20cmから30cm、深さ約20cmから40cmを測る。埋土は、10YR4/4褐色砂混じり粘質シルト、10YR3/2黒褐色砂混じり粘質シルト等である。建物は復元できなかった（第1・24図 図版十一）。

遺物は、柱穴32（第25図200）、43（第25図201）から瓦器碗、43から瓦器小皿（第25図198）22（第25図199・202）、31（第25図203）から土師質小皿が出土した。

土坑1は、幅約1m、長さ約3.5mの不定形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は2.5Y5/3黄褐色粗砂混じり粘質シルト、10YR3/2黒褐色砂混じり粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

土坑5は、幅約1m、長さ約1.3cmの不定形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色砂混じり粘質シルト、10YR3/2黒褐色砂混じり粘質シルトである。遺物は出土しなかった。



第24図 5区遺構図及び断面模式図

土坑15は、幅約1.1m、長さ約1.5mの楕円形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は2.54Y4/2暗灰黄色砂混じり粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

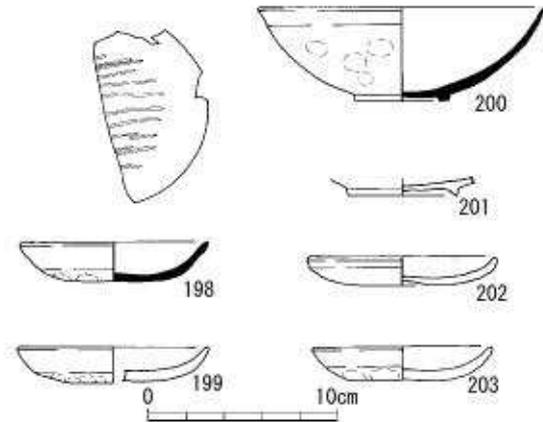
土坑25は、幅約70cm、長さ約1.5mの不定形を呈し、深さ約10cmを測る。柱穴23・25に切られている。埋土は10YR4/1褐色灰砂混じり粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

土坑35は、攪乱によりその全体を明らかにすることはできなかった。深さ約50cmを測る。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色砂混じり粘質シルトである。土師質土器が出土したが小片で図化できなかった。

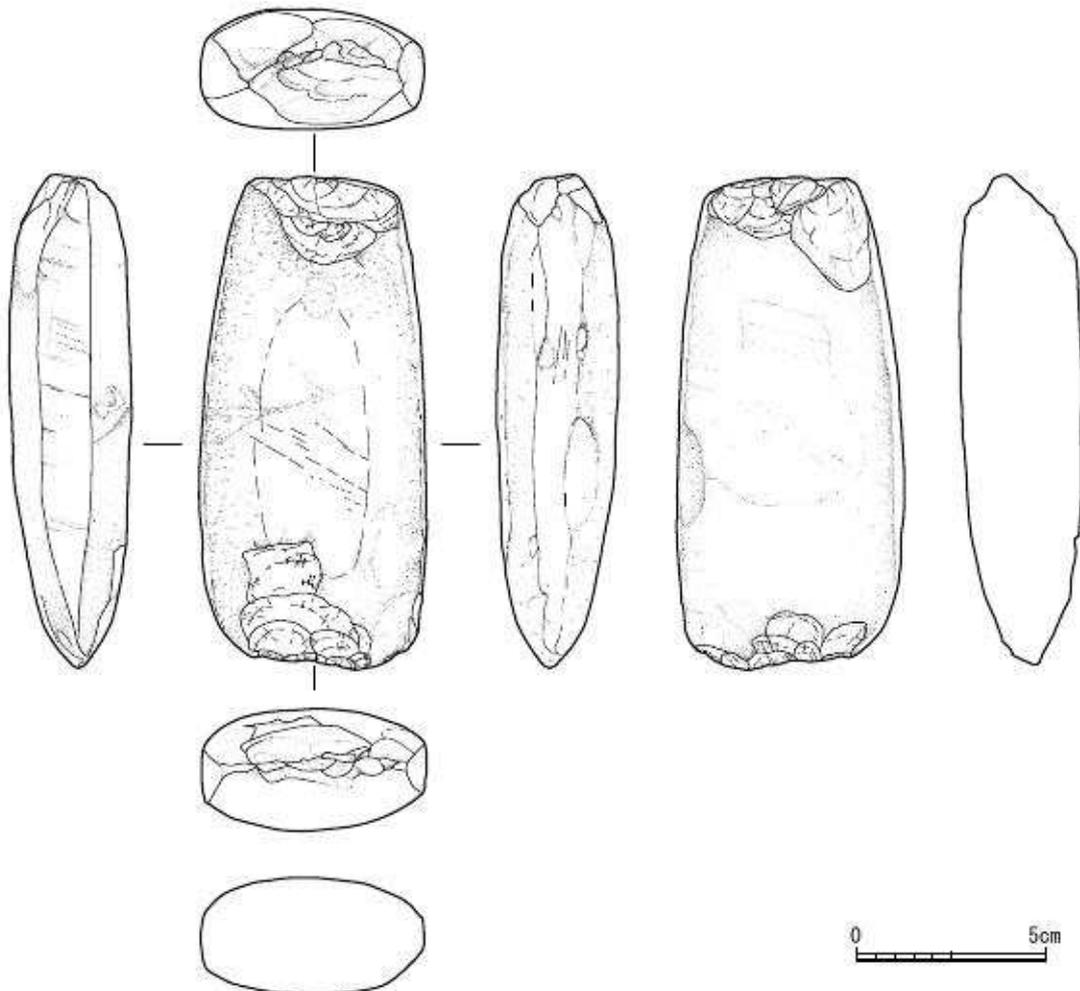
土坑44は、直径約40cmの楕円形を呈し、深さ約20cmを測る。埋土は焼土と炭化物であり、焼土坑と思われるが、地面は焼けてはいなかった。遺物は出土しなかった。

また、地山直上より砂岩製の磨製石斧が出土した。その形態より縄文時代のもと思われる。

5区から出土した瓦器は高台を持ち、その形態から時期的には鎌倉時代後期と考えられる。(竹原)



第25図 5区遺構出土遺物



第26図 5区出土石斧

6区

5区の2段下の耕作地に設定した調査区である。現地表面の標高はT.P.約294.7mを測る。幅5m、長さ40mの調査区を設定した。遺構は検出されず、石見川に向かって落ちる谷地形を検出した。

瓦器、土師質土器が出土したが細片で図化できなかった(第1・27・31図 図版十二)。(竹原)



7区

5区の2段下の耕作地に設定した調査区である。現地表面の標高はT.P.約289.6mを測る。上底10m、下底34m、高さ10mの台形の調査区を設定した。遺構は検出されず、石見川に向かって落ちる谷地形を検出した。

遺物は出土しなかった(第1・28・31図 図版十二)。(竹原)



8区

7区の南側に耕作地に設定した調査区である。現地表面の標高はT.P.約289.8mを測る。一辺15m、高さ11mの平行四辺形の調査区を設定した。遺構は検出されず、石見川に向かって落ちる谷地形を検出した。

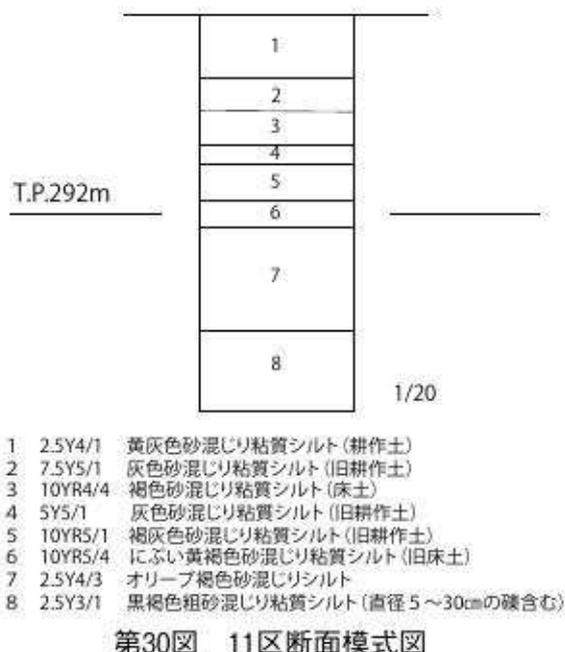
遺物は出土しなかった(第1・29・31図 図版十三)。(竹原)

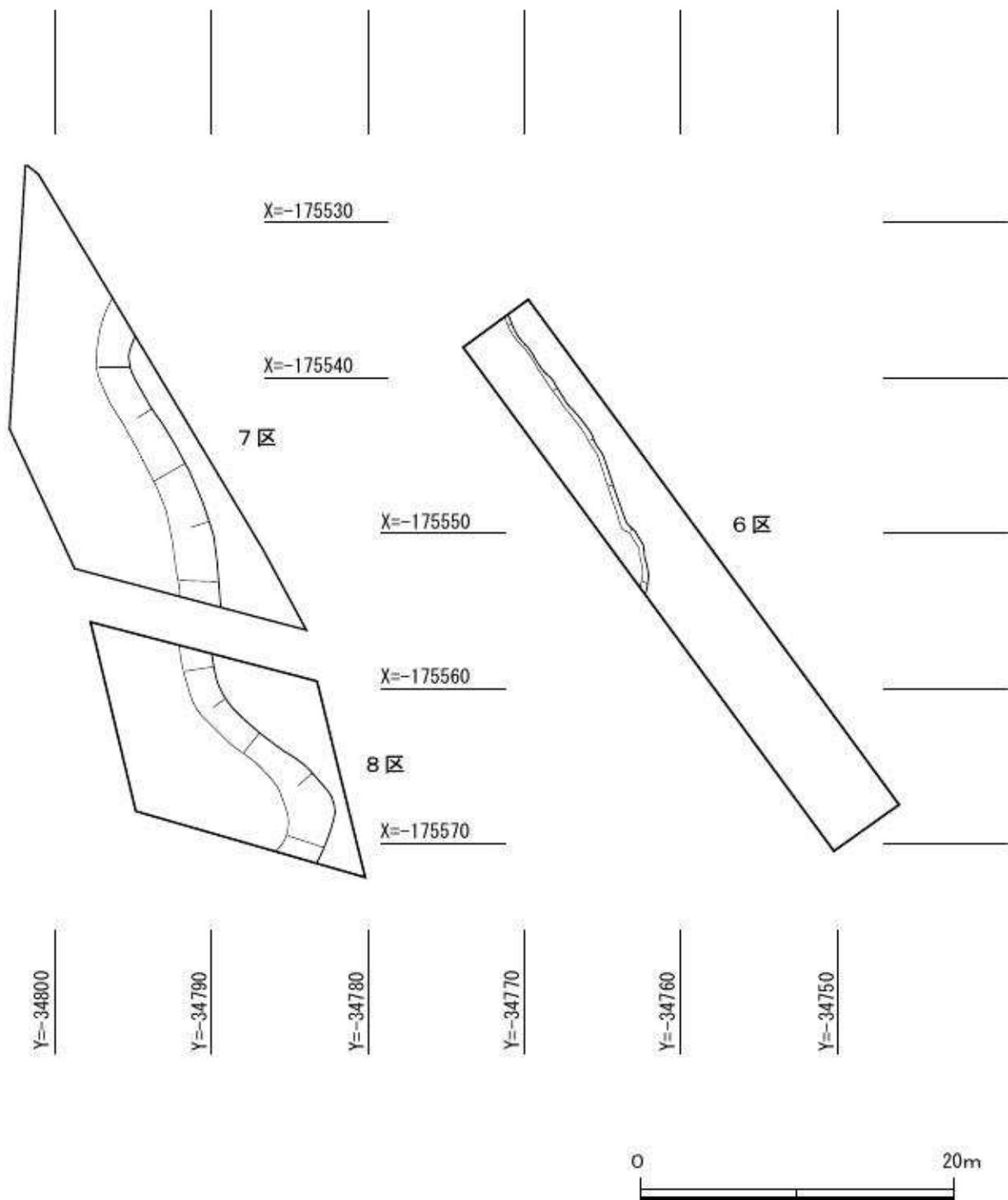


11区

今回の調査で最も西側に設定した調査区である。現地表面の標高はT.P.約292.5mを測る。幅2m、長さ20mの調査区を設定した。層序は、耕作土と床土の互層が続いており、3回ほど耕作面をかき上げしている。遺構は検出されなかった。

各層から瓦器、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった(第1・30図 図版十五)。(竹原)





第31图 6·7·8区平面图

9区

1. 調査区と基本層序

9区は、10区と隣接した位置にあたり、96㎡を対象に現地調査を実施した。

重機による表土掘削を行った後、人力による包含層掘り下げ、遺構検出を行った。耕土(層厚約2m)、床土(層厚約0.1m)、平坦面造成のための近年の盛土、褐灰色砂が堆積している状況が確認できた。なお、調査区中央から北側に、地表面から約0.5mの深さで赤褐色の焼土の堆積が認められた。本調査区は、二次堆積上に遺構面が形成されているが、地山までの掘削を行っていない。

2. 遺構と遺物

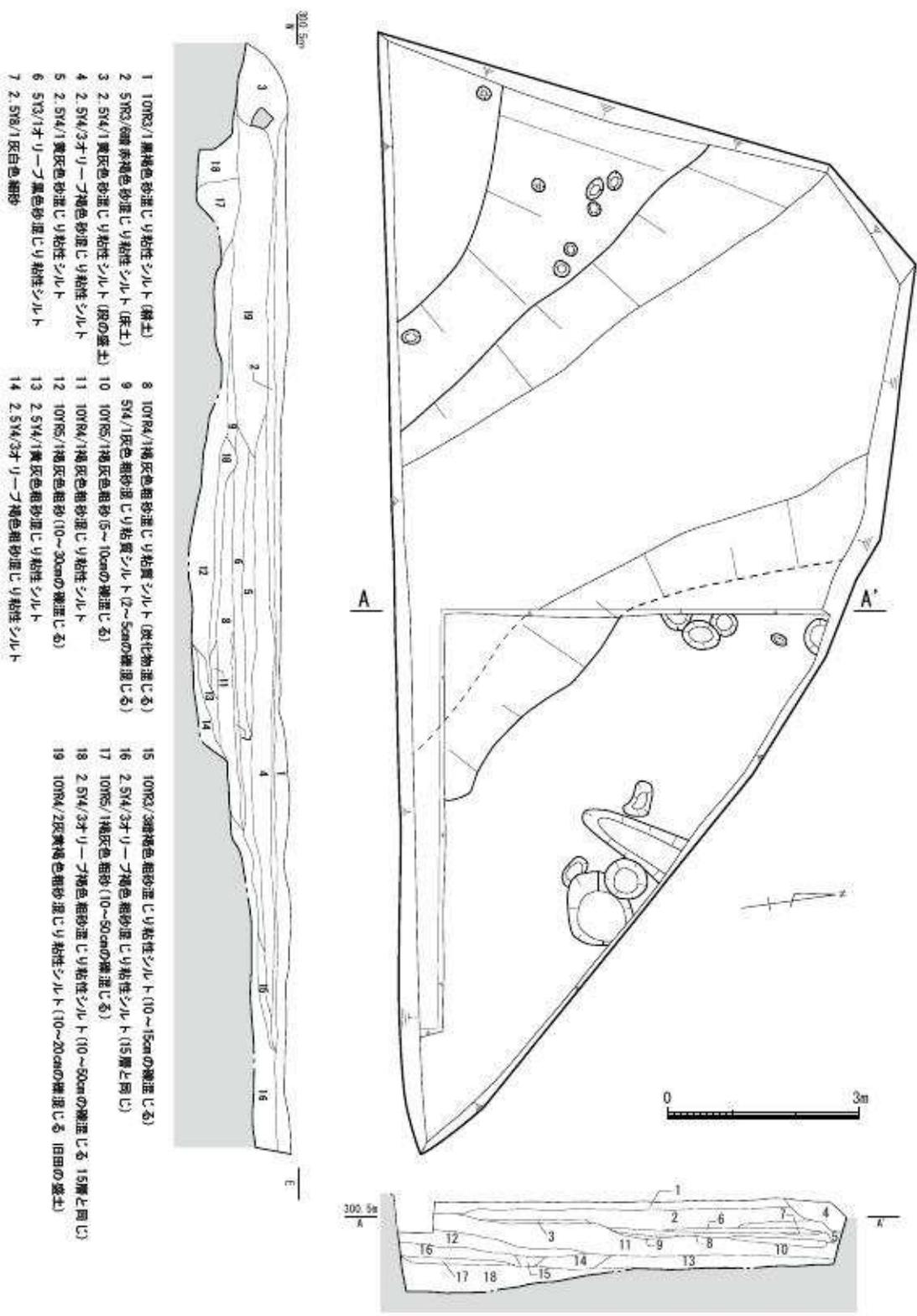
調査区南西と北東に比較的安定した面があるが、凶化可能な遺物を含む遺構は認められなかった。なお、遺構面を形成する褐色砂には、人頭代の礫が多く含まれており、二次堆積の上に遺構が形成されている様子が読み取れる。

調査区中央で、南北方向の溝状遺構が検出された。調査区南西の上段からなだらかに落ち込み、調査区北東に立ち上がりが見られた。なお、南西側には、直径1.5m以上の礫が埋まっており、何らかの自然作用による土砂の流入が想起される。

調査区全体に褐灰色砂の堆積が認められ、ここから多数の土師器皿、瓦器碗、瓦器皿、瓦質羽釜、貨幣などが出土した。

3. 小結

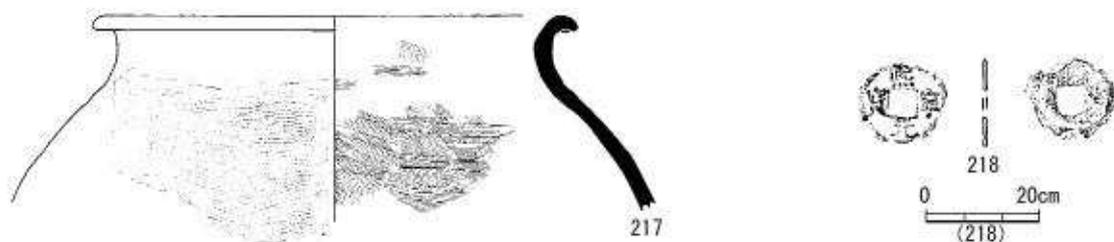
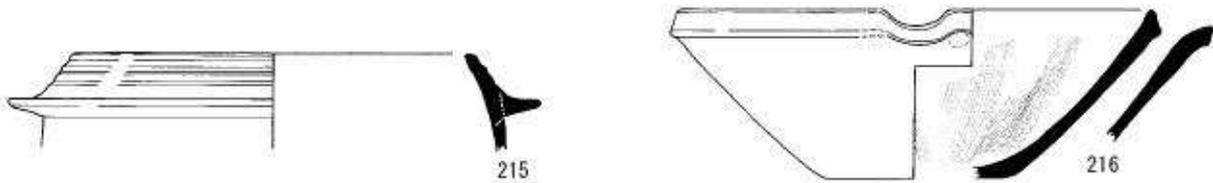
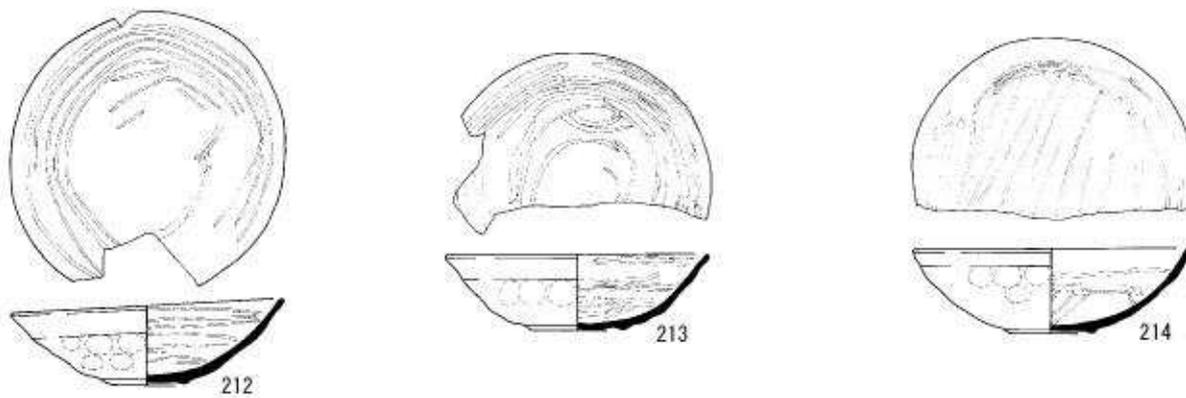
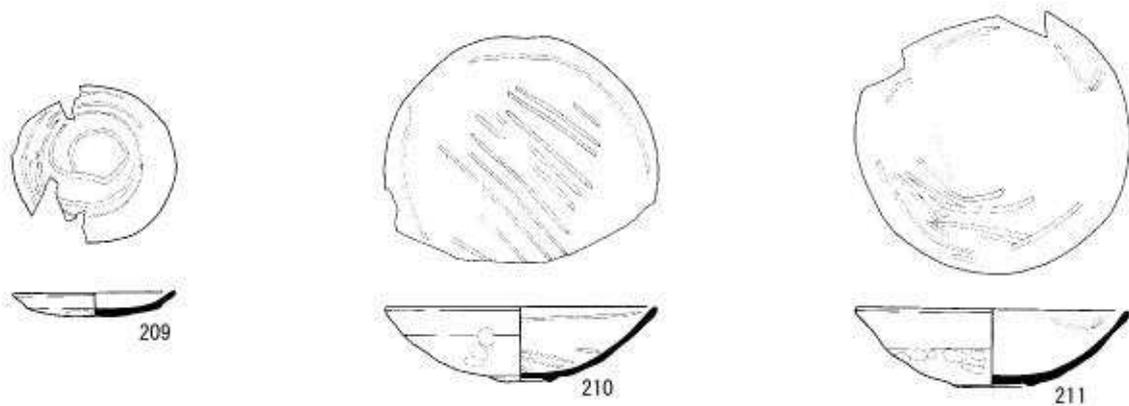
石見川に向かって傾斜する地形を人為的に整地し、平坦面を作り出している状況が認められた。土石流もしくは石見川の河川活動により、砂礫や岩石がこの場所にもたらされ、その上に整地がなされ、現在の地形が形成されたと考えられる。(烏津)



- 1 10YR3/1 黒褐色砂混じり粘性シルト (粘土)
- 2 5YR3/6 暗赤褐色砂混じり粘性シルト (床土)
- 3 2.5Y4/1 黄灰色砂混じり粘性シルト (段の臺土)
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂混じり粘性シルト
- 5 2.5Y4/1 黄灰色砂混じり粘性シルト
- 6 5Y3/1 オリーブ黒色砂混じり粘性シルト
- 7 2.5Y6/1 灰白色細砂
- 8 10YR4/1 褐灰色粗砂混じり粘質シルト (炭化物混じる)
- 9 5Y4/1 灰白色粗砂混じり粘質シルト (2~5cmの塊混じる)
- 10 10YR5/1 褐灰色粗砂 (5~10cmの塊混じる)
- 11 10YR4/1 褐灰色粗砂混じり粘性シルト
- 12 10YR5/1 褐灰色粗砂 (10~30cmの塊混じる)
- 13 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じり粘性シルト
- 14 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり粘性シルト
- 15 10YR3/3 暗赤褐色粗砂混じり粘性シルト (10~15cmの塊混じる)
- 16 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり粘性シルト (15層と同じ)
- 17 10YR5/1 褐灰色粗砂 (10~50cmの塊混じる)
- 18 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり粘性シルト (10~50cmの塊混じる 15層と同じ)
- 19 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり粘性シルト (10~20cmの塊混じる 旧田の臺土)

- 1 5YR3/6 暗赤褐色粘質シルト (床土)
- 2 10YR3/3 暗赤褐色粘質シルト (炭化物混じる)
- 3 2.5Y5/2 灰赤色細砂
- 4 5YR4/1 褐灰色砂混じり粘質シルト (下の田の段)
- 5 5YR3/4 暗赤褐色砂混じり粘質シルト (粘土・炭化物層)
- 6 10YR4/6 褐色粘質シルト
- 7 10YR5/2 灰黄褐色細砂
- 8 10YR4/1 褐灰色小礫 (2~5cm) 混じり粘性シルト
- 9 10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じり粘性シルト
- 10 10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じり粘性シルト (炭化物混じる)
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色小礫混じり粘性シルト
- 12 5Y3/1 オリーブ黒色砂混じり粘性シルト
- 13 10YR4/1 褐灰色小礫 (2~5cm) 混じり粘性シルト
- 14 10YR2/2 黒褐色粗砂混じり粘性シルト (炭化物・焼土層)
- 15 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混じり粘性シルト (炭化物混じる)
- 16 10YR4/1 褐灰色粗砂混じり粘性シルト (炭化物混じる)
- 17 10YR2/2 黒褐色粗砂混じり粘性シルト
- 18 10YR5/1 褐灰色粗砂 (10~30cmの塊混じる 谷)

第32図 9区遺構図・土層断面図 (1/100)



0 20cm

0 20cm
(218)

第33图 9区遗物实测图

10区

10区は、一次調査1トレンチの1段上の耕作地に設定して調査区である。現地表面の標高は、T.P.299.8mを測る（第1・34図 図版十四・十五）。

耕作土、床土を除去すると、すぐに遺構面となる。遺調査区南側は風化した岩盤を削りだし、調査区北側は、斜面地を岩盤面まで盛土して平坦面を作りだしている。この面を第一面として調査した。第一面の調査終了後、盛土を掘削して本来の地形を検出した。この面を第二面とした。

第一面の調査で遺構は、柱穴20基、土坑5基、溝1条を検出した。柱穴は直径約20から50cm、深さ約20から40cmを測る。埋土は、10YR3/4暗褐色粗砂質シルト、等である。柱穴の中には、柱跡が確認できるものもある。埋土の中には焼土や炭化物が混入している。

柱穴17、16、19は柱穴間約2.3mの間隔で並び、掘立柱建物跡と思われる。北側に対応する柱がないため、建物は調査区南側に続くものと思われる。

土坑22は、最大幅約1.5m、長さ約6m、深さ約20cmを測る。5トレンチを調査した際には、調査面積が狭かったため包含層として掘削している。埋土は5YR3/2暗赤褐色砂混じりシルトであり、焼土・炭化物を多量に含んでいる。

出土した遺物は、瓦器碗（第38図219から225）、土師質小皿（第38図226から236）、土師質羽釜（第38図237）などである。瓦器碗は直径約15cmを測り高台がつくもの、直径約11cmで高台がつかないものがある。また、北宋銭である咸平元宝（第41図256）が出土した。2枚重なっているが、錆のため分離することはできなかった。

土坑24は、直径約3.5mの円形を呈し。深さ約90cmを測る。埋土は10YR2/3黒褐色砂混じりシルト（焼土、炭化物含む）、7.5YR4/3褐色砂混じりシルト（焼土、炭化物含む）、10YR4/1褐灰色砂混じりシルトである。

出土した遺物は、瓦器碗（第39図238から241）、土師質小皿（第39図242から251）、土師質羽釜（第39図252）などである。瓦器碗は、直径約11cmで高台がつかない。

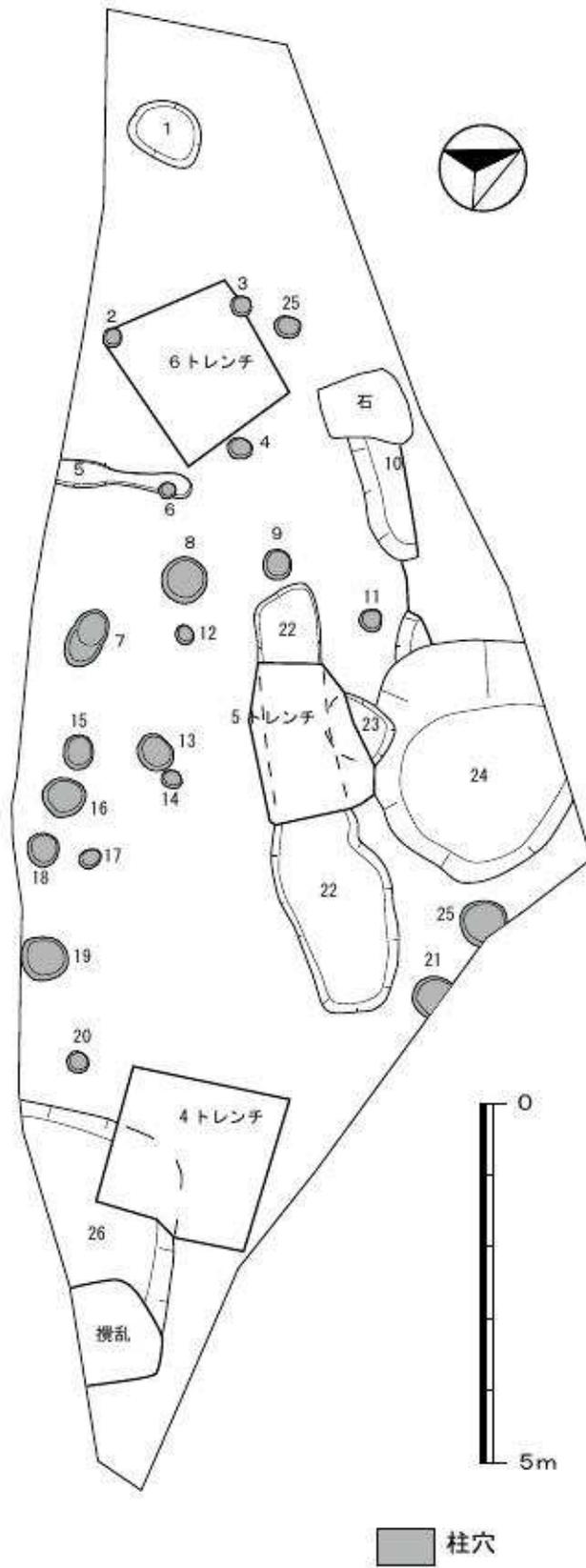
土坑26は、攪乱及び調査区外に続くため全容は明らかでないが一辺約3mの方形を呈し。深さ約60cmを測る。埋土は10YR4/4褐色砂混じりシルトである。

出土した遺物は、瓦器碗（第40図253）、須恵質すり鉢（第40図254）、青磁（第40図255）などである。瓦器碗は直径約11cmで高台がつかない。

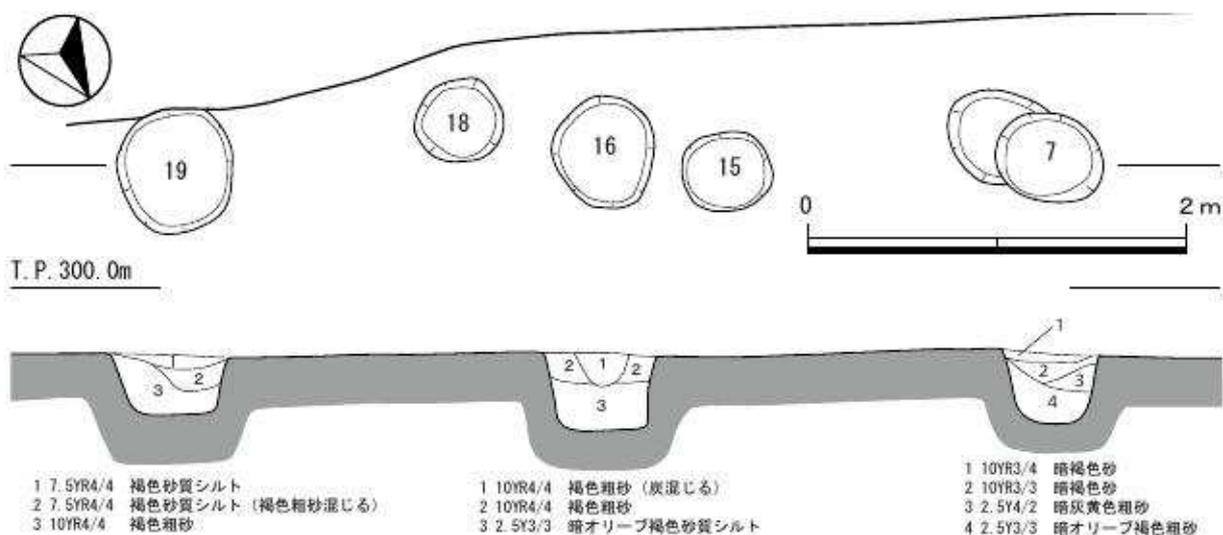
第一面の調査終了後、北側の盛土を掘削し、本来の地形を検出した。急激な角度で石見川に向かって傾斜しており、生活面を作り出すために、多大な労力をかけていたことをしのばせる。

盛土中からは、瓦器碗（第42図257、259）、瓦器小皿（第42図258）、土師質小皿（第42図260、261）などが出土した。瓦器碗は直径約11cmで高台がつかない。

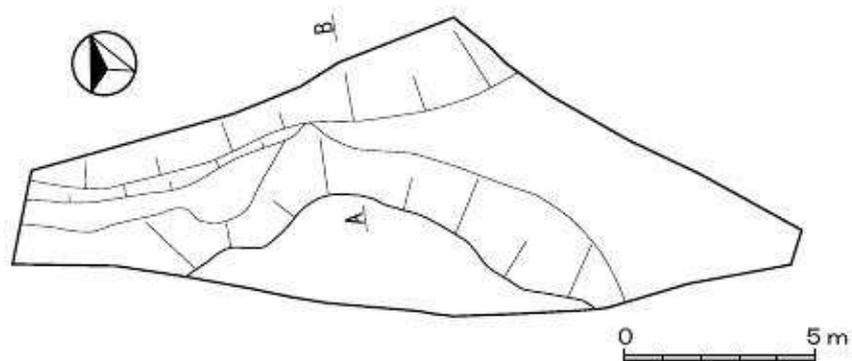
遺構から出土した高台のない瓦器碗から、時期的には室町時代初期と思われるが、盛土からも高台のない瓦器碗が出土している。このことから室町時代初期に新たに生活面を造成したと考えられる。（竹原）



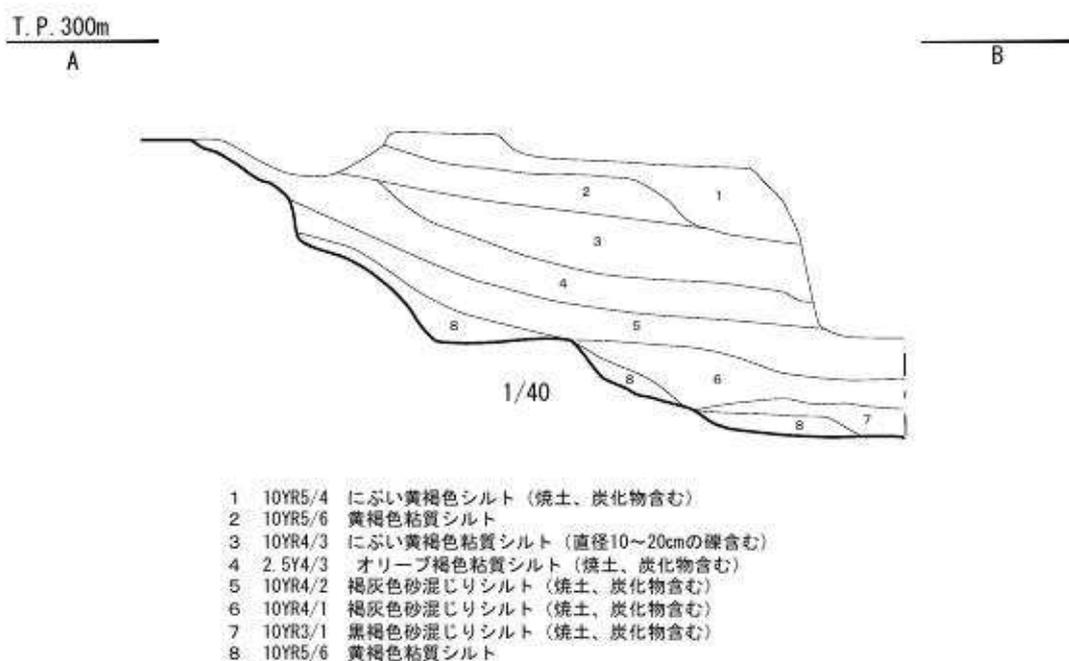
第34図 10区第一面遺構図



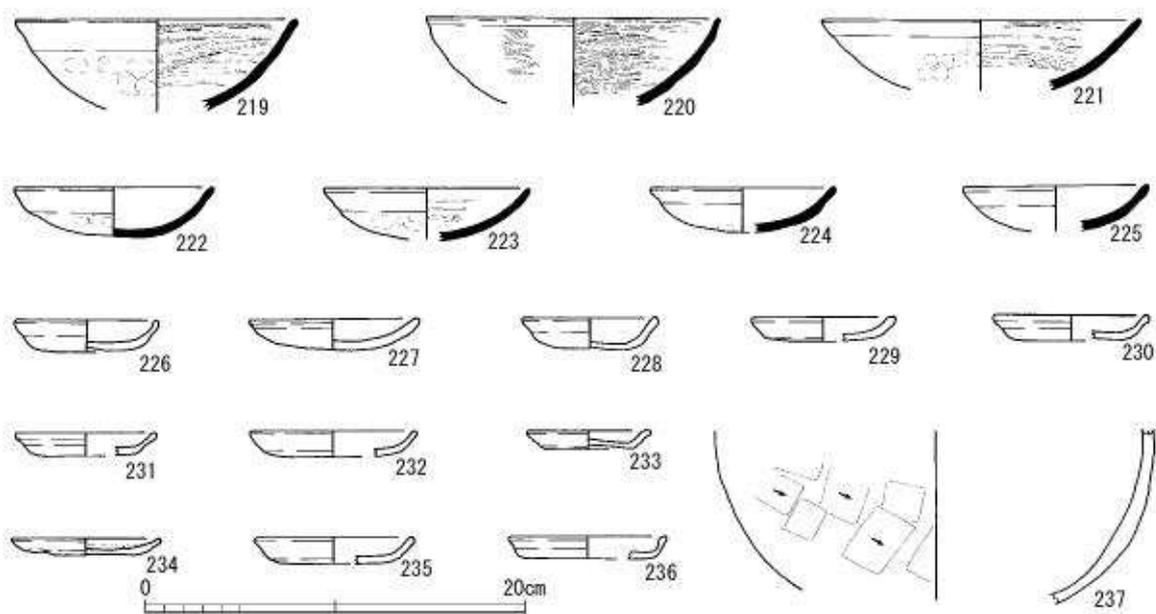
第35図 10区掘立柱建物跡



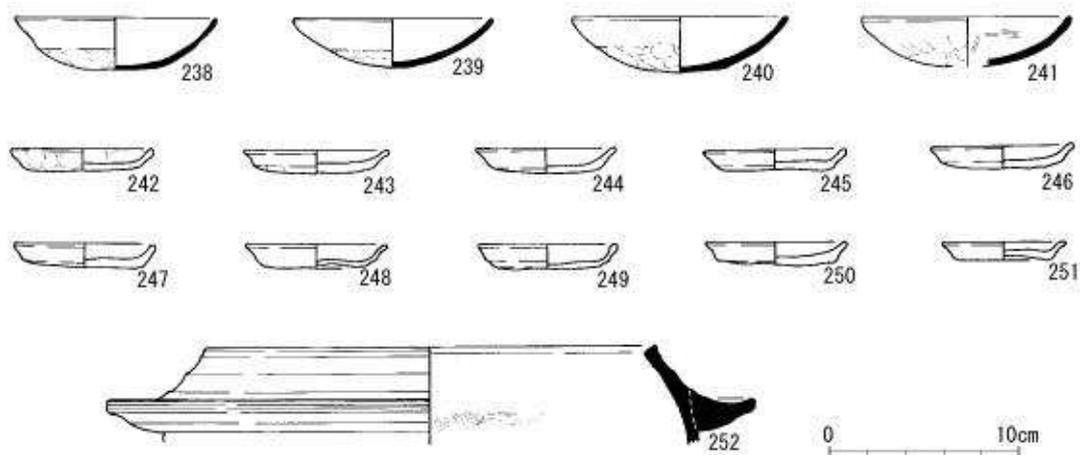
第36図 10区第二面平面図



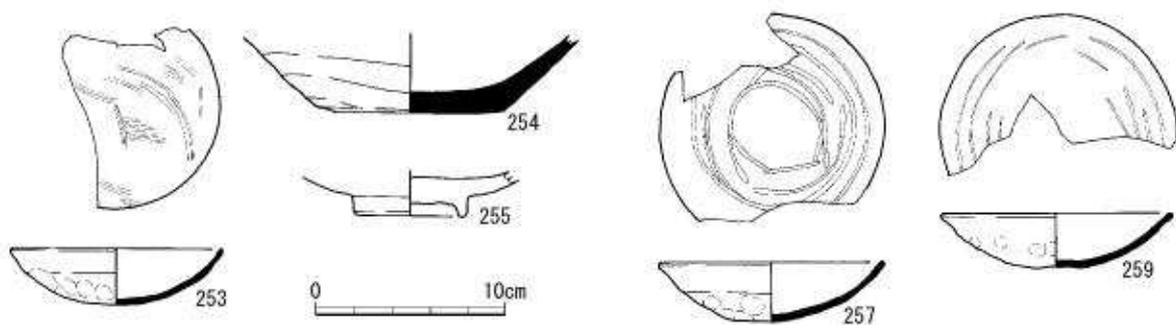
第37図 10区第二面盛土断面図



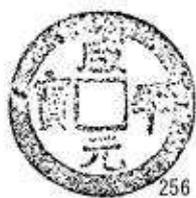
第38图 10区土坑22出土遗物



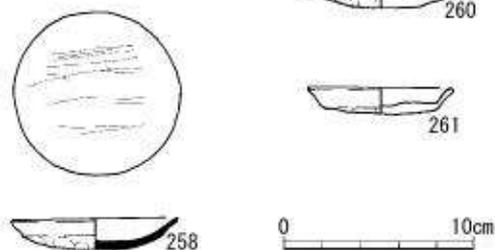
第39图 10区土坑24出土遗物



第40图 10区土坑26出土遗物



第41图 10区土坑22出土貨幣 (原寸)



第42图 10区盛土出土遗物

第3章 まとめ

中世の太井遺跡の集落

太井遺跡の発掘調査では、平成23年度の小深地区の調査（太井遺跡発掘調査概要・Ⅱ 平成25年3月31日）及び、今回調査した1トレンチ、2トレンチ、10区の一帯、5区の三カ所の調査区で中世の建物跡や土坑・溝を発見し、この地が集落跡であること確認できた。位置的には、集落は密集するのではなく点在しているように思われる。発見された集落の時期は、鎌倉時代後期から室町時代初期にかけてのきわめて短期間であり、建て替え等がほとんどなく、短期間のうちに居住域は廃棄され、耕作地と変化していく。

今回の調査では、1トレンチ、2トレンチ、10区の調査では遺構及び遺構面の土層には、焼土や炭化物が多く含まれており、建物が火災にあったものと考えられる。河内長野市教育委員会が行ったこの近辺の調査でも同時期の遺構・遺物が出土し、同様に火災にあっていただけがわかっている。きわめて短期間の間に居住域が廃棄されたのは、火災がその要因の一つとも考えられる。

墓域の調査では、約100年程度の時期幅の遺物が出土していることから、別の区域にも集落が形成されていたと考えられるが、発掘調査は事業によって削平される土地のみを調査対象としているので、その全体像をとらえることはできなかった。

中世の太井に居住していた人々は、谷を盛土あるいは削平して居住域や耕作地を作って生活しているが、居住する期間は一から二世代の間だけであり、その後は別のところに移住したのと考えられる。その後、居住域は耕作地として現在まで連続して利用されていた。

現在の太井地区の景観は、石見川によって形成された谷地形を利用した棚田が広がり、人家は国道310号の両側に沿って数軒まとまった形で点在している。中世においてもその景観はほぼ変わらなかったと考えられる。（竹原）

墓域の調査

1区において、昨年度調査に引き続き、墓域が検出された。これにより太井遺跡の集団墓地の広がりを特定することができ、概ね南北15m、東西50mの範囲が墓地であったことが判明した。100年程度の時期幅の遺物が出土していることから、この場所に数世代の人々が埋葬されてきたとみられる。その後、墓地が他の場所に移され、耕作地として一帯が使われるようになったと考えられる。また、今回の調査では初めて明確に副葬品を伴う墓域が検出された。器や刀子が副葬される例は多く、河内長野市内では、時期は異なるものの、大日寺遺跡において、青磁碗を副葬する土壙墓が見つっている。また、墓の形状や土の堆積状況などから考え、土葬墓・火葬墓の2種類があると考えられる。炭を多く含む小土坑が4基見つかり、これは火葬墓である可能性が指摘できる。1mを超える大きさを持つ土坑は土葬墓であると考えられるが、今回の調査では、木棺の痕跡は確認できなかった。火葬と土葬が混在することに加え、一石五輪塔や墓石のような石製品の出土は認められず、「ムラの墓」が成立する以前の段階の集団墓地であると考えられる。（烏津）

挿図番号	掲載番号	調査区	遺構	層位	種類	器種
4	1	1トレ	1		瓦器	椀
4	2	1トレ	2		瓦器	椀
4	3	1トレ	7		瓦器	椀
4	4	1トレ	7		瓦器	椀
4	5	1トレ	7		瓦器	椀
4	6	1トレ	2		土師器	皿
4	7	1トレ	1		土師器	皿
4	8	1トレ	7		土師器	皿
4	9	1トレ	7		土師器	皿
4	10	1トレ	4		土師質	甕
4	11	1トレ	土坑		土師質	甕
5	12	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	13	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	14	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	15	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	16	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	17	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	18	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	19	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	20	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	21	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	22	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	23	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀?
5	24	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	25	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	26	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	27	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	椀
5	28	1トレ	トレンチ東半	2層	瓦器	皿
5	29	1トレ	トレンチ東半	2層	土師質	椀?
5	30	1トレ	トレンチ東半	2層	土師質	皿
5	31	1トレ	トレンチ東半	2層	土師器	皿
5	32	1トレ	トレンチ東半	2層	土師器	皿
5	33	1トレ	トレンチ東半	2層	土師器	皿
5	34	1トレ	トレンチ西半	1層	瓦質?	羽釜
5	35	1トレ	トレンチ東半	2層	土師質	甕
5	36	1トレ	トレンチ西半	1層	須恵質	片口鉢
5	37	1トレ	トレンチ西半	1層	土師質	甕
5	38	1トレ	東トレンチ東半	1層	青磁	碗
5	39	1トレ	トレンチ西半	1層	土師質	甕
8	40	2トレ	19		瓦器	椀
8	41	2トレ	19		瓦器	椀
8	42	2トレ	19		瓦器	椀
8	43	2トレ	20		瓦器	椀
8	44	2トレ	19		瓦器	椀
8	45	2トレ	19		瓦器	椀
8	46	2トレ	19		瓦器	椀
8	47	2トレ	19		瓦器	椀
8	48	2トレ	19		瓦器	椀
8	49	2トレ	19		瓦器	椀
8	50	2トレ	19		瓦器	椀
8	51	2トレ	19		瓦器	椀
8	52	2トレ	19		瓦器	皿
8	53	2トレ	19		瓦器	皿
8	54	2トレ	19		瓦器	皿
8	55	2トレ	19		瓦器	皿
8	56	2トレ	19		瓦器	皿
8	57	2トレ	19		瓦器	皿
8	58	2トレ	19		瓦器	皿
8	59	2トレ	19		瓦器	皿
8	60	2トレ	19		瓦器	皿
8	61	2トレ	19		瓦器	皿
8	62	2トレ	19		土師器	皿
8	63	2トレ	19		土師器	皿
8	64	2トレ	19		土師器	皿

表1 遺物観察表

挿図番号	掲載番号	調査区	遺構	層位	種類	器種
8	65	2トレ	19		土師器	皿
8	66	2トレ	19		土師器	皿
8	67	2トレ	19		土師器	皿
8	68	2トレ	19		土師器	皿
8	69	2トレ	19		土師器	皿
8	70	2トレ	19		土師器	皿
8	71	2トレ	19		土師器	皿
8	72	2トレ	19		土師器	皿
8	73	2トレ	19		土師器	皿
8	74	2トレ	19		土師器	皿
8	75	2トレ	19		土師器	皿
8	76	2トレ	19		土師器	皿
8	77	2トレ	19		土師質	羽釜
8	78	2トレ	19		土師質	羽釜
8	79	2トレ	19		土師質	羽釜
8	80	2トレ	19		土師質	羽釜
8	81	2トレ	19		土師質	羽釜
9	82	2トレ	20・20アゼ		瓦器	椀
9	83	2トレ	20		瓦器	椀
9	84	2トレ	20		瓦器	椀
9	85	2トレ	20・20アゼ		瓦器	椀
9	86	2トレ	20・20アゼ		瓦器	椀
9	87	2トレ	20・20アゼ		瓦器	椀
9	88	2トレ	20		土師器	皿
9	89	2トレ	20		土師器	皿
9	90	2トレ	20		土師器	皿
9	91	2トレ	20		土師器	皿
9	92	2トレ	20		土師器	皿
9	93	2トレ	20		土師質土器	椀底部
9	94	2トレ	20		土師質	羽釜
9	95	2トレ	20		土師質	羽釜
18	96	1区	溝4アゼ		土師器	皿
18	97	1区	土坑22		土師器	皿
18	98	1区	ピット1		土師器	皿
18	99	1区	土坑2		土師器	皿
18	100	1区	土坑2		土師器	皿
18	101	1区	土坑1アゼ		土師器	皿
18	102	1区	溝1		土師器	皿
18	103	1区	溝3		土師器	皿
18	104	1区	土坑16		土師器	皿
18	105	1区	溝3		土師器	皿
18	106	1区	土坑17		土師器	皿
18	107	1区	溝3		土師器	皿
18	108	1区	土坑18		土師器	皿
18	109	1区	土坑2アゼ		瓦器	皿
18	110	1区	ピット4		瓦器	皿
18	111	1区	溝3		瓦器	皿
18	112	1区	柱穴1		瓦器	皿
18	113	1区	ピット2		瓦器	皿
18	114	1区	土坑19		瓦器	皿
18	115	1区	土坑18		瓦器	椀
18	116	1区	土坑22		瓦器	椀
18	117	1区	土坑7		瓦器	椀
18	118	1区	ピット3		瓦器	椀
18	119	1区	ピット5		瓦器	椀
18	120	1区	溝3		瓦器	椀
18	121	1区	土坑10		瓦器	椀
18	122	1区	土坑2		瓦器	椀
18	123	1区	土坑8		瓦器	椀
18	124	1区	土坑19		瓦器	椀
18	125	1区	土坑2		瓦器	椀
18	126	1区	土坑2アゼ		瓦器	椀
18	127	1区	土坑9		瓦器	椀
18	128	1区	土坑13		瓦器	椀

表2 遺物観察表

挿図番号	掲載番号	調査区	遺構	層位	種類	器種
18	129	1区	土坑24		瓦器	椀
18	130	1区	溝1		瓦器	椀
18	131	1区	土坑30		瓦器	皿
18	132	1区		土坑10下層	瓦器	椀
18	133	1区	土坑21		瓦器	椀
18	134	1区	土坑26		瓦器	椀
18	135	1区	土坑31		瓦器	椀
19	136	1区	落ち込み1		瓦	平瓦
19	137	1区	土坑10		土師質	鉢
19	138	1区	土坑1		土師質	甕
19	139	1区	土坑3		須恵質	片口
19	140	1区	土坑1		土師質	羽釜
19	141	1区	土坑28		銭	嘉祐元宝
19	142	1区	土坑2		銭	嘉祐通宝
20	143	1区	土坑23		鉄製品	刀子
20	144	1区	土坑23		瓦器	椀
20	145	1区	土坑23		瓦器	皿
20	146	1区	土坑23		瓦器	皿
20	147	1区	土坑23		瓦器	皿
20	148	1区	土坑23		瓦器	皿
20	149	1区	土坑23		瓦器	皿
21	150	1区	アゼ1東	焼土	土師器	皿
21	151	1区	アゼ1東中央～東側	暗褐色砂	土師器	皿
21	152	1区	アゼ1東	焼土	土師器	皿
21	153	1区		暗褐色砂	土師器	皿
21	154	1区		暗褐色砂	土師器	皿
21	155	1区		暗褐色砂	土師器	皿
21	156	1区	アゼ1～2北側	暗褐色砂下層	土師器	皿
21	157	1区		暗褐色上層	青磁	椀
21	160	1区		遺構精査中	土師器	皿
21	162	1区		暗褐色砂上層	土師器	皿
21	163	1区		暗褐色砂下層	土師器	皿
21	164	1区	アゼ1東	焼土	瓦器	皿
21	165	1区			瓦器	皿
21	166	1区	アゼ1付近	落ち込み	瓦器	皿
21	170	1区	アゼ1東	焼土 上層	瓦器	椀
21	171	1区	アゼ1近辺	落ち込み	瓦器	椀
21	172	1区	アゼ1東	おち込み	瓦器	椀
21	174	1区	アゼ1東	焼土上層	瓦器	椀
21	175	1区	アゼ1東	焼土 下層	瓦器	椀
21	175	1区	アゼ1東中央	焼土上層	瓦器	椀
21	176	1区	アゼ1東	焼土上層	瓦器	椀
21	177	1区			青磁	椀
21	178	1区		暗褐色上層	青磁	椀
21	180	1区	アゼ1東	焼土	青磁	椀
22	181	1区		暗褐色土	瓦質	羽釜
22	182	1区		暗褐色砂上層	瓦質	甕
22	183	1区	アゼ1東	焼土下層	瓦質	羽釜
22	185	1区	アゼ1東	焼土	瓦質	羽釜
22	186	1区		暗褐色砂	石製品	石鍋転用石製品
22	187	1区		暗褐色砂上層	瓦質	甕
22	188	1区	アゼ1東北側	暗褐色砂下層	土師質	甕
22	189	1区			土師質	羽釜
22	190	1区		アゼ1下層	土師質	甕
22	191	1区		暗褐色砂上層	瓦質	羽釜
22	193	1区		暗褐色砂上層	土師質	羽釜
22	194	1区		暗褐色砂	土師質	甕
23	195	1区		包含層	石製品	石剣
23	196	1区	溝1		石製品	石鏃
23	197	1区	アゼ1東	焼土	石製品	石匙
25	198	5区	43アゼ		瓦器	皿
25	199	5区	22		土師器	皿
25	200	5区	32アゼ		瓦器	椀
25	201	5区	43アゼ		瓦器	椀

表3 遺物観察表

挿図番号	掲載番号	調査区	遺構	層位	種類	器種
25	202	5区	19		土師器	皿
25	203	5区	31、36		土師器	皿
33	204	9区東側	東西側溝		土師器	皿
33	205	9区西側		暗褐色砂上層	瓦器	皿
33	206	9区東側	南北側溝		瓦器	皿
33	207	9区西側	落ち込み		瓦器	皿
33	208	9区西側	落ち込み		瓦器	皿
33	210	9区		中央アゼ1層目	瓦器	皿
33	211	9区		中央アゼ1層目	瓦器	椀
33	212	9区		中央アゼ1層目・中央焼土層、中央アゼ2層目	瓦器	椀
33	213	9区東側	南北側溝		瓦器	椀
33	214	9区東側	南北側溝		瓦器	椀
33	215	9区東側		灰色砂 最上層	瓦器	羽釜
33	216	9区東側		灰色砂 最上層	瓦質	すり鉢
33	217	9区東側		灰色砂 最上層	瓦質	甕
33	218	9区東側		焼土	銅銭	熙寧元宝
38	219	10区	22		瓦器	椀
38	220	10区	22		瓦器	椀
38	221	10区	22		瓦器	椀
38	222	10区	22		瓦器	椀
38	223	10区	22		瓦器	椀
38	224	10区	22		瓦器	皿
38	225	10区	22		瓦器	皿
38	226	10区	22		土師器	皿
38	227	10区	22		土師器	皿
38	228	10区	22		土師器	皿
38	229	10区	22		土師器	皿
38	230	10区	22		土師器	皿
38	231	10区	22		土師器	皿
38	232	10区	22		土師器	皿
38	233	10区	22		土師器	皿
38	234	10区	22		土師器	皿
38	235	10区	22		土師器	皿
38	236	10区	22		土師器	皿
38	237	10区	22東側		瓦質	
39	238	10区	24東西アゼ		瓦質	椀
39	239	10区	24		瓦器	椀
39	240	10区	24南北アゼ		瓦器	椀
39	241	10区	24		瓦器	椀
39	242	10区	24		土師器	皿
39	243	10区	24		土師器	皿
39	244	10区	24		土師器	皿
39	245	10区	24		土師器	皿
39	246	10区	24東西アゼ		土師器	皿
39	247	10区	24		土師器	皿
39	248	10区	24		土師器	皿
39	249	10区	24		土師器	皿
39	250	10区	24		土師器	皿
39	251	10区	24		土師器	皿
39	252	10区	24		瓦質	羽釜
40	253	10区	26		瓦器	椀
40	254	10区	26		瓦質	搦鉢
40	255	10区	26		磁器	碗
41	256	10区	22			
42	257	10区西半	斜面盛土		瓦器	椀
42	258	10区西半	斜面盛土		瓦器	皿
42	259	10区西半	斜面盛土		瓦器	皿
42	260	10区西半	斜面盛土		土師器	皿
42	261	10区西半	斜面盛土		土師器	皿

表4 遺物観察表

版 图



1トレンチ全景（東から）



1トレンチ全景（西から）



2トレンチ全景 (東から)



2トレンチ19. 20 (東から)



上19 (南から)



下20 (南から)



3トレンチ全景（東から）



3トレンチ全景（西から）



1・2区航空写真



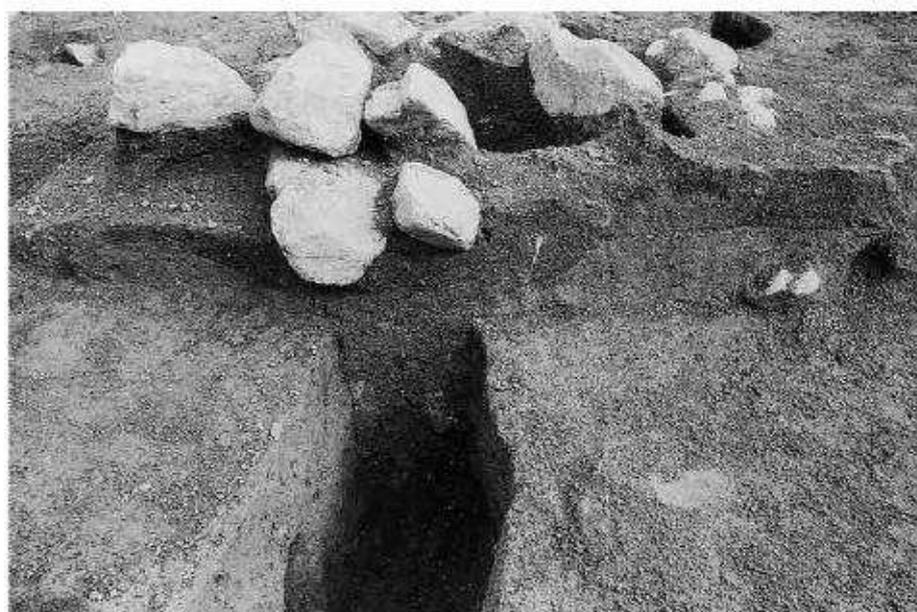
1区東半(南から)



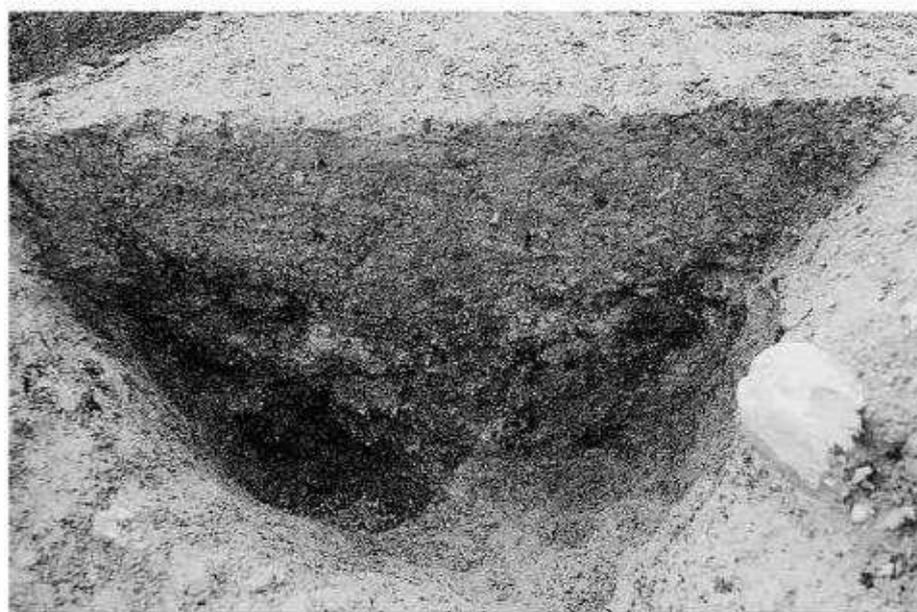
1区西半（南東から）



2区全景（西から）



溝1・土坑9
断面



溝2
断面



溝2



溝4



建物1



土坑1
出土状況



土坑2



土坑4



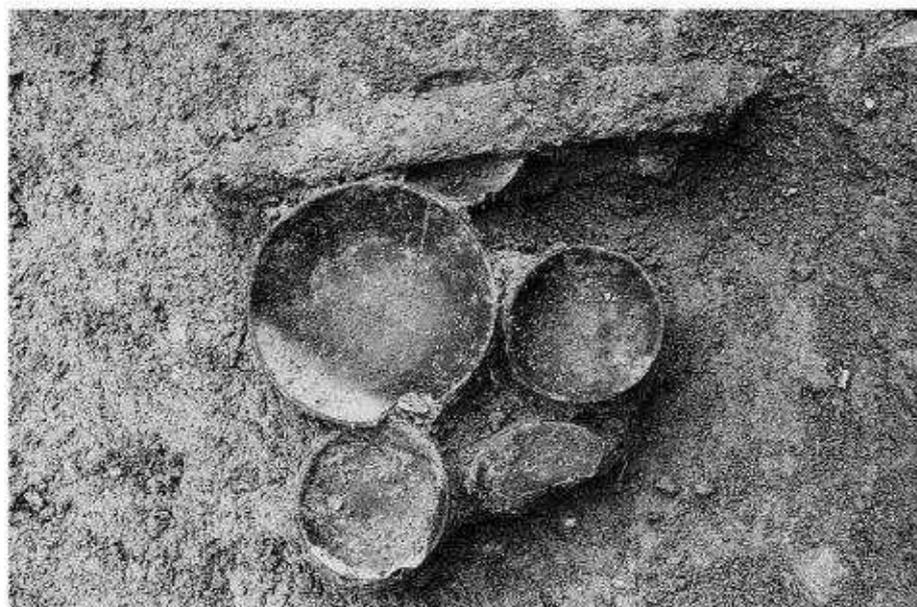
土坑9



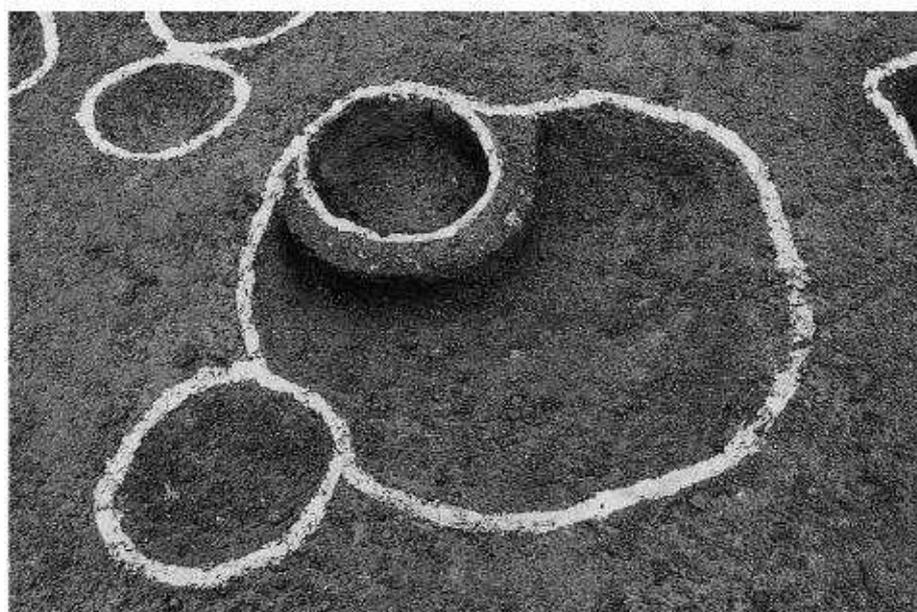
土坑10



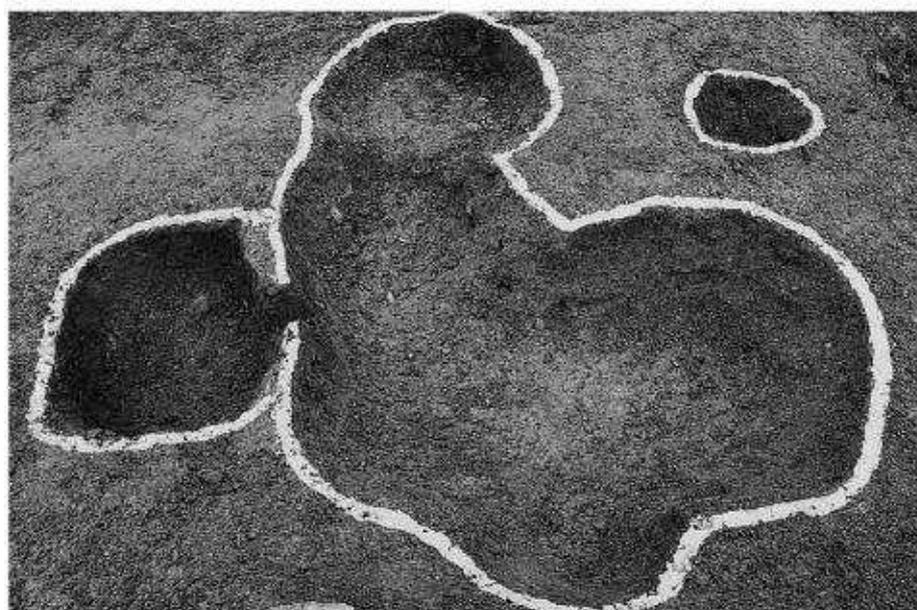
土坑23



土坑23
出土状況



土坑24



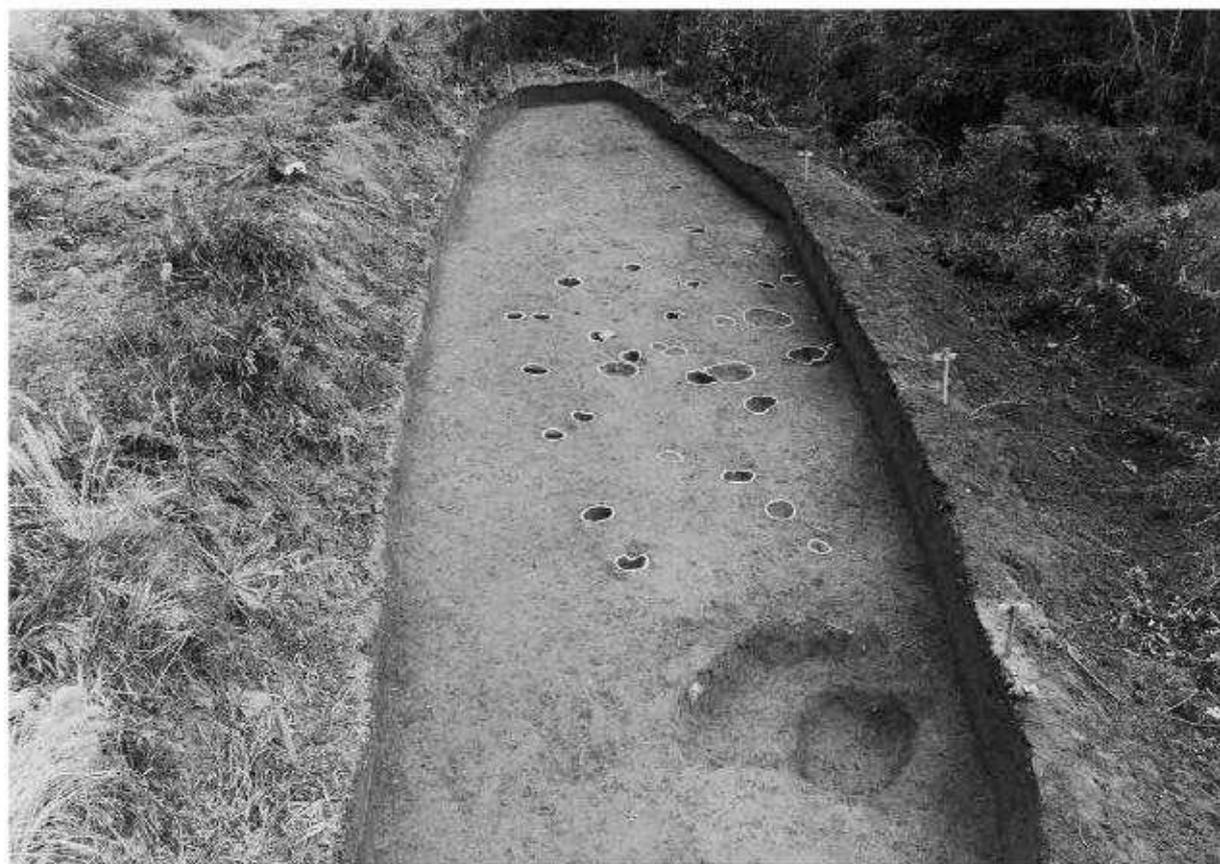
土坑25・26



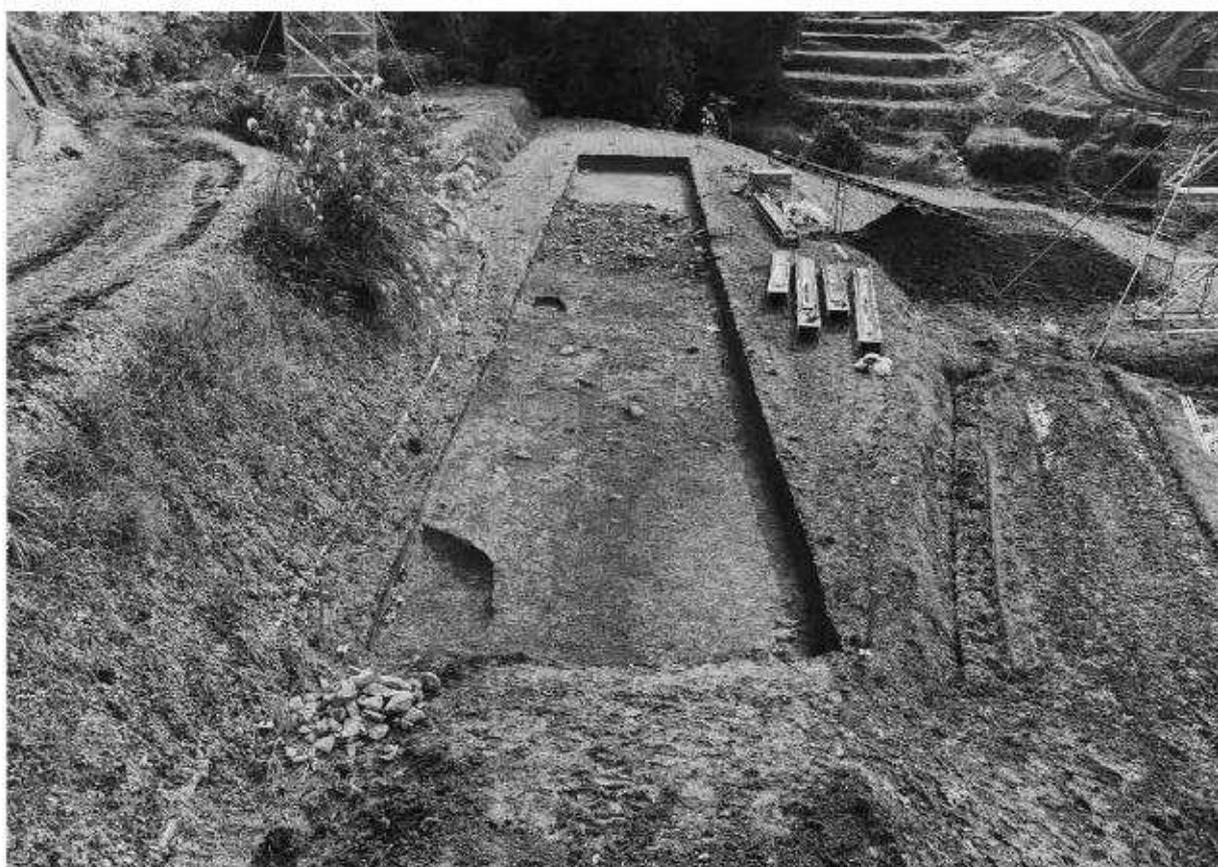
土坑27



5区全景（西から）



5区拡張全景（西から）



6区全景（西から）



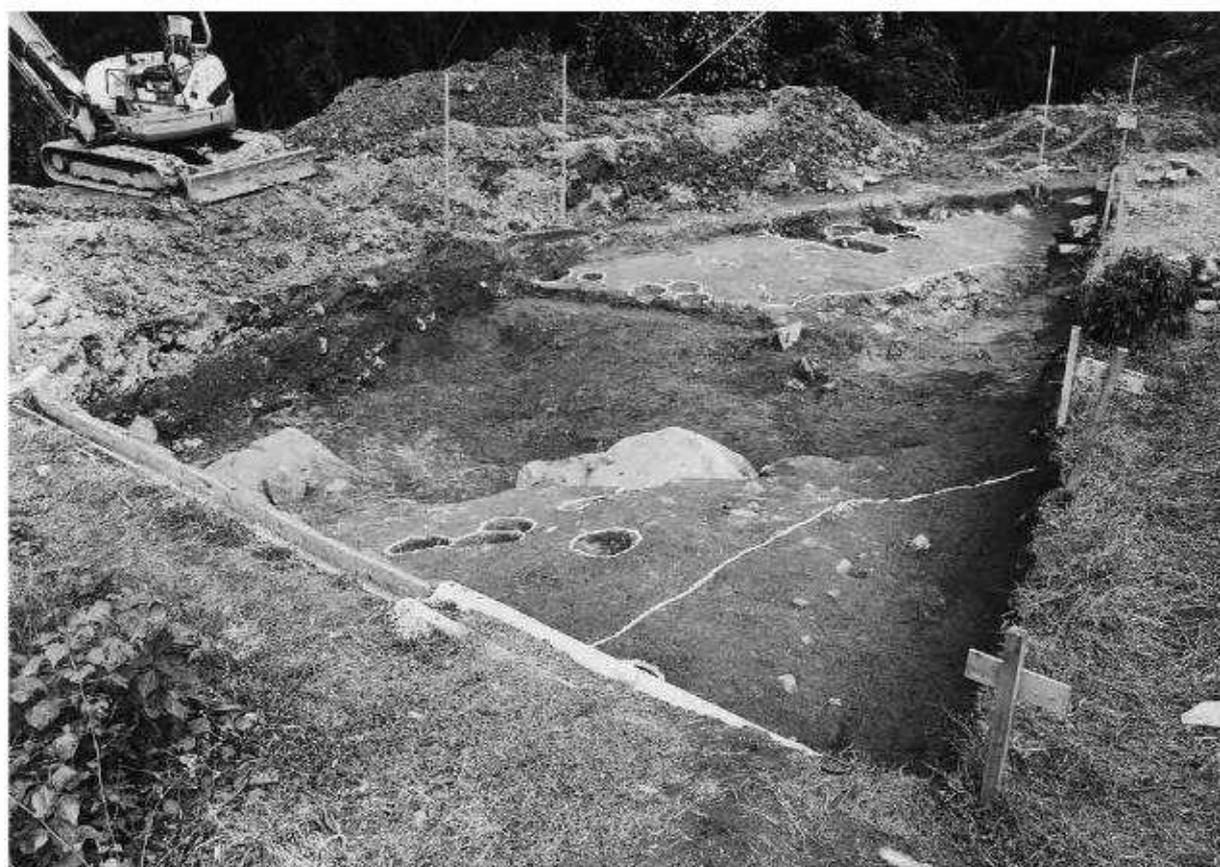
7区全景（北東から）



8区全景（北から）



5区から8区（南から）



9区全景（西から）



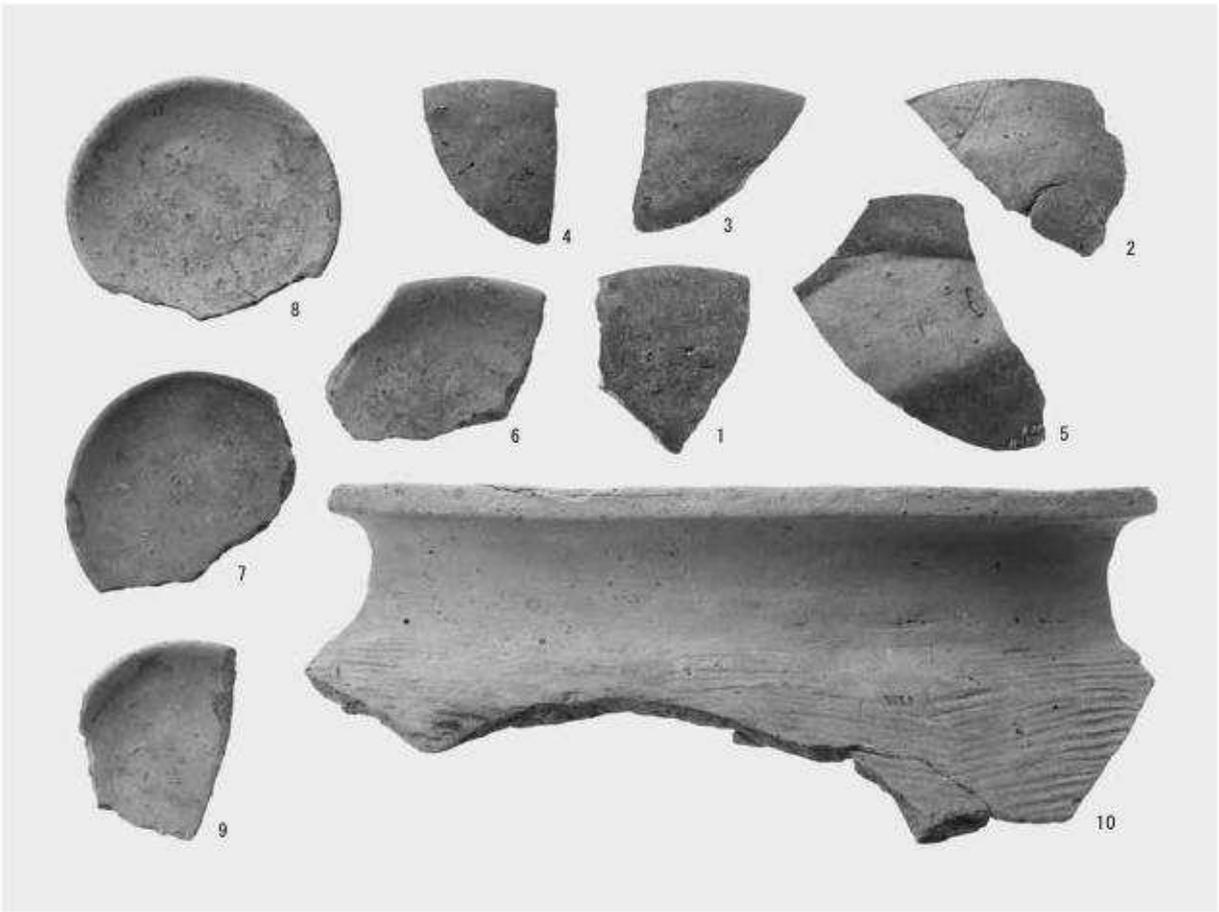
10区第1面全景（東から）



10区第2面全景（東から）



11区全景（西から）





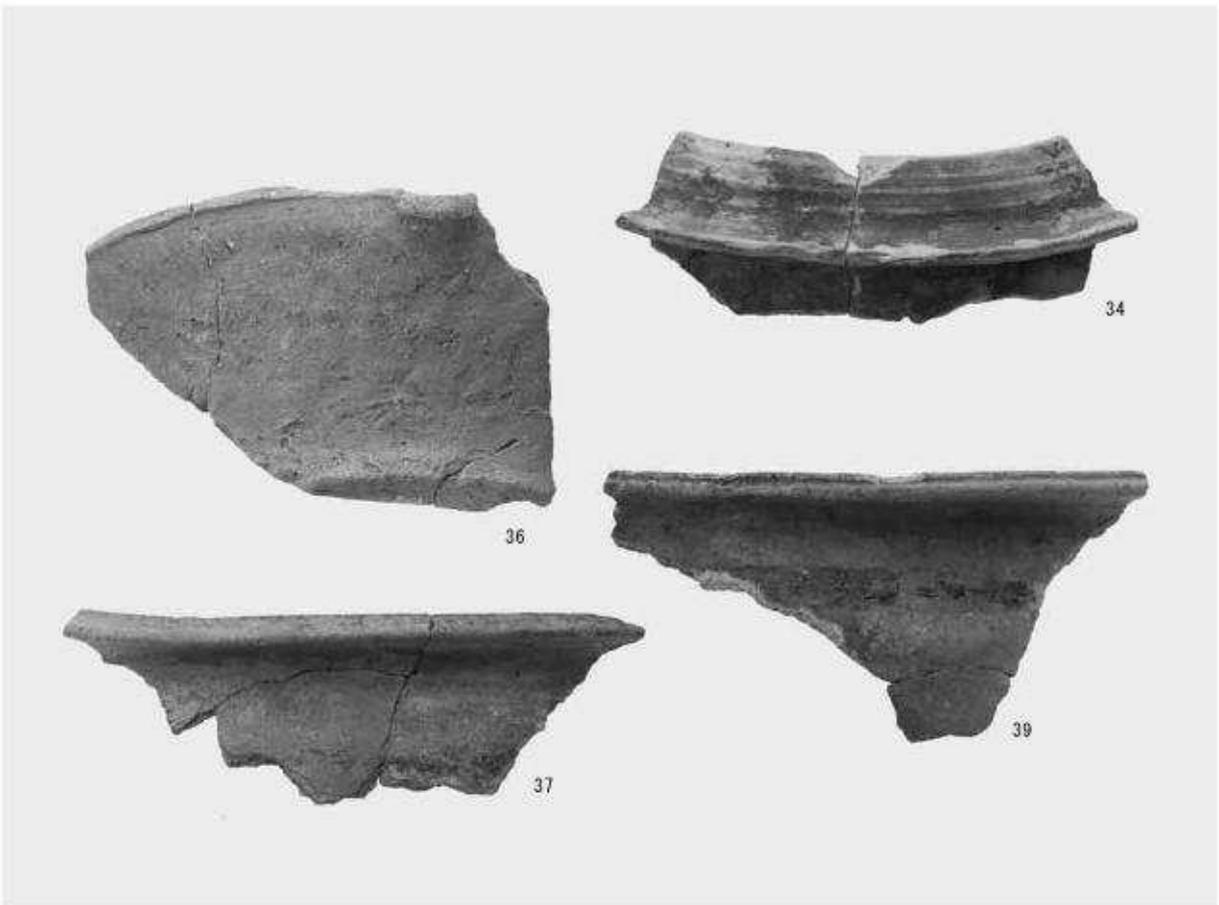
土坑19出土遺物

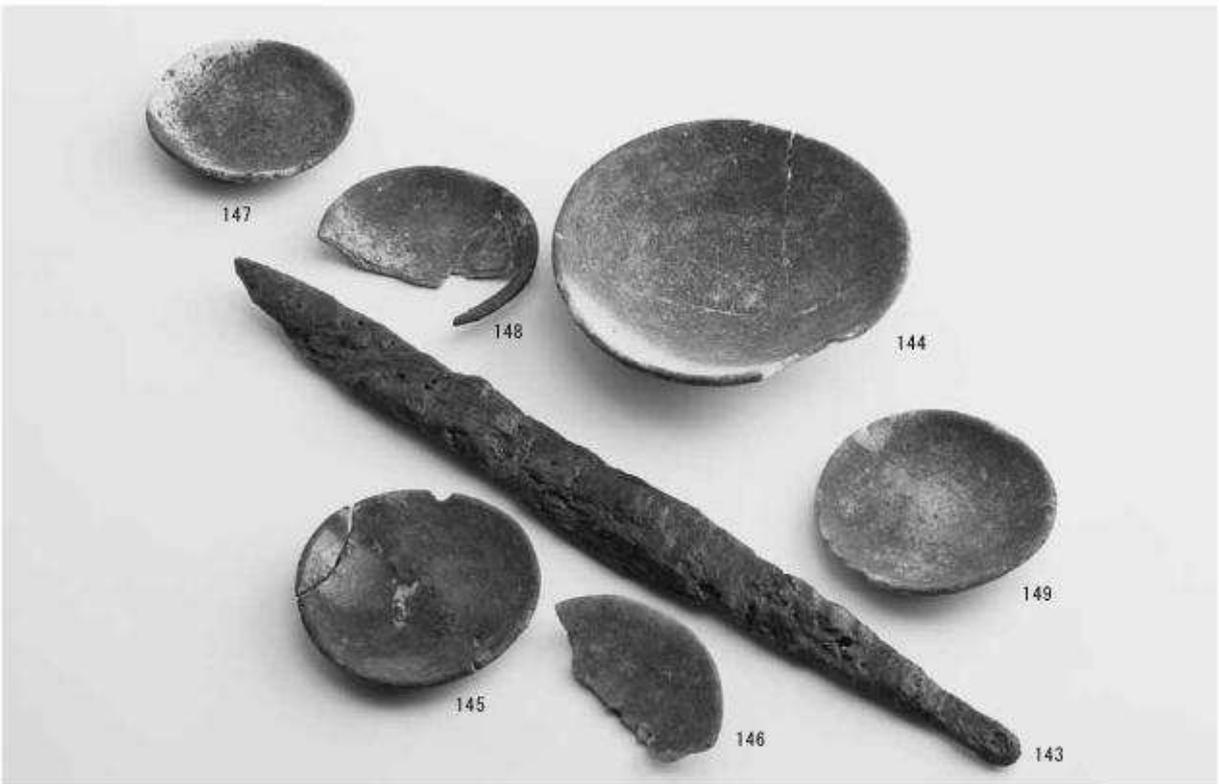


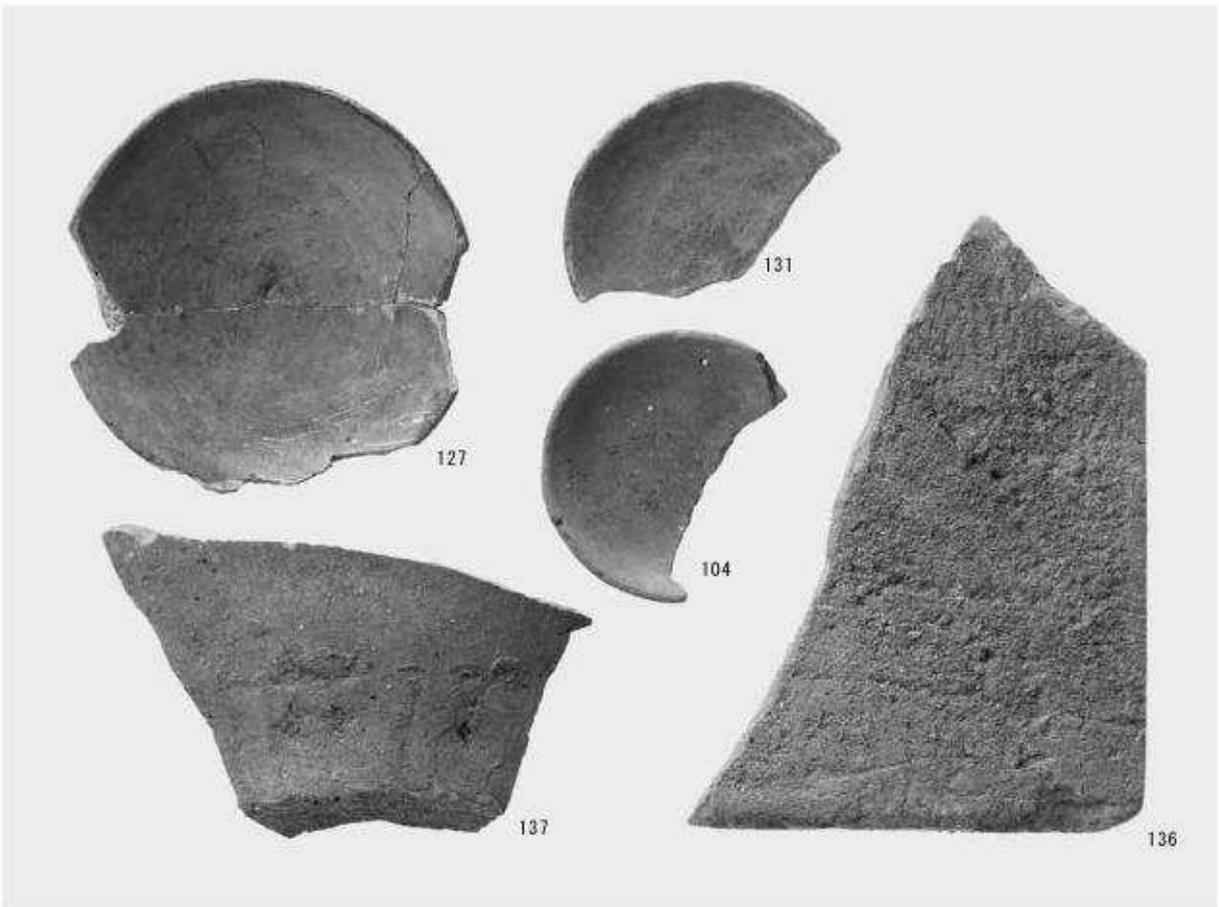
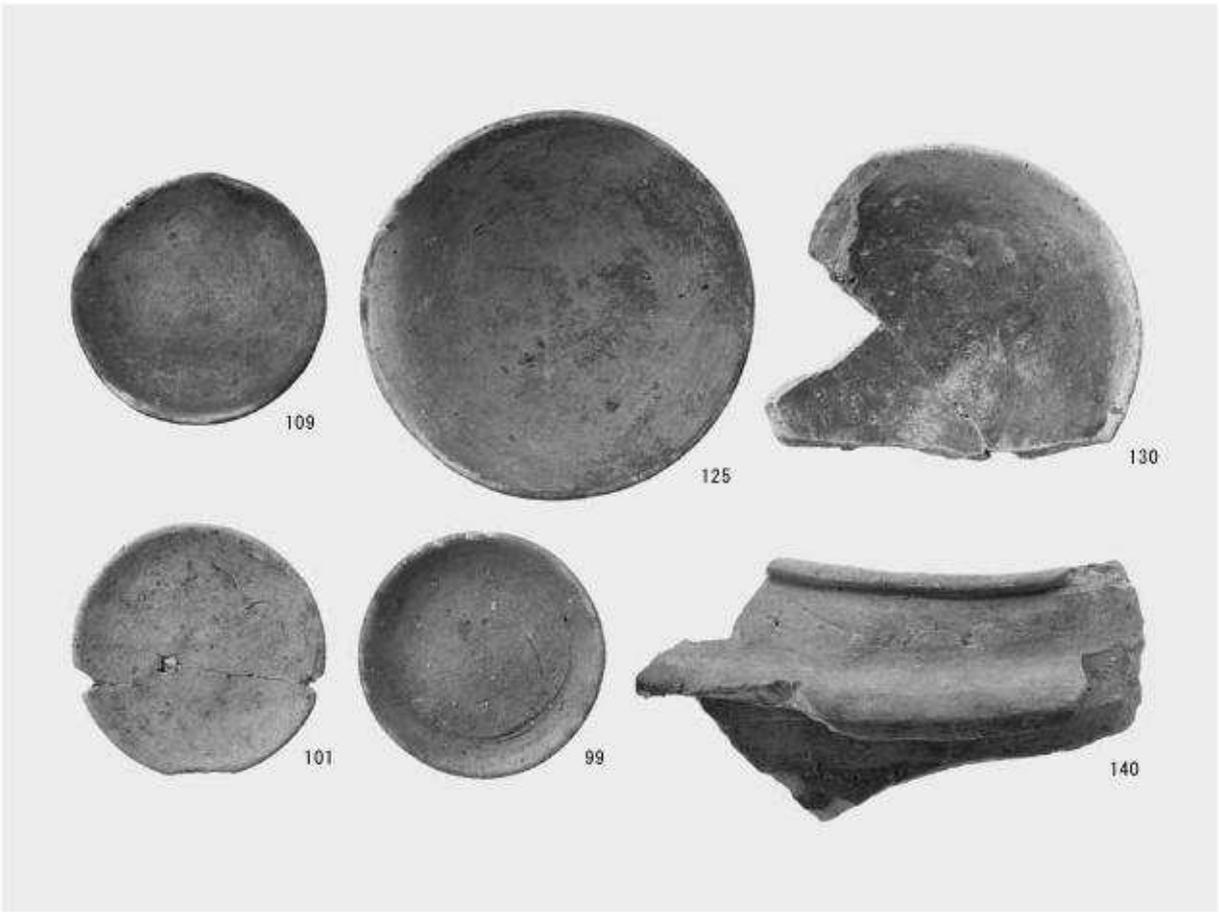
土坑24出土遺物

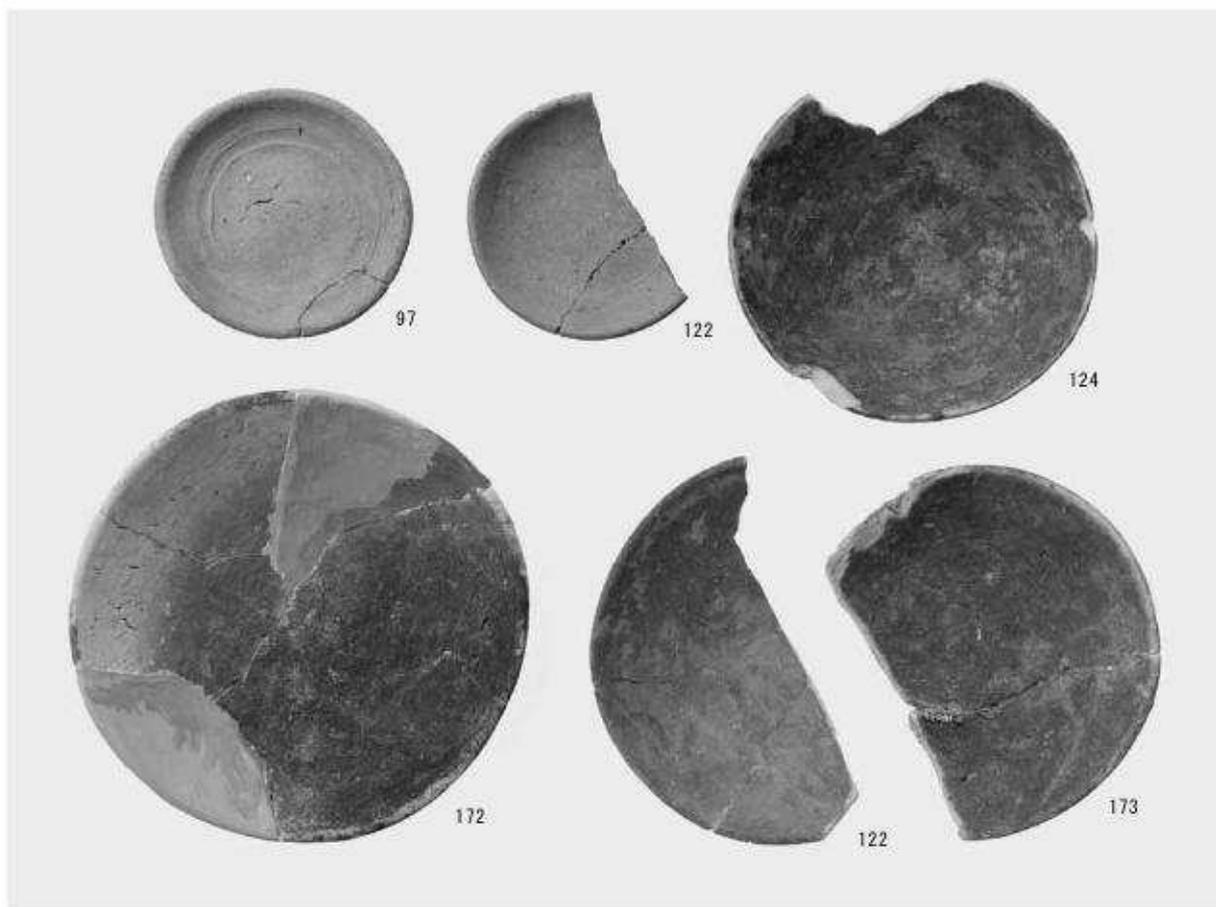
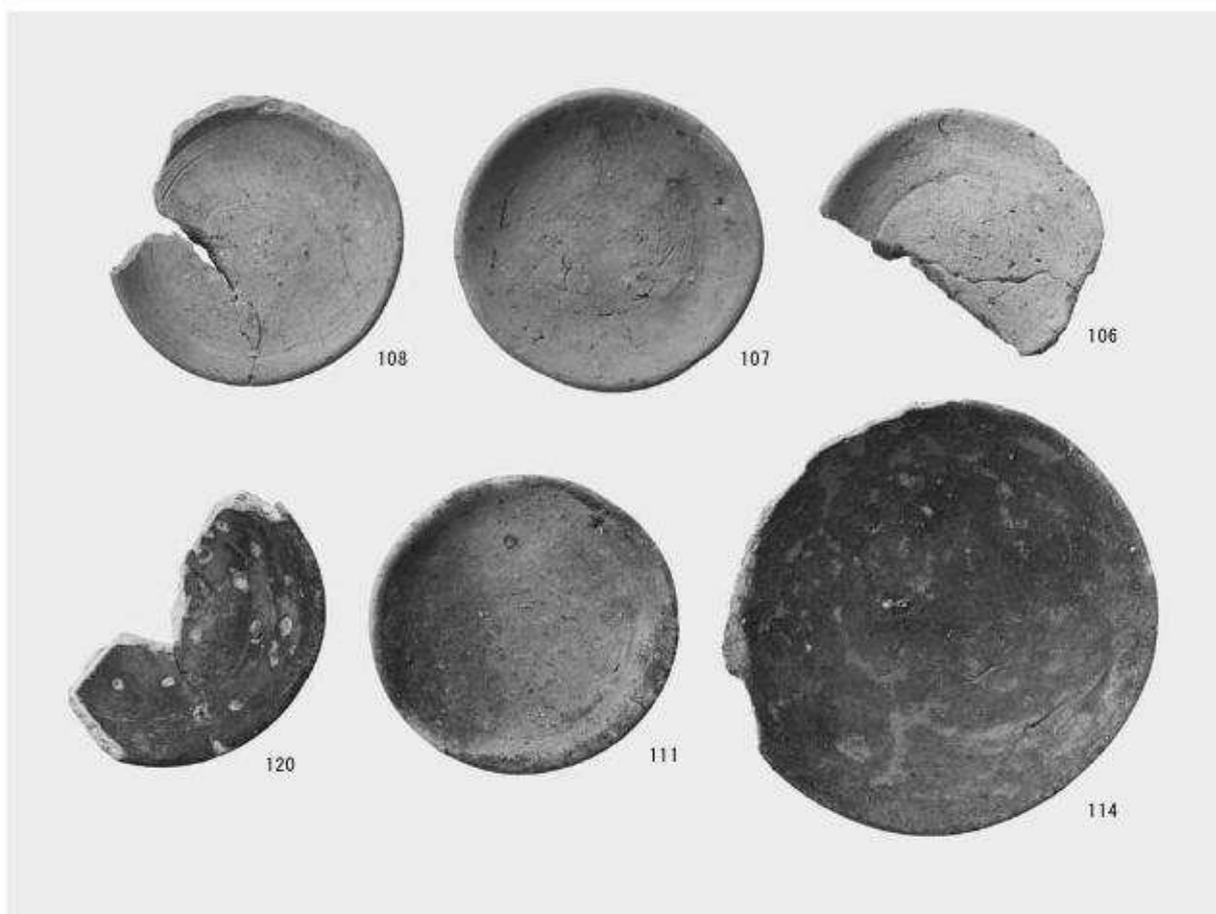


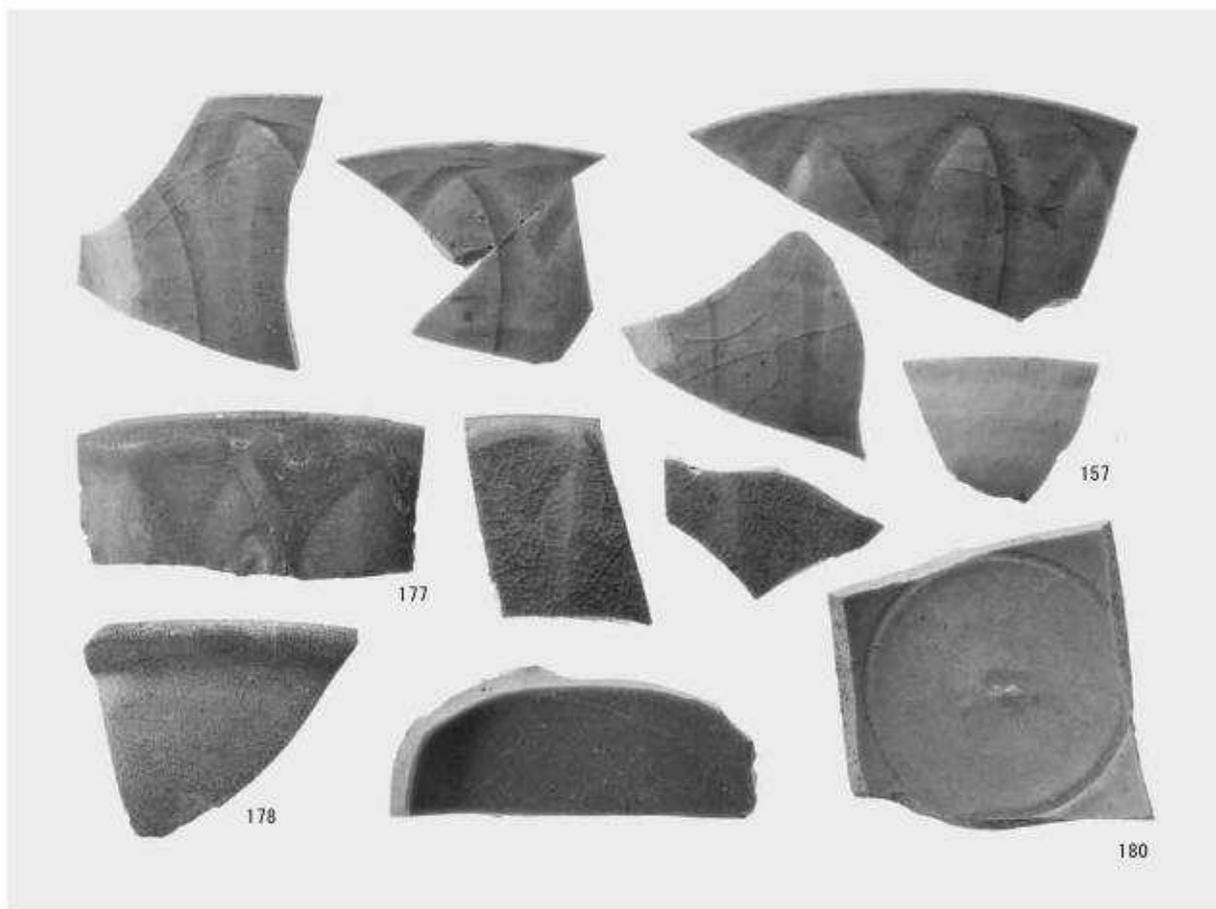
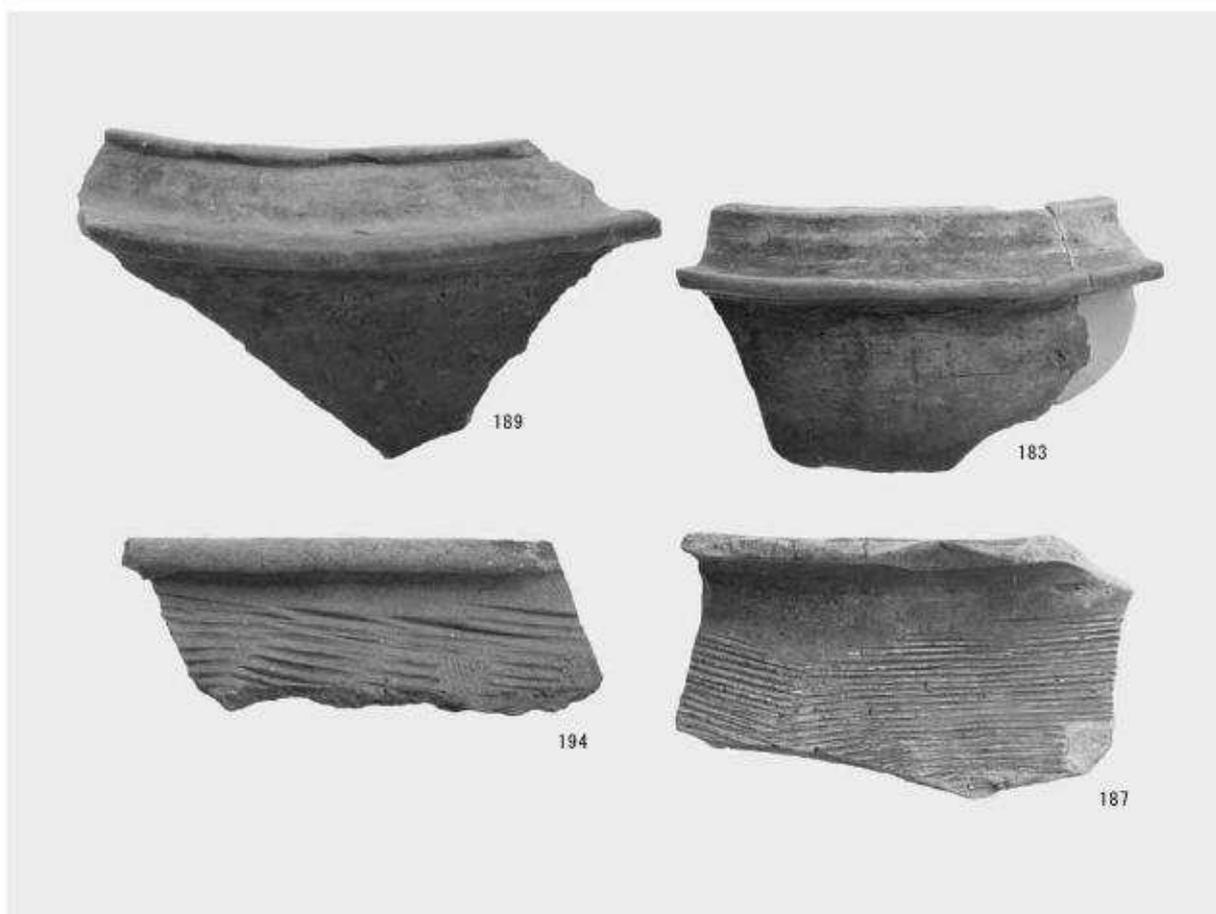
10区盛土出土遺物

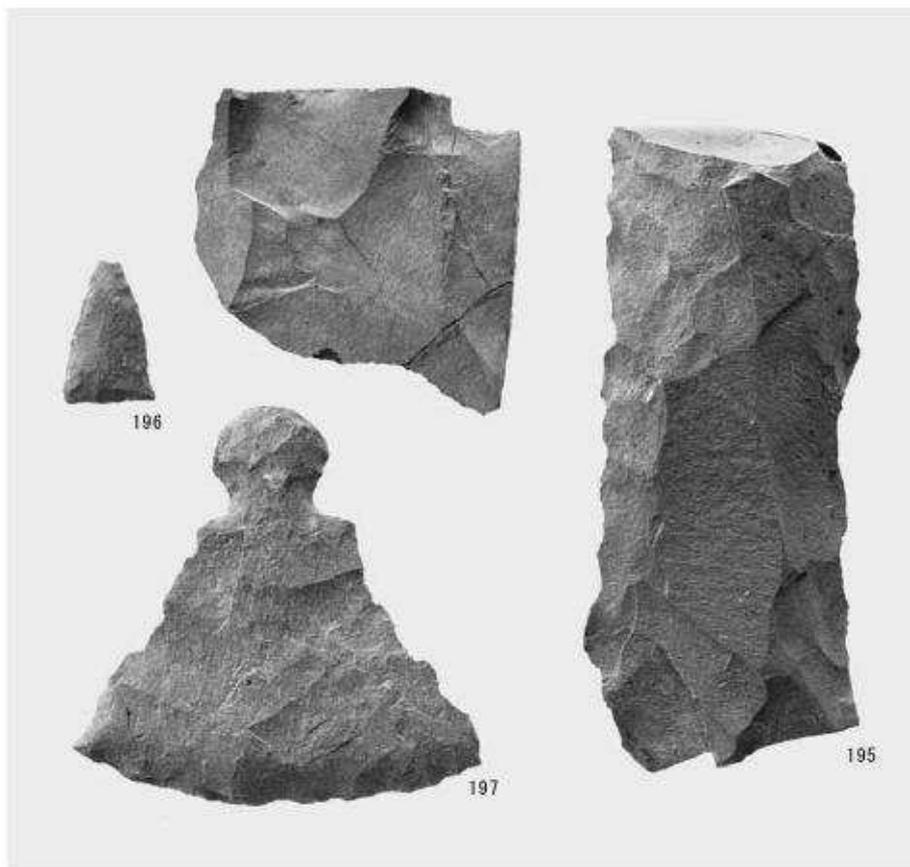
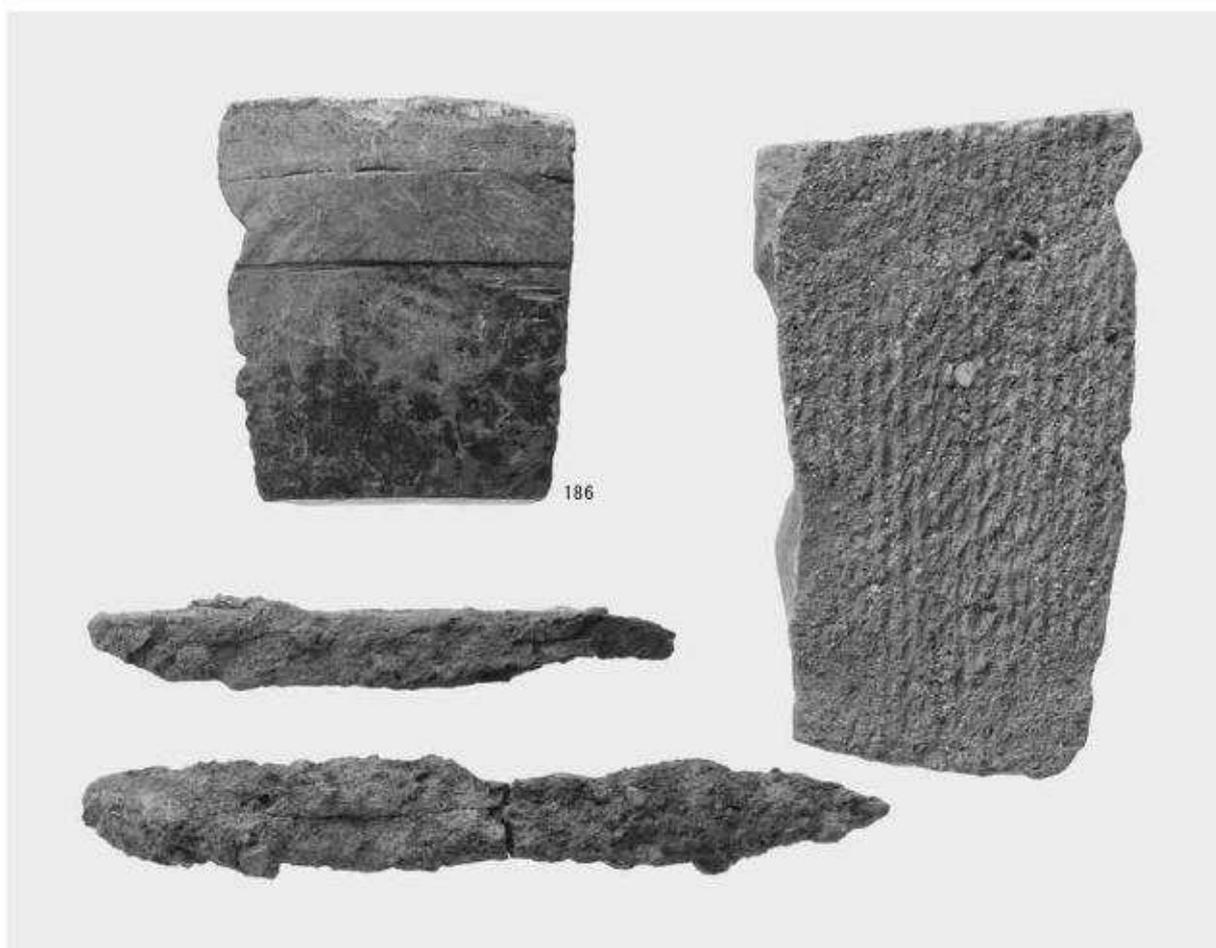


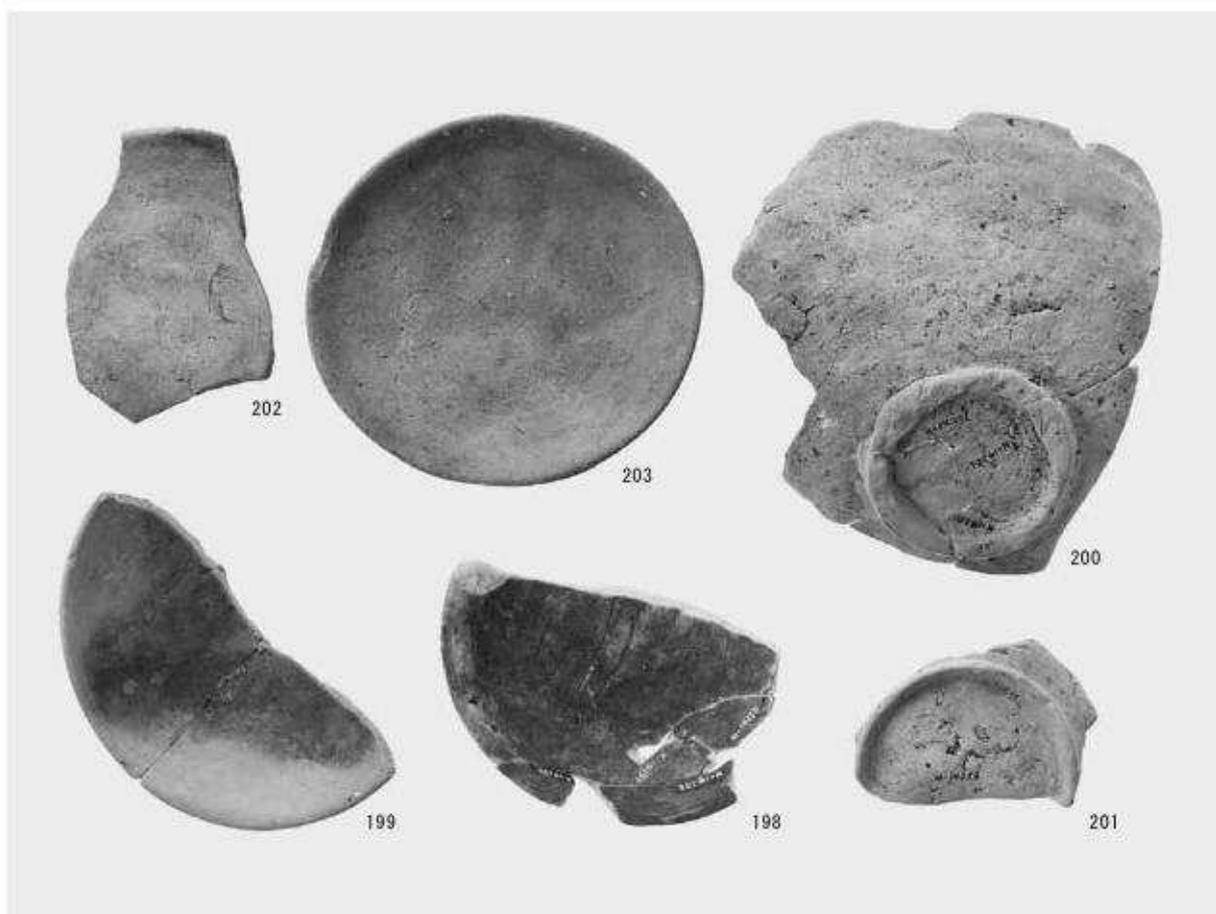


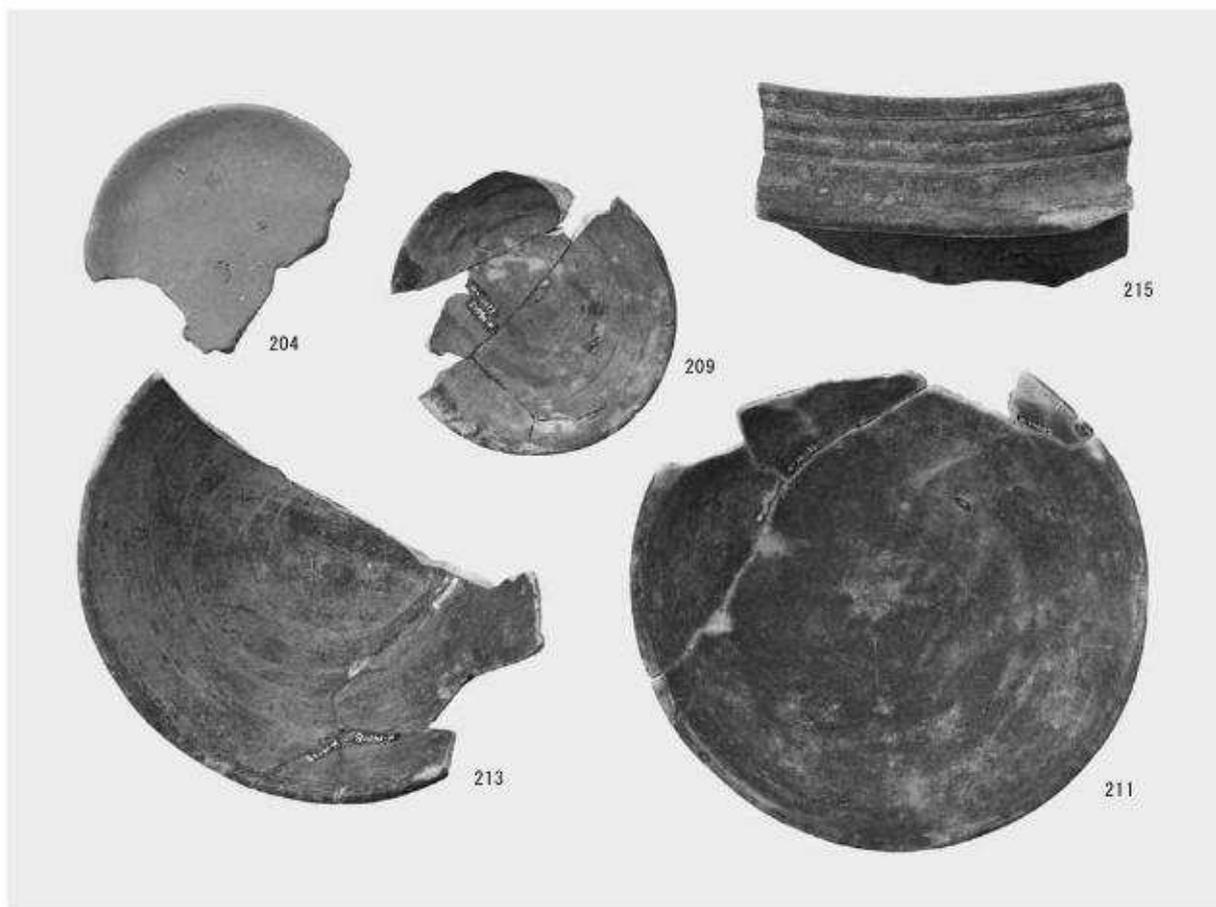


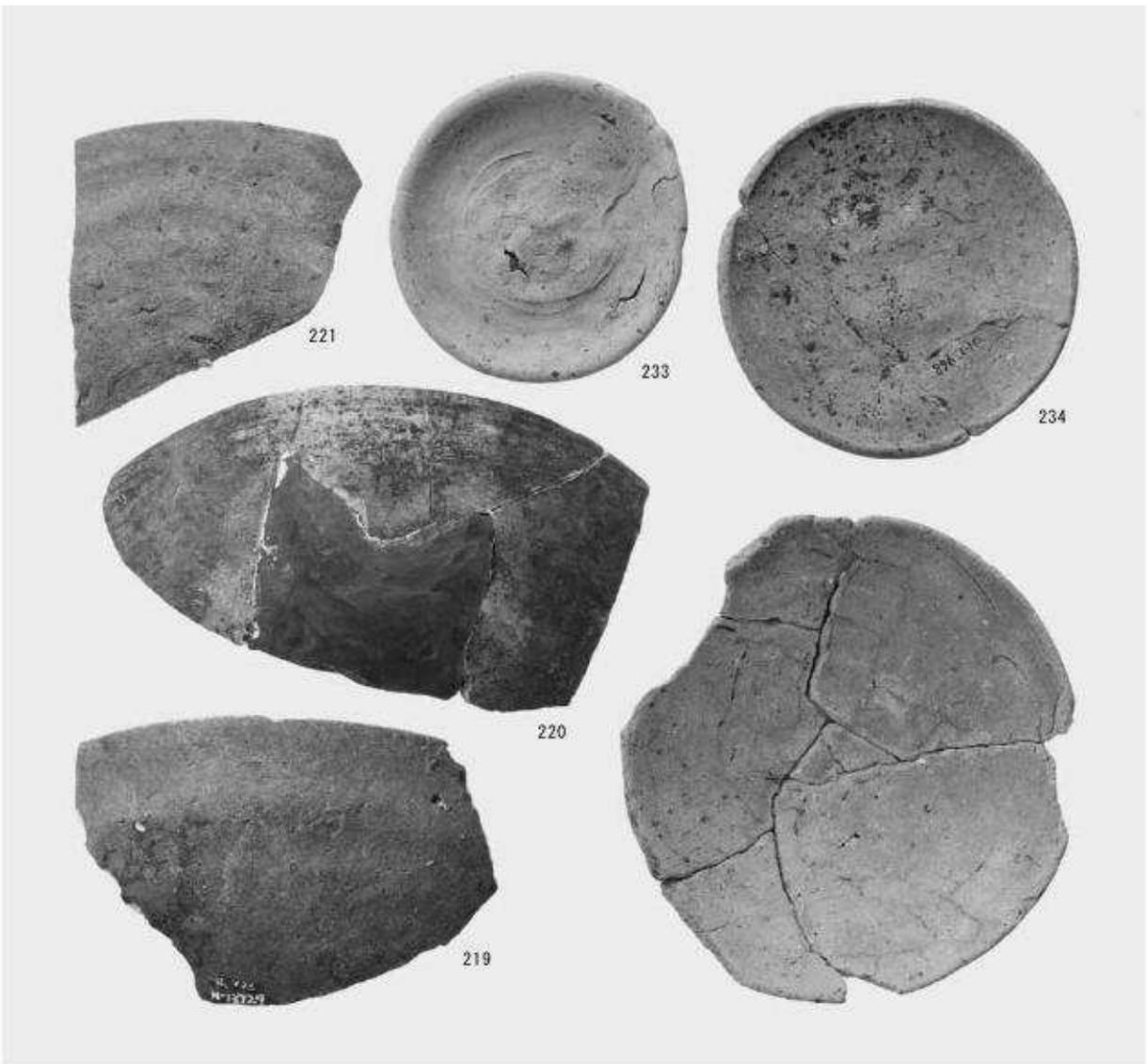












報告書抄録

ふりがな	おおいいせきはつくつちょうさがいよう・さん
書名	太井遺跡発掘調査概要・Ⅲ
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	竹原伸次 島津知子
編集機関	大阪府教育委員会 河内長野市教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 ℡06-6941-0351 (代) 〒586-8501 大阪府河内長野市原町一丁目1番1号 ℡0721-53-1111 (代)
発行年月日	2014年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積(m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
おおいせき 太井遺跡	かひちながのし 河内長野市 おおいせき 太井地内	27126	151	34° 24′ 45″	135° 37′ 28″	一時調査 2012.6.4 \ 2012.7.17	132 m ²	記録保存調査
				34° 24′ 34″	135° 37′ 44″	二次調査 2012.8.2 \ 2013.1.23	1599 m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太井遺跡	集落跡	縄文時代中期後半		縄文土器 サヌカイト剥片	
		鎌倉時代後期～ 南北朝時代	掘立柱建物 中世墓	瓦器・土師質土器・瓦質 土器・青磁・白磁	中世墓 (一基から副葬品として 鉄刀、瓦質小皿が出土)
要約	鎌倉時代後期～南北朝時代の集落及び中世墓群が発見された。 遺構は伴わないが、縄文時代中期後半の土器が出土した。				

太井遺跡発掘調査概要・Ⅲ

発 行 大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪府中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351 (代表)
河内長野市教育委員会
〒586-8501 河内長野市原町1丁目1番1号
TEL 0721-53-1111 (代表)

発行日 平成26年3月31日

印 刷 ㈱近畿印刷センター
〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号